高野山結界道、不動坂、黒河道、三谷坂
及び関連文化財学術調査報告書

２０１２

和歌山県教育委員会

結界道

不動坂

黒河道

三谷坂

高野山結界道、不動坂、黒河道、三谷坂
及び関連文化財学術調査報告書

２０１２

和歌山県教育委員会

序　　文

本書は、世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に係る関連文化財で、文化財価値を有しているが、国の史跡指定を受けていない文化財について、その価値付けをめざした調査報告書です。

平成16年7月に世界遺産登録された『紀伊山地の霊場と参詣道』は、「吉野・大峰」「熊野三山」「高野山」の三つの山岳霊場、それらを結ぶ「大峰奥駈道」「熊野参詣道」「高野山町石道」という参詣道、その周囲を取り巻く「文化的景観」です。しかし、県内には同等の価値を持つにもかかわらず、未指定の参詣道及び関連文化財が存在します。そのため、和歌山県教育委員会では、文化財指定促進を図るため、平成22年度「紀伊山地の霊場と参詣道」関連文化財指定検討委員会を設置しました。

高野山は、空海が唐からもたらした真言密教の聖山です。高野山には壇上伽藍と奥之院の二大聖域があります。壇上伽藍は、大師が弘仁7年（816）に創設した世界最初の本格的伽藍であり研鑽修行の聖域です。奥之院は、承和2年（835）に高野山に入定された大師を慕う人々により造られた霊場です。高野への登山道は、高野七口と呼ばれるように東西南北さまざまな方向から通じています。代表的な道は、町石道です。町石道は山麓の慈尊院から大門を経て、根本大塔・奥之院に至る道で町石が一町ごとにたてられています。

本報告書では、金剛峰寺境内を囲む峰々を伝う結界道、参詣道として不動坂、黒河道、三谷坂、大峰道及び西国街道並びに関連文化財として、黒河道の入口に位置する定福寺、三谷坂の入口に位置する丹生酒殿神社及び町石道の入口に位置する勝利寺の学術的価値の究明を行いました。

最後になりましたが、報告書の刊行に際しましてご協力をいただきました多くの皆様方に、心から感謝申し上げます。

平成24年3月

和歌山県教育委員会
教育長　西　下　博　通

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第１節　経　緯 …… 1
　第２節　経　過 …… 1

第２章　高野地域の地形と植生 …… 3
　第１節　聖地高野山の地形 …… 3
　　１　宗教者のみた高野山の地形 …… 3
　　２　地理学者のみた高野山 …… 4
　　３　地形の分析 …… 5
　　４　おわりに …… 6
　第２節　植　生 …… 7

第３章　高野地域の集落分布と参詣道の変遷 …… 12
　第１節　はじめに …… 12
　第２節　高野山を廻る集落と道路 …… 12
　第３節　近世の高野七口と街道の利用 …… 13
　第４節　近代的な交通の整備 …… 14
　第５節　交通機関の利用者と道路の変容 …… 15

第４章　高野参詣道の歴史 …… 16
　第１節　空海の高野山開創 …… 16
　第２節　摂関・院政期の高野参詣と参詣道 …… 16
　　１　摂関家・王家の高野参詣 …… 16
　　２　摂関・院政期の高野参詣道 …… 17
　　３　高野参詣の作法 …… 17
　　４　覚法法親王の高野参籠 …… 20
　第３節　鎌倉～室町時代の高野参詣と参詣道 …… 20
　　１　町石の建立 …… 20
　　２　後宇多法皇の高野参詣 …… 21
　　３　庶民の高野参詣 …… 21
　第４節　江戸時代の高野参詣と参詣道 …… 22
　　１　江戸時代の高野山 …… 22
　　２「高野七口」の成立 …… 22

第５章　高野参詣道 …… 24
　第１節　高野参詣道の概観 …… 24
　　１　町石道と高野参詣道 …… 24
　　２　紀ノ川河岸からの参詣道 …… 25
　　３　小辺路 …… 25
　　４　高野山結界道 …… 26
　　５　不動坂と京大坂道 …… 28
　　６　黒河道 …… 30
　　７　大峰道 …… 34
　　８　西国街道 …… 35
　　９　三谷坂 …… 37

第６章　参詣道に関連する文化財 …… 39
　第１節　勝利寺 …… 39
　　１　空海と勝利寺の位置づけ …… 39
　　２　高野参詣道の勝利寺 …… 39
　　３　勝利寺の文化財について …… 41
　第２節　定福寺 …… 44
　　１　由　緒 …… 44
　　２　本尊阿弥陀如来坐像（和歌山県指定文化財） …… 44
　　３　九重石塔（橋本市指定文化財） …… 45
　　４　庫裏（国登録有形文化財建造物） …… 45
　　５　民俗文化財 …… 46
　　６　黒河道と賢堂定福寺 …… 47

第３節　丹生酒殿神社 …… 48

第７章　参詣道の石造物 …… 50
第１節　高野山結界の道（女人道）…… 50
１　「女人くまの道」の在銘地蔵石仏 …… 50
２　「くまの道、やまみち」在銘の明和２年（1765）地蔵石仏 …… 50
３　お助け地蔵所在一石五輪塔 …… 50
４　真別所の鎌倉期五輪塔 …… 51
第２節　高野山結界の道（三山）…… 51
１　摩尼山頂文明期一石五輪塔 …… 51
２　摩尼山頂享保５年（1720）の地蔵石仏 …… 51
３　楊柳山頂室町時代五輪塔 …… 51
４　転軸山頂鎌倉時代反花座 …… 51
５　転軸山頂室町時代宝篋印塔 …… 51
６　転軸山頂文明 17 年（1485）一石五輪塔 …… 51
７　転軸山頂天文 14 年（1545）一石五輪塔 …… 52
８　転軸山頂元禄５年（1692）一石五輪塔 …… 52
第３節　不動坂 …… 52
１　華　瓶 …… 52
２　四寸岩 …… 53
３　「くまの道」の在銘地蔵石仏 …… 53
４　旧不動坂発見の寛政４年（1792）道標 …… 53
５　作水の地蔵堂内の一石五輪塔２基 …… 54
第４節　黒河道 …… 54
１　子継峠の永正９年（1512）地蔵石仏 …… 55
２　九度山町東郷応永４年（1397）五輪塔 …… 56
３　九度山町東郷喜吉３年（1443）五輪塔 …… 56
４　旧黒河村平地区文明期一石五輪塔 …… 58
５　橋本市賢堂定福寺弘安８年（1285）九重層塔 …… 58
６　橋本市賢堂定福寺鎌倉時代宝篋印塔 …… 58
７　橋本市賢堂定福寺享徳４年（1455）五輪塔 …… 59
８　橋本市賢堂定福寺文明８年（1472）五輪塔 …… 59
９　橋本市賢堂定福寺文安２年（1445）五輪塔 …… 59
第５節　西国街道 …… 59
１　伝静覚法親王五輪塔 …… 59
２　伝静覚法親王一石五輪塔 …… 60
第６節　三谷道 …… 61
１　頬切地蔵（自然石一重塔造り出し石造物） …… 61
２　笠石（南北朝時代笠塔婆） …… 63
３　丹生酒殿神社所在の相輪 …… 64
第７節　勝利寺 …… 65
１　室町時代五輪塔…… 65
２　天正８年（1580）一石五輪塔 …… 65
３　天正８年（1580）一石五輪塔 …… 65
４　天正 20 年（1592）一石五輪塔 …… 65
５　天正 20 年（1592）一石五輪塔 …… 65

第８章　史跡としての価値 …… 68
第１節　高野参詣道及び関連文化財調査範囲 …… 68
第２節　構成要素 …… 68
１　高野山結界道 …… 68
２　不動坂 …… 69
３　黒河道 …… 70
４　大峰道 …… 72
５　西国街道 …… 72
６　三谷坂 …… 73
第３節　関連文化財 …… 73
１　勝利寺 …… 73
２　定福寺 …… 74
３　丹生酒殿神社 …… 74

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　経　緯

和歌山県は、近畿地方の南部に位置し、日本最大の半島である紀伊半島の西半部に位置する。山は森林資源に恵まれ、黒潮に洗われる海と変化に富む海岸線などの自然や、高野山や熊野三山など歴史文化に恵まれた地域である。ラムサール条約に登録された串本沿岸海域は、本州という高緯度に位置していながら、黒潮の強い影響下で、世界最北の大サンゴ群生域があり、熱帯魚類をはじめ多くのサンゴ礁性生物が生息している。

平成 16 年 7 月、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録された。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」は、修験道の拠点である「吉野・大峰」、熊野信仰の中心地である「熊野三山」、真言密教の根本道場である「高野山」の三霊場とそれらを結ぶ参詣道、その周囲を取り巻く「文化的景観」からなる資産で、495.3ha の広大な地域である。

この世界遺産の保全と活用のため、平成 18 年に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会（三重県・奈良県・和歌山県）は、保存管理計画を策定した。その中で、「第Ⅵ章　今後の課題２　史跡の追加指定等」において、各参詣道は、「出来るだけ連続性のある線としての保存に努めることとする。指定等の保存措置が講じられていない和歌山市から田辺市間の紀伊路、西牟婁郡串本町から那智勝浦町間の大辺路についても、史跡指定に向けた事務を進め、できるだけ早い時期に適切な保存措置を講ずることが必要である。」と今後の課題が示された。

和歌山県教育委員会では、文化財的価値のある参詣道及び関連文化財が未指定のため、保全が十分でないものがなお残されている現状を踏まえて、平成 22 年度より、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」関連の文化財指定のための調査に入った。

第２節　経　過

平成 22 年度から開始した和歌山県教育委員会の調査は世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関連する道・社寺等の遺跡のうち往事の姿を比較的留めているものであり、市町村、県、国の史跡指定が可能な、価値を持つことが証明できる遺跡を対象に実施し調査検討を行った。

調査にあたっては、各分野の専門家から成る「紀伊山地の霊場と参詣道」関連文化財指定検討委員会を設置した。

平成 22 年度世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」関連文化財調査の対象地域は、高野地域、和歌山市から田辺市までの紀伊路、田辺市から那智勝浦町までの中辺路、田辺市から那智勝浦町の大辺路であった。

この調査の結果をもとに、古代からのルートと形状を保ち、和歌山県の歴史を考える上で重要な交通関連の史跡である伊都郡かつらぎ町の三谷坂、有田市から湯浅町の糸我峠、広川町から日高町の鹿ヶ瀬峠、田辺市の長尾坂が県教育委員会により文化財指定されている。また、田辺市の闘鶏神社境内も熊野三山の別宮的な存在で、広大な敷地に江戸時代の荘厳な社殿が残され、熊野信仰を考える上で重要な史跡であるとして、県指定文化財（史跡）に指定されている。

平成 23 年度は、更に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」関連文化財調査を進めるため、その学術的価値を確定するための３委員会を設置した。高野山結界道、不動坂、黒河道、三谷坂学術調査委員会、王子社及び関連文化財学術調査委員会及び闘鶏神社学術調査委員会（田辺市教育委員会と共同設置）の３つの委員会である。

高野山結界道、不動坂、黒河道、三谷坂学術調査委員会は各分野の専門家と該当市町の教育委員会教育長からなる。

高野地域の地形及び集落分布と参詣道の変遷につ

いては和歌山大学名誉教授水田義一、植生については和歌山大学教授高須英樹、高野参詣の歴史については高野山大学名誉教授山陰加春夫、高野参詣道及び勝利寺については総本山金剛峯寺執行・高野山真言宗教学部長・高野山大学名誉教授村上保壽、勝利寺の文化財については大阪大谷大学短期大学部教授須田勝嶄仁、丹生酒殿神社についてはかつらぎ町教育委員会生涯学習課文化財専門員和田大作、定福寺については橋本市教育委員会社会教育課主任大岡康之、参詣道の石造物については高野山大学図書館課長心得木下浩良の各氏に依頼して執筆いただいた。

高野山結界道、不動坂、黒河道、三谷坂学術調査委員会

上中居悦弘（高野町教育委員会教育長）
木下　浩良（高野山大学図書館課長心得･石造物）
下村　克彦（かつらぎ町教育委員会教育長）
高須　英樹（和歌山大学教育学部教授･生物学(植物形態学)）
高瀬　要一（公益財団法人琴ノ浦温山荘園理事長･造園史）
田口　　勝（九度山町教育委員会教育長）
松田　良夫（橋本市教育委員会教育長）
水田　義一（紀伊風土記の丘館長・歴史地理、副会長）
村上　保壽（総本山金剛峯寺執行・高野山真言宗教学部長・高野山大学名誉教授・思想史、会長）

事務局

教育長　西下　博通
生涯学習局長　井上　　誠
文化遺産課長　津井　宏之
副課長　濱口　　洋
専門員　渋谷　高秀
（世界遺産班長事務取扱）
教育企画員　入谷　和也
主任　仲　克幸
主査　木村　嘉夫
オブザーバー　佐藤　正知
（文化庁文化財部記念物課史跡部門主任文化財調査官）

報告書の分担

第１章　調査に至る経緯と経過　文化遺産課
第２章　高野地域の地形と植生
第１節　聖地高野山の地形　水田　義一
第２節　植生　高須　英樹
第３章　高野地域の集落分布と参詣道の変遷　水田　義一
第４章　高野参詣の歴史　山陰加春夫
第５章　高野参詣道　村上　保壽
第６章　関連文化財
第１節　勝利寺
１．空海と勝利寺の位置づけ　村上　保壽
２．高野参詣道の勝利寺　村上　保壽
３．勝利寺の文化財について　須田勝嶄仁
第２節　定福寺　大岡　康之
第３節　丹生酒殿神社　和田　大作
第７章　参詣道の石造物　木下　浩良
第８章　史跡としての価値　文化遺産課

「紀伊山地の霊場と参詣道」関連文化財指定検討委員会

小野　健吉【史跡調査】
（奈良文化財研究所文化遺産部長・和歌山県文化財保護審議会委員）
櫻井　敏雄【建築史学】
（大谷大学客員教授・和歌山県文化財保護審議会委員）
菅谷　文則【考古学】
（橿原考古学研究所長・和歌山県文化財保護審議会委員）
西村　幸夫【都市計画】
（東京大学副学長･日本イコモス国内委員会委員長･世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道三県協議会専門委員会会長）
水田　義一【歴史地理学】
（和歌山大学名誉教授・和歌山県立紀伊風土記の丘館長）
山陰加春夫【歴史地理学】
（高野山大学名誉教授・世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道三県協議会専門委員会委員）

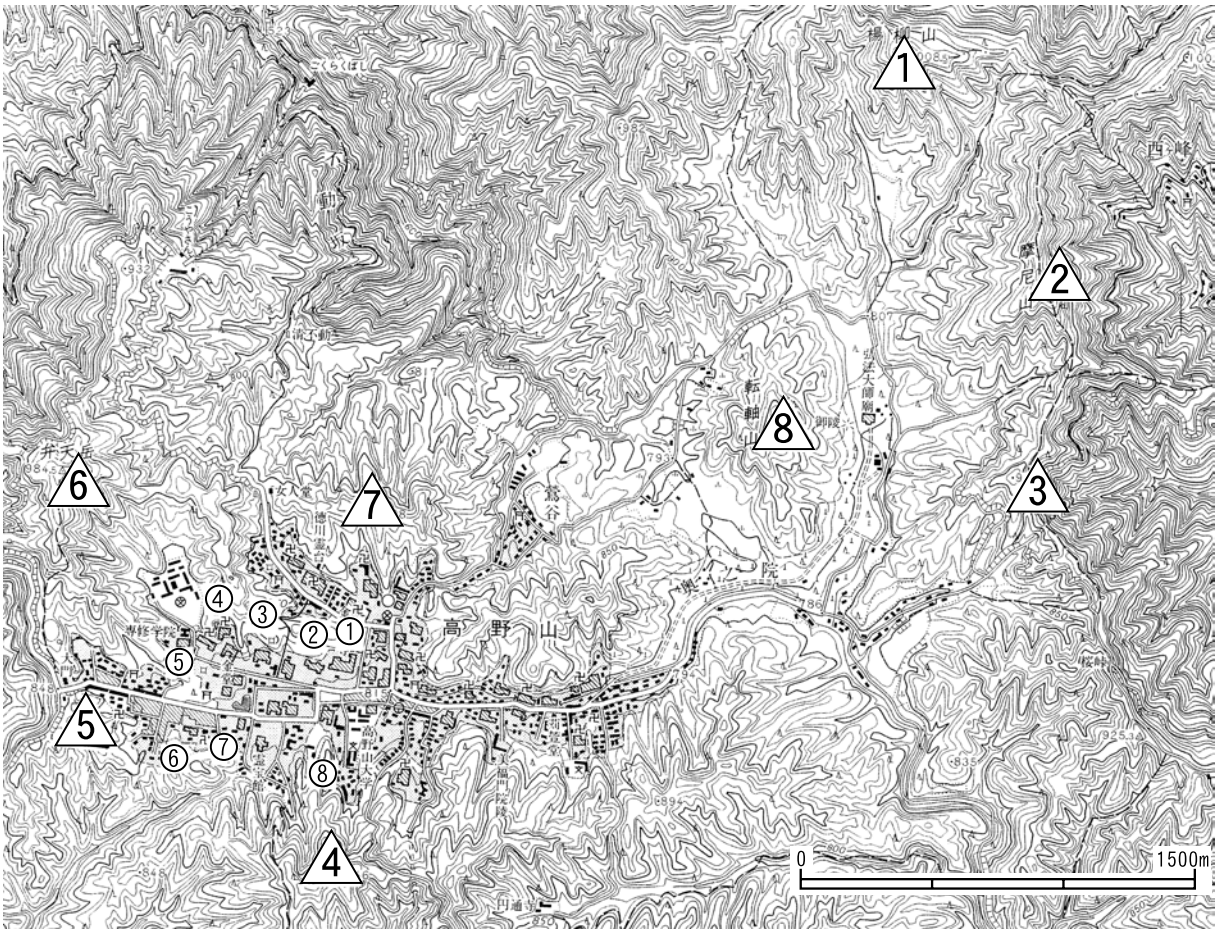
第２章　高野地域の地形と植生

第１節　聖地高野山の地形

弘法大師空海は弘仁９年（818）高野山に登り、金剛峯寺を開き、以後高野山は真言宗の聖地となってきた。標高900メートル前後の地に、現在も金剛峯寺の伽藍と50余の宿坊寺院を中心に人口約3800人余りの宗教都市・観光都市として栄えている。山上の厳しい環境に寺院のみならず一般の集落が存在しているのはきわめて珍しい。なぜこのような集落が存在しているかという理由は、金剛峯寺の開基の歴史によるところが大きいが、多くの人々が長期にわたって居住可能となった地形的性格も重要である。

１　宗教者のみた高野山の地形

金剛峯寺の創立者である空海は、政府に寺院を開設する許可を得るため政府への上奏文で高野山の地形を次のように述べている。「空海少年の日、好んで渉覧せしに、吉野より南に行くこと一日、更に西に向て去ること両日程にして、平原の幽地あり、名けて高野と曰ふ､計るに紀伊国伊都郡の南に当たり、四面高嶺にして人跡（しょう）蹊（みち）絶えたり、……」[1] すなわち空海は、高野山の地を、吉野の西南（の山間）に奥深い静寂な平地が広がり、その四方は高い峰に囲まれ、人の通ったような形跡のある道もない土地と説明している。



高野山をめぐる峰の例

外八葉　①揚柳山　②摩尼山　③姑射山　④宝珠山　⑤今来峰　⑥弁天岳　⑦鉢伏山　⑧転軸山
内八葉　①伝法院山　②勝蓮花院山　③真言堂後山　④正智院山　⑤御社山　⑥薬師院山　⑦中門前山　⑧持明院山

外八葉と内八葉（国土地理院　１：25000　高野山）

後世、山内を囲む高い峰を、内八葉、外八葉と呼び、二重のハスの蓮弁に囲まれた仏の台座のような聖地と称してきた。鎌倉時代に成立した平家物語には「高野山は……八葉の嶺、八の谷、まことに心もすみぬべし」と記されている。[2)]

この見解は、現在も引きつがれて、高野山は独特の霊場であるとみなされている。高木諦元は次のように述べる。「古い時代から高野山は八葉のうてなにある浄土だという信仰がもたれてきた。山の上の中心部は東西5kmほどの平地と南北にいくつかの谷をかかえており、その周囲は内の八葉、外の八葉といわれる1000メートル前後の山々によってとり囲まれている。要するに盆地であるため、そこから下界を見下ろすことができないのである[3)]」

内八葉、外八葉と呼ばれる嶺に囲まれた盆地は、視覚的に下界から切り離されるが故に霊場の雰囲気が醸し出されると述べる。

この外八葉とは楊柳山、弁天岳のように、高野山の結界道・女人道にそう峰をさし、内八葉とは、金剛峯寺壇上伽藍を取りかこむ丘をさしているようである。[4)]

また集落が成立した環境を次のように述べる。「……水資源に恵まれ、現在5千の住民と年間数十万の宿泊参拝者の飲用と日常雑事の水にこと欠かない。千百年来、少なからぬ数の僧侶がこの山上に起居を続けることのできた原因の一つに、この豊かな天の恵みを完璧に近いまでに補佐し、保存できた地形をあげてよいであろう」

単なる聖地ではなく集落の基盤を、取り囲む嶺々からの豊かな水資源を加えている。このように宗教者自身は空海のみた高野山の見方を継承し、この地を聖地としてきている。

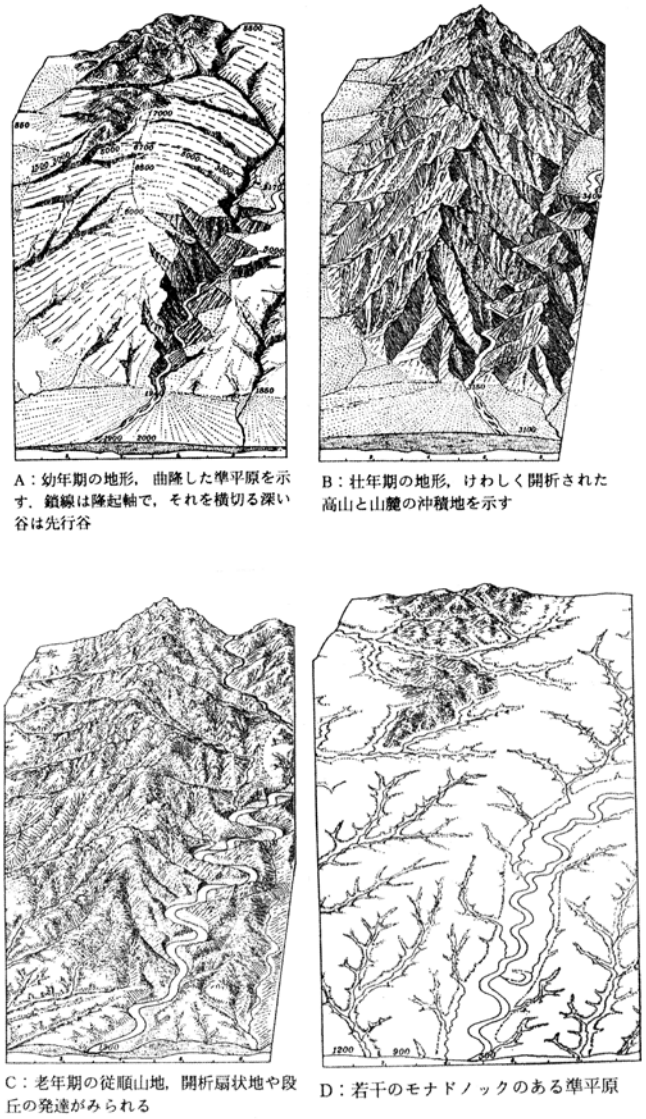
2　地理学者のみた高野山

高い山上に広い平坦地が広がっている高野山の地形の特異性は早くから注目されてきた。日本地理体系（昭和4年発行）7巻近畿編において、渡辺光は高野山の地形図を挿入して、「高野山の霊地は浸食平坦面上に載っている」と解説している。[5)]

また『日本地誌』昭和40年では、[6)]山上を隆起準平原とよび、また別な個所では「御殿川の谷頭平野」と呼んでいる。いずれも、アメリカの地理学者、W.デービスの浸食による地形の変化（地形輪廻）説をもとにしたモデルによって、高野山の地形を説明している。

デービスはアメリカの東部アパラチア山脈の地形の調査から、水の浸食作用によって生じる地形変化のプロセスに気がついた。それを次の4段階のプロセスで説明したもので、ここで彼の使った用語を解説しておこう。[7)]

原地形；地表面の浸食作用が始まる以前の地形で、平坦面が広がり、起伏は小さい。



Davisによる地形輪廻（鈴木による）

① 幼年期；起伏の小さな原地形面が隆起して、河川の下方浸食が始まる。起伏の小さな原地形面が広がるが、河川の浸食により、深いＶ字谷が発達しはじめている。例）吉備高原

② 壮年期；浸食がすすみ、地形の起伏が最も大きくなる。河川は深いＶ字谷を刻み、尾根は険しく尖り、山肌は鋭い傾斜をもち、谷底平野は発達していない。例）日本アルプス

③ 老年期；浸食がさらに進むと、河川は下方浸食から谷の幅を広げる活動にかわる。地形の起伏が緩やかになり、尾根や山頂は低く丘陵となる。例）北上山地

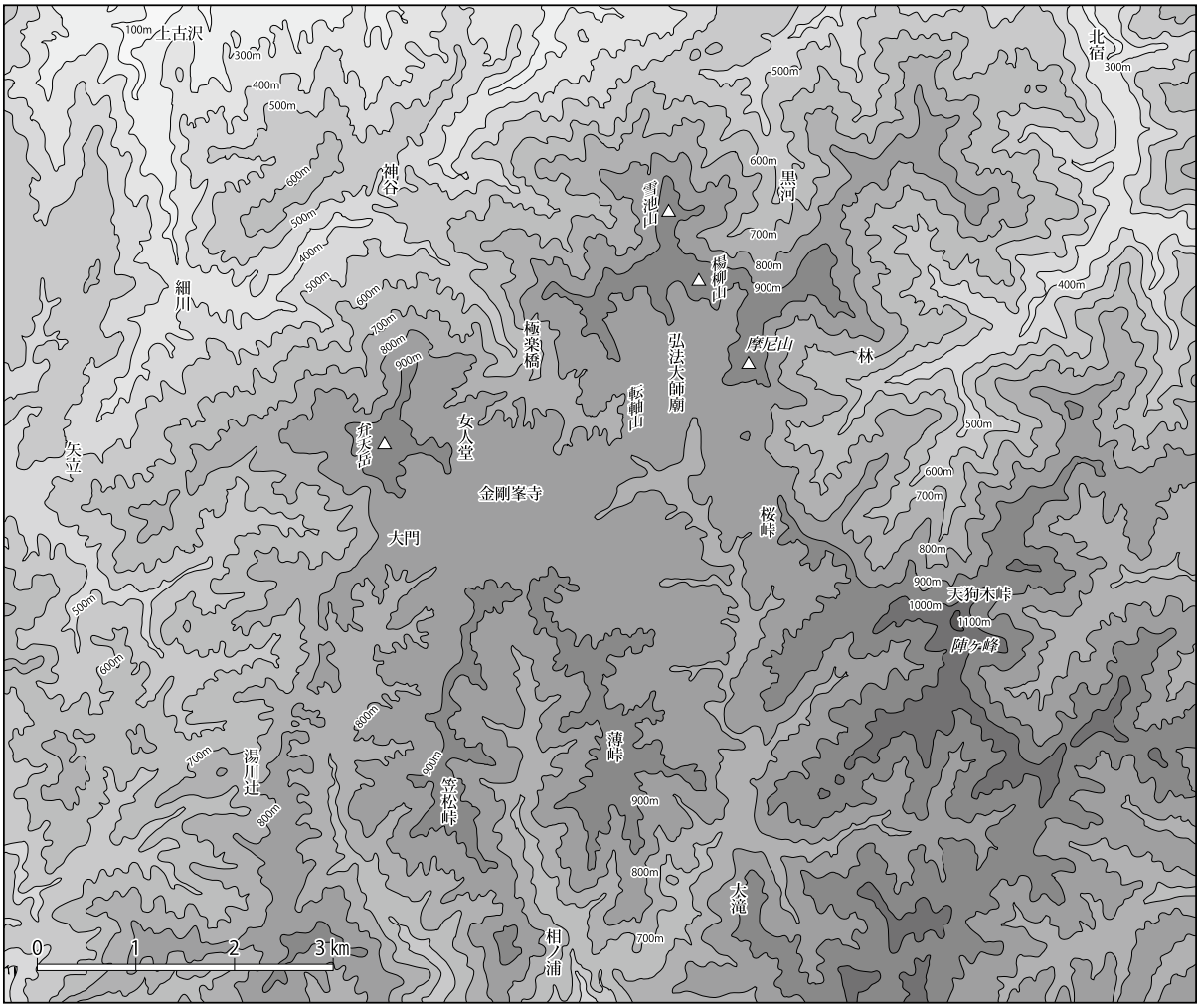
④ 準平原；地形輪廻の最後の段階で、起伏の緩やかな平原となり、河川は浸食をほとんど行わなくなる。所どころに浸食から取り残された残丘が見られる場合がある。

隆起準平原；準平原が隆起したものをいい、浸食基準面が低下することから、浸食作用が復活して、新しい地形輪廻の原地形となる。例）大台ケ原、高野山

デービスの地形輪廻は①－④の段階では地盤の変化が起こらないことを前提にしている。すべての段階が終わった④段階の後で地殻変動が生じることを前提にしている。ところが日本では地殻変動が激しく数万年単位で地盤が静穏な時期はあり得ない。現在日本では、地形輪廻のプロセスは疑わしいが、山地の地形の形状（タイプ）を説明する用語として使われ、用語は広く普及している。地形輪廻のサイクルで生じたものではないが、形態的に高野山は準平原の例と挙げられてきた。

3 地形の分析

紀伊山地のなかの高野山の位置をみると、紀伊山



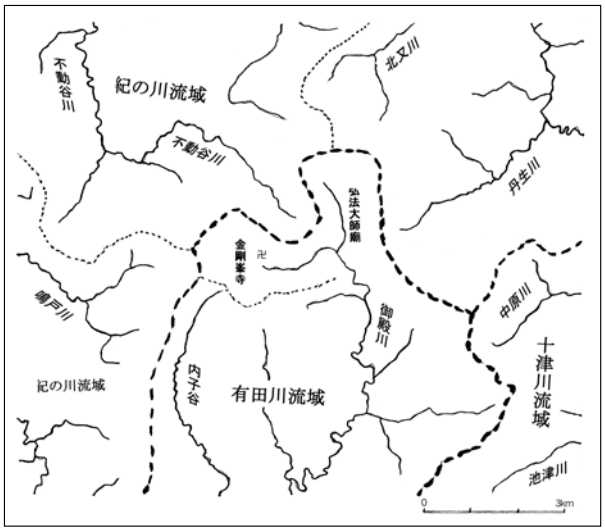
高野山 100 m等高線図

地の中で和歌山県と奈良県の県境に南北に連なる千丈山から護摩壇山・伯母子山、高野山へと連なる山脈の北端にある傾斜面で、地勢的には峰々に囲まれた盆地状の平坦地ではない。すなわち高野山へは南から千メートルをこす峰が続き、高野山を境に標高九百メートルから標高百メートルの紀の川河谷へと急傾斜の谷を低下する。紀伊山地から紀の川の河谷への地形の変換点である。

地形の特色をみるため、5万分の1地形図を基にして100メートル毎の等高線図を作成して、高野山周辺の地形の起伏を調べた。それによれば、標高八百メートルと九百メートルの等高線の間隔の幅が広い平坦面が広がっている。この平坦面は大門から奥の院へ至る高野山の山内にほぼ相当する。

平坦面の四方を眺めると、弁天岳や楊柳山など千メートルを越す峰が北部の紀の川側との間にある壁となっているように見える。東は陣が峰から延びる尾根があり、南は大瀧に至る薄峠、相浦に至る湯川辻から伸びる2つの尾根がある。これらの尾根はその先端がそれぞれ山内からみると峰のようにみえる。これらの峰や尾根の先端を外八葉と称してきたものであろう。山内から外八葉の峰をみれば、山内は盆地と見えるであろう。

次に、5万分の1地形図から水系図を作成して、地勢の方向をみると、興味深い事実が判明する。高野山は紀の川、有田川、十津川（熊野川）の源流となり、この地は紀伊水道と太平洋の分水界という、



高野山をめぐる水系と分水界

紀伊半島の重要な地形の要の1つである。高野山の山内は全域の水が御殿川に集まり、その後枝川、内子谷の支流を集めて有田川の流域となる。等高線図をみると、紀の川へそそぐ、不動谷川、丹生川、貴志川や十津川へそそぐ中原川、池津川は深いV字谷をつくって分水界に迫っている。紀伊半島の全域に広がる紀伊山地は、峰の連なりと発達したV字谷の組み合わせで急峻な壮年期の山地の相貌を示しているが、共通する高野山一帯は山頂の平坦図を除くと壮年期の地形的な特色を示している。

ところが、高野山山内すべて御殿川に流れ、浅い谷川をつくっている。山内を抜け出ると、川は小さく曲流をはじめ、大瀧集落付近から谷の浸食が活発となり、両側は崖をなし、谷の浸食が進み始めている。さらに下流の旧花園村に至ると紀伊山地特有の深いV字谷を形成している。有田川の源流である高野山では、河川の浸食が進んでいないために、谷頭部に平坦面が残されたものであろう。

おわりに

高野山は山上でありながらなぜ平坦地であるのかという疑問には、有田川の源流は谷頭浸食から取り残された平坦な土地と説明できよう。

外八葉、内八葉の峰に取り囲まれた盆地であるかとの疑問には、然りである。高野山内は分水界が、西、北、東にある有田川は南東部へ流れている盆地である。また、紀伊山地の北端で紀の川へ向けて階段状に高度が低下している平坦面でもある。

なぜ下界から隔絶しているのかは、紀伊山地特有の、険しい峰と深いV字谷が高野山のすぐ外側に発達しているため、山内へのアプローチはいずれも厳しい険路を辿らなければならなかったためである。

注）

1）宮坂宥勝 『高野山史』 昭和57年
2）和多秀乗 「平安時代の高野山」『高野山－その歴史と文化』 所収 昭和59年
3）高木諦元 「修禅の道場」 同上書所収
4）入谷氏の教示による
5）『日本地理体系7巻近畿編』 昭和4年 改造社
6）『日本地誌 大阪府・和歌山県』 二宮書店 昭和42年
7）鈴木隆介『建設技術者のための地形図読図入門』 全4巻 朝倉書店 平成12年

第2節　植　生

結界道を始めとする参詣道に係る範囲は、標高50mから約1000mの範囲におよび、気候条件の違いにも伴って多様な植生が認められる。一例をあげると、高野口町応其の年平均気温は15.1℃（1951～1978）であるのに対し、高野山では10.6℃である。また、年降水量は高野山では2064mm（1951～1975)、一方応其の記録はないが、比較的近傍の岩出では1402mmとなっている。

紀の川周辺の沖積平野等平野部は市街地や住宅地となっており、発達した植生は存在しない。また、柑橘園やカキ園等の果樹園は標高350m付近まで、水田は標高400m付近まで広がっており、こうした低標高地も自然植生は代償植生に置き換わっており、自然林の一部が社寺林などに極わずか残されているだけである。

今回の調査範囲における植生を列挙すると、以下の様な群集・群落単位が挙げられる（第6回・第7回自然環境保全基礎調査)。

Ⅰ　ブナクラス域自然植生
　　①ツガーコカンスゲ群集
Ⅱ　ブナクラス代償植生
　　②アカシデーイヌシデ群落
　　③コウヤマキ群落
　　④クリーミズナラ群落
Ⅲ　ヤブツバキクラス域自然植生
　　⑤モミーシキミ群集
Ⅳ　ヤブツバキクラス代償植生
　　⑥アベマキーコナラ群落
　　⑦シイーカシ萌芽林
　　⑧ススキ群団
　　⑨アカマツ群落
Ⅴ　植林地および耕作地植生
　　⑩スギ・ヒノキ植林
　　⑪竹林
　　⑫落葉・常緑果樹園
　　⑬畑地雑草群落
　　⑭ゴルフ場
　　⑮水田雑草群落

このうちから参詣道に関わるいくつかの特徴的な群落について概説する。

①　ツガーコカンスゲ群集

ツガーコカンスゲ群集の相観はツガの高木林である。この群集は冷温帯下部と暖温帯上部にまたがる推移帯に成立する群落である。標高は800m～1000mくらいまでの斜面や尾根に成立する中間温帯性の針葉樹林である。高野山域ではかつては広く成立していたと考えられるが、現在は弁天岳から大門にかけての南西斜面および摩尼山の西斜面に優れた自然林が保存されているのみであり極めて貴重である。

高木層はツガが優占し、その他の主要構成種としては、モミ・ヒメシャラ・ヤマザクラ・シラキ・アワブキ・イワガラミ・シキミ・アセビ・ツルシキミ・ヒメクロモジ等が挙げられる。また草本層ではコカンスゲの優占度が高いほかミカエリソウ・ミゾシダ・テイショウソウ・チゴユリ・ツルリンドウ・アキチョウジ・オカタツナミソウ・イヌトウバナ・ヤマルリソウ・アキノタムラソウ・マルバフユイチゴ・マツカゼソウ・キッコウハグマ・ムロウテンナンショウ等が生育し、草本層の多様性が高い。

②　アカシデーイヌシデ群落

アカシデーイヌシデ群落の相観は落葉広葉樹の高木林または亜高木林である。多くはブナクラス域の急傾斜地や尾根筋に成立するが、ヤブツバキクラス域にまで達する場合がある。高野山域では後述するコウヤマキ学術参考林東側にややまとまった群落が認められるが、これ以外の群落は極めて小規模なものがほとんどである。

群落の組成は多様で、ミズナラやコナラ等と混交し、ミズナラ林やコナラ林に近い群落となる場合もある。主な構成樹種は、アカシデ･イヌシデ･クマシデ等のシデ類のほかノグルミ・クマノミズキ・リョウブ・ウリハダカエデ・エゴノキ・ツリバナ・ヒメシャラ・ウラジロノキ・コアジサイ・コガクウツギ・ウラジロガシ・ヤブムラサキ・ウツギ･イヌツゲ･ヤマツツジ･シラキ等多様である。また草本層の構成種としては、チヂミザサ・キヨ

スミギボウシ・イヌショウマ・チゴユリ・シュンラン・クマワラビ・ホウチャクソウ・オオカナワラビ・クサイチゴ・シオデ・ヒトリシズカ・イタチガヤ・ノササゲ等がある。

③　コウヤマキ群落

女人堂北側、不動谷川最上流部のコウヤマキ群落は国有林であり学術参考林に指定されている他、高野龍神国定公園の特別保護区としても保護されている。本来コウヤマキは痩せ尾根や岩の露出した急斜面に散在して生育し純林は形成しない。しかし学術参考林として保護されている群落は肥沃な斜面沿いに多少のモミやツガ、ヒノキ等を交えながらほとんど純林を形成している。こうした点からも、裏づけとなる資料はないものの、もとは植林されたかあるいは択伐によってコウヤマキを残した可能性が高い。現在は天然更新を続けているようにも見えるが、モミ・ツガ・ヒノキと比較して、幼木がほとんど認められないことから、人為的な管理によらなければ長期的な存続は難しい群落であるともいえる。しかし他に例を見ない壮麗なコウヤマキ林の相観を呈しており、高野山の景観林として重要な要素となっている。

主な構成樹種は、コウヤマキ・モミ・ツガ・ヒノキ・コシアブラ・ホウノキ・シキミ・ソヨゴ・ミヤマガマズミ・ウリハダカエデ・シロモジ・ナンキンナナカマド・コバノガマズミ・ヤマウルシ・タムシバ・ウスギヨウラク・ヒメクロモジ・シキミ・コアジサイ・ウラジロノキ等であり、草本層はチゴユリ・ツルアリドオシ・シシガシラ・コハシゴシダ・シハイスミレ・ミヤママコナ・ツルリンドウ・ツルニンジン・トウゲシバ・ヒカゲノカズラ・ゼンマイ等である。

⑤　モミーシキミ群集

モミーシキミ群集は高野山駅と極楽橋駅とを結ぶケーブル沿線の標高 500 ～ 900m にややまとまった群落が成立している。相観としてはツガ・モミの高木林でありツガーコカンスゲ群集によく似ていて、主な構成樹種にも大きな違いは認められないがコカンスゲを欠くことや、相対的にモミが優占することによって区別される。この群集の模式的なものの主要構成種はモミ･ツガ･ヒメシャラ・イワガラミ・シキミ・アセビ・ツルシキミ・ヒメクロモジ等である。

⑥　アベマキーコナラ群落

アベマキーコナラ群落はアカマツ群落と並んでこの地域の代表的な二次林である。まとまった大面積を占める群落は存在しないが、以前は薪炭林として多様な利用がなされていた森林であり特に集落周辺部に小規模な群落として点在する傾向がある。相観は落葉広葉樹の高木林・亜高木林であるが、昭和 30 年代以降放置されてきたため、高木林化が進むとともに常緑性樹種の侵入が著しい。人為の影響の程度や管理手法の違いにともなって、クヌギークリ群落やヤブムラサキーコナラ群落等に細分される場合もある。近畿圏の他地域とは異なって、この地域のアベマキーコナラ群落では、アベマキを欠くか、非常に少ない傾向がある。

主要構成種は、コナラ・アベマキ・クヌギ・ネズミモチ･モチツツジ･ヤマモモ･ヒサカキ･クリ･ハゼノキ・ヤブムラサキ・ムラサキシキブ・リョウブ・ベニシダ・コウヤボウキ・ソヨゴ・コバノガマズミ・ネジキ・サルトリイバラ等でありアカマツ群落との共通種が多い。

⑨　アカマツ群落

アカマツ群落はアカマツの高木林・亜高木林であるがその林相はかなり多様である。また、アカマツ林の相観は呈するものの、近年のいわゆるマツクイムシ（マツノザイセンチュウ）の大被害を受け､林冠のアカマツは枯損している場合も多く、常緑樹をともなう常緑樹林への遷移途中の群落、陽性の低木や草本の混生した群落、コナラ等の暖地性落葉広葉樹を混生させる群落、貧栄養の尾根などに見られるハナゴケをともなう群落等各種の段階が認められる。また、二次林として成立した群落のほか、植林されたものも存在するようであるが現在では両者を識別することは困難である。

主な構成種としてはアカマツ・ヤマモモ・ハゼノキ・クロバイ・タイミンタチバナ・ウバメガシ・ヒサカキ・モチツツジ・ネズミモチ・ネジキ・コ

ナラ・シャシャンボ等が挙げられる。草本層はコシダやウラジロが優占する場合が多い。

⑩　スギ・ヒノキ植林

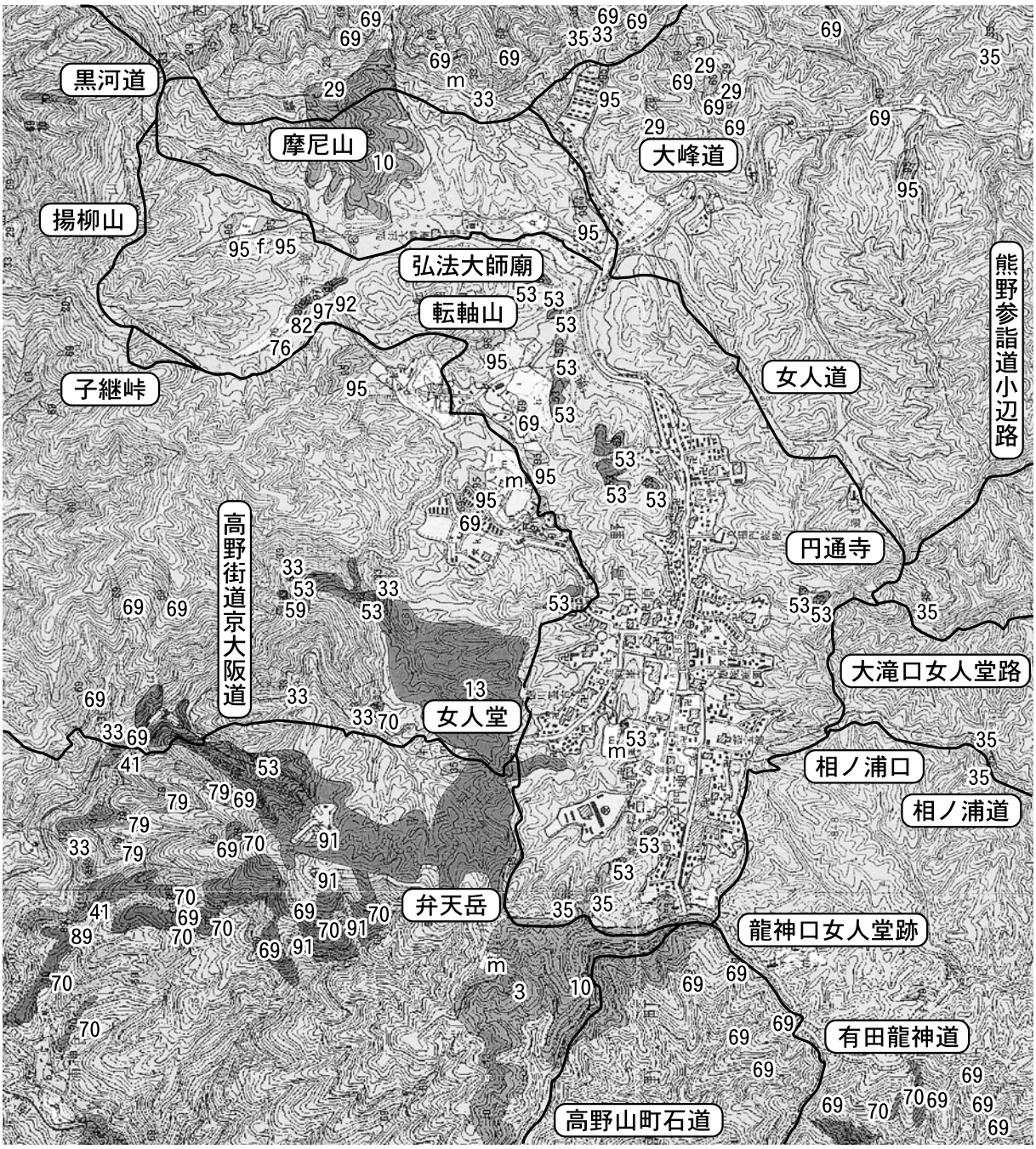
スギ・ヒノキの植林は県下でもまた当地域でも最大の面積を占める植生単位となっている。スギとヒノキではそれぞれ植栽される立地が異なるが、栽培面積はほぼ同じくらいである。植栽と管理によって相観はそれぞれスギ林およびヒノキ林となっているが、林内植生によっていくつかのタイプが認められている。林床にウラジロが密生するウラジロ密生タイプ、イヌガシ・ミヤマシキミ・クロモジ・アセビ・サカキ等をともなうカシ林要素タイプ、そしてカナメモチ・サカキ・タイミンタチバナ・クロバイ・ヤブニッケイ・ヤブコウジ等をともなうコジイ林タイプである。この他、タブ・イチイガシ林タイプが知られているが、当該地域には分布しない。

ヒノキ林の林床植生は一般に乾燥型でありスギ林と比較すると貧弱である。コシダやウラジロ等のシダ植物のほか、アラカシ・アセビ・タイミンタチバナ・ヒサカキ・クロバイ・モッコク・サカキ等が混生するがその優占度は低い。

以上のスギ・ヒノキ林は用材林として第二次世界大戦後のいわゆる拡大造林期に植栽されたものがほとんどであるが、一の橋から奥の院の御廟までの参道周辺には、樹高 35m を超える大スギ林があり高野龍神国定公園第一種特別地域・鳥獣特別保護区・県指定天然記念物として指定され保護されているだけでなく、世界遺産の景観要素として重要な位置を占めている。18ha に及ぶスギ林であるが、一部にはヒノキ・モミ・ツガを交え、亜高木・低木層にはノリウツギ・リョウブ・ウワミズザクラ・オトコヨウゾメ・ナンキンナナカマド・タンナサワフタギ・ツノハシバミ・ヒメクロモジ・ソヨゴ等が、また草本層には、スズタケ・ミヤコザサ・ミヤコアオイ・ショウジョウバカマ・フタリシズカ・キヨタキシダ・ヤマイヌワラビ・ヤマジオウ・ミヤマカタバミ等多くの種をともない、絶えず人為が加えられている割には多様性が高い植生である。

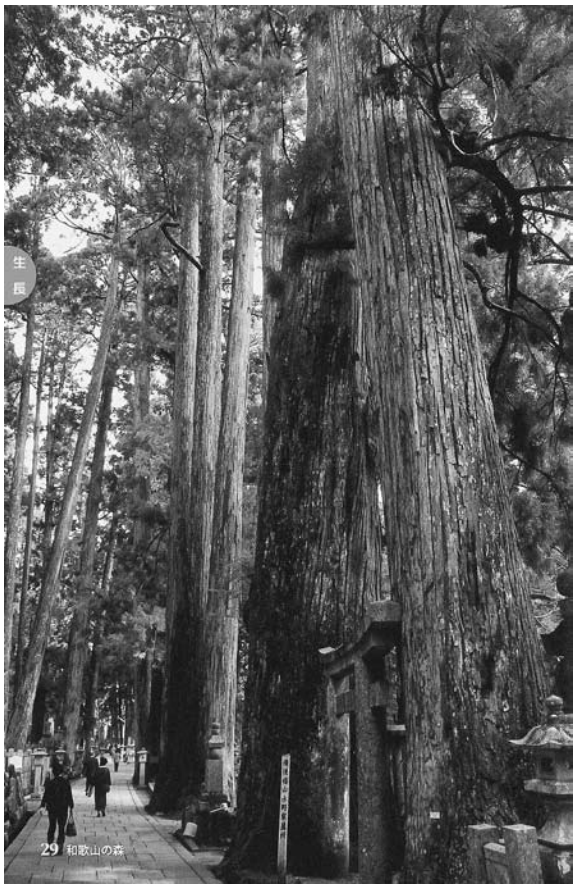
上述の各群落以外に、極小面積ではあるが特筆すべき群落が西細川、矢立に存在する。一般には矢立墓地林と呼ばれており相観的にはタブ群落の一タイプである。ここは標高 500m に位置し、墓地のため人為も加わっているが、こうした内陸の高標高地にタブ群落が残存していることは極めて珍しい。群落高は 20m に達し、高木層の植被率は 85％で良く鬱閉されている。高木としてはタブの他アラカシ・ウラジロガシ・モミ・アカマツ・ハリギリ・ケケンポナシ等が、亜高木・低木としてはヤブツバキ・ヤブニッケイ・シラカシ・モチノキ・アセビ・アオキ・ホウノキ等が生育している。

草本層もきわめて多様で、ヤブコウジ・イノデ・イヌワラビ・フユイチゴ・オクマワラビ・フモトシダ・ヤブソテツ・ジャノヒゲ・ヒロハトウゲシバ・チヂミザサ・シシガシラ・ナキリスゲ・ノササゲ・ツルアリドオシ・コガクウツギ・ゼンマイ・ヤマイタチシダ・ミヤマフユイチゴ・ヤブラン・イワガラミ等のほか、カタイノデやナライシダ等比較的まれな種も生育している。



10, 140601, コカンスゲーツガ群集
29, 220102, クリーミズナラ群集
33, 220700, アカシデーイヌシデ群落（V）
35, 230100, アカマツ群落（V）
38, 250200, ススキ群団（V）
41, 270200, アラカシ群落
53, 280101, シキミーモミ群集
57, 300102, イロハモミジーケヤキ群集
69, 410105, アベマキーコナラ群集
70, 420102, モチツツジーアカマツ群集
79, 460000, 伐採跡地群落（VII）
82, 470400, ヨシクラス
91, 540100, スギ・ヒノキ・サワラ植林
95, 541000, その他植林
f, 570100, 路傍・空地雑草群落
m, 580400, 造成地

高野山植生図　「第６回自然環境保全基礎調査:結果(環境省)をもとに作成」



スギ巨木（高野山）

摩尼山中間温帯林（高野町）

コウヤマキ林（高野町）

参考文献

福嶋司・岩瀬徹編著　2005　図説日本の植生　153 頁　朝倉書店　東京

環境庁　1987　第 3 回自然環境保全基礎調査　植生調査報告書（和歌山県）　103 頁

環境庁　1988　第 3 回自然環境保全基礎調査　特定植物群落調査報告書追加調査・追跡調査（和歌山県）　189 頁

小川由一　1977　紀伊植物誌Ⅱ　―高野山の植物―　136 頁　井上書店　東京

小倉彦一　1935　紀州高野山植物帯概論　113 頁　自費出版

菅沼孝之　1975　紀の川上流地域自然環境調査報告書　森林植生　31-43　奈良県

山本修平・中野玖美　2007　高野山植物目録　77 頁　ウイング　和歌山

安田喜憲・三好教夫　1998　図説日本列島植生史　302 頁　朝倉書店　東京

和歌山県　1978　第 2 回自然環境保全基礎調査　特定植物群落調査報告書　222 頁　和歌山県

和歌山県　1979　第 2 回自然環境保全基礎調査　植生調査報告書　79 頁　和歌山県

第３章　高野地域の集落分布と参詣道の変遷

第１節　はじめに

標高 900 mの峰の中に、金剛峯寺の伽藍と宿坊寺院 52 寺を擁し、一般の住居・店舗・サービス業等を備えた宗教都市は日本ではほかに例を見ない。山上の寺院は、中世においては寄進された荘園から、江戸時代以降は与えられた寺領からの収入を基礎に維持されてきた。山上で生活する僧侶･住民の食糧･生活用品や参拝者や宗教行為のための物資は、麓の村々を経由して山上へと運ばれてきた。僧侶や商人や荷役労働者たちは、おそらく同じ道を繰り返し利用したであろう。高野山の麓には、集落を結ぶ生活道路網が縦横にめぐっており、高野山に至る道は多数ある。その中からどの道が参詣や荷物を運ぶための主要道路として利用されたのであろうか。そしてなぜそのルートが選ばれたのであろうか。第二に、長く利用されてきた参詣路は、近代交通機関が導入されると、交通体系は変容していった。参拝用に利用された道路の変容のあとを辿ってみよう。

高野山は紀の川（支流の貴志川､丹生川)､有田川、十津川の源流となっているため、どの谷からも山上へ行くことができた。高野への入口は高野七口といわれ､７本の高野山への出入り口があったとされる。日野西は『天正高野治乱記』を高野七口の初見とみなしたが、そこには次のように記されている。

麻生津口（大手第一也）　二学文路口（亦は号不動口）三大和口（亦号黒川口）　四大峰口（亦号野川口）　五熊野口（亦号大瀧口　六龍神口（亦大門口）　七保田口（亦号梁瀬口大門入来也）　此七口者一山之往還道筋也

また『紀伊続風土記』は次のように記載している。

西口（又は大門口　和歌山口　麻生津口とも云）　湯川口（又は龍神口　保田口　梁瀬口と云）　相浦口　大瀧口（又は熊野口と云ふ）　東口（又は大峯口　野川口）　黒川口（又は大和口）　不動口（又は京口　学文路口）

日野西はこれらの史料から、高野山の入口が七口に固定されるのは、天正の頃と見なしている。天正から元禄期までの変化は、龍神口と保田口が途中で合流して大門（西口）に入るようになり、その一方で龍神への近道として相浦口が開かれている。[1)]

第２節　高野山を廻る集落と道路

高野山をとりまく近世の集落の分布をみるため『紀伊続風土記』に記載されている人口を基準に集落の分布と交通路の配置を図示した。資料に使った『紀伊続風土記』は、紀州藩が命じて作成した地誌書で､天保 10 年(1839)に完成した。そこには各村々の石高、戸数、人口等が記載されている。

この図から、読み取れることは次の事柄である。

① 高野山の結界の東部の４集落を除くと、結界あるいは高野７口から５キロメートル以内には、集落は立地していない。高野山の山内を離れると急傾斜の斜面となり、集落の立地に適さないことを示している。

② 集落は高野山の北部および西部に多く分布し、相互に１～３キロメートル間隔で分布している。一方東部、南部の集落密度は極めて低い。地形的には東部・西部は、壮年期の山地の相貌を示し、尾根は尖り、谷は深く険しいため、集落の立地点が少ないためであろう。

③ 集落は谷や道路に添って､線上に連なっている。紀の川の氾濫原から山麓にかけて集落は最も集積し、500 人以上の規模の大きな町も介在する。次に高野山と紀の川の河港を結ぶルートに、集落が分布する。橋本の対岸にある賢堂、学文路からそれぞれ不動坂にいたるルートがあり、花坂で町石道から分かれた天野盆地から三谷、渋田へのルート、花坂・志賀から渋田、麻生津へのルートに線状に集落が並ぶ。

④ 集落の分布のうえから特異なのは黒川道（大和道）と町石道である。黒川道は、高野山から橋本を経由して、紀見峠を経て大坂、京都への最短距離のルートとなるが､ルートに沿う集落は少なく、

規模も小さい。

逆に細川から不動谷川の谷に沿って集落が並ぶが、この道は集落間の生活道路である。また金剛峯寺の政所が置かれた慈尊院を結ぶ町石道にもルートに沿った集落はなく、花坂村の矢立が唯一の休憩所となる。

高野山を取りまく地域の集落分布と交通路網の密度は方向によって極めて偏っている。

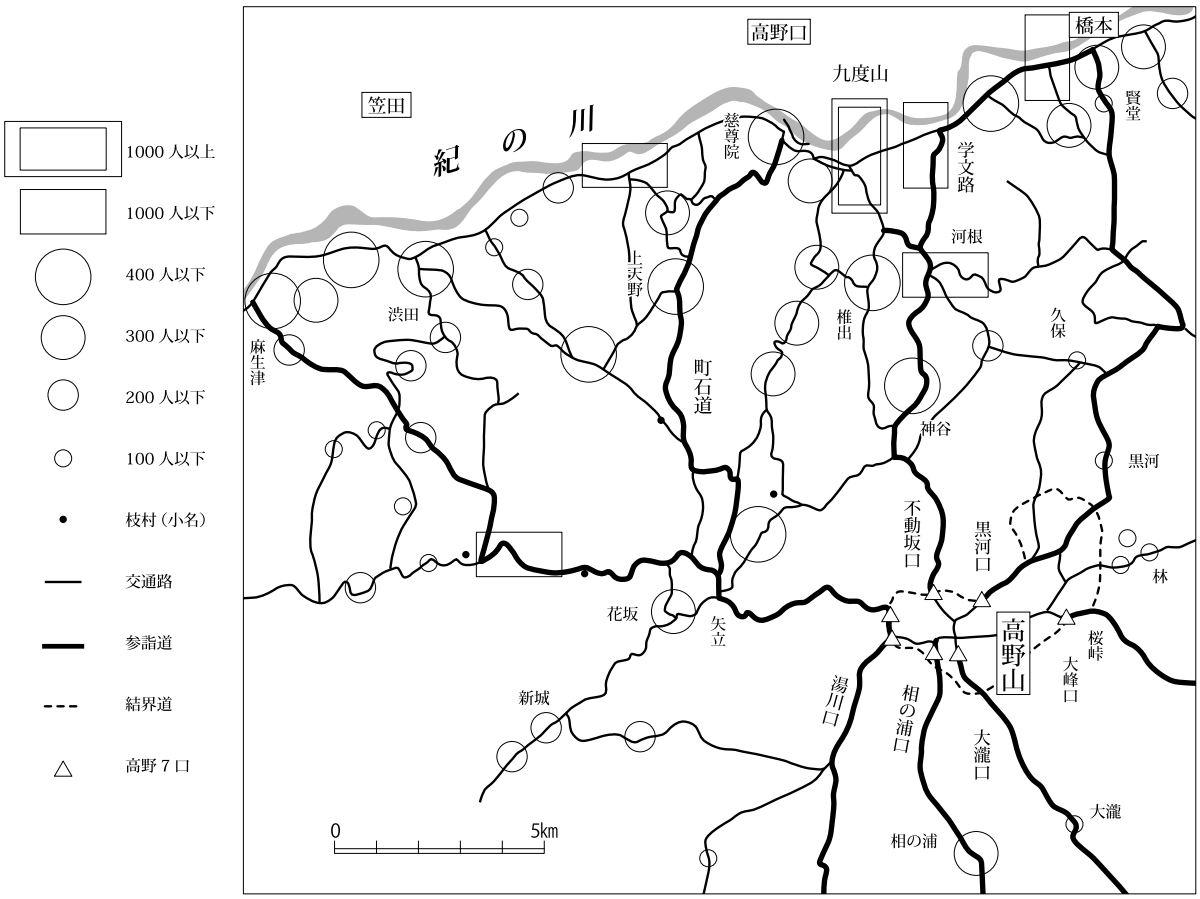
第3節　近世の高野七口と街道の利用

『紀伊続風土記』の記述による、高野七口とその延長となる参詣路を図に示した。麻生津道は花坂で町石道と枝分かれしているため8本のルートがある。参詣道は、集落の分布とはあまり関係なく東西に伸びるルートが各1本あり、南北にも各3本ある。高野山の麓の集落の分布、生活道路網の密度にも関係が見られない。四方どこからでも高野山に参詣できることが、重視されている。

高野山大学図書館に収蔵されている、江戸時代宝永2年から明治7年までの「三宝院登山帳」が残されており、欠落があるものの、1921組8996人の登山帳を分析すると参詣者の出身地、登山経路がわかるものがある。それを分析した日野西は次のように登山経路を集計している。[2)]

不動坂口	255組	1611人
大門口	103組	742人
大滝口	24組	220人
大峰口	7組	36人
黒川口	1組	4人

このうち大門口は花坂よりと記されているので、町石道と麻生津道の2ルートが合算されていることになる。日野西は不動坂と大門口が圧倒的に多く、時代が下がるにつれ不動坂の利用者が増え、大門口の通行者が減る傾向があることを指摘している。南の大滝口が以外に多いことをあげているが、これは農閑期に入ると関東・東北から、伊勢・熊野の参詣



近世の集落人々と交通路

の後、山を越えて高野山へ参拝し、京・大坂を経由した人が多いと記している。

資料に欠落があり、正確な参拝者の動向を示すものではないが、高野山のルートの利用動向を知る上で貴重なデータである。

第4節　近代的な交通の整備

明治以降の交通の整備はまず道路の整備があげられる。江戸時代の徒歩とかごと馬に代わって、人力車・馬車が出現し、大八車など荷車も利用されて、新しい道路整備が必要となった。山間部では、歩行距離を短くするため尾根筋を通る道などが好まれたが、明治以降は勾配の少ない道を必要とされ、谷間を通る道が整備され始めた。

明治12年に高野街道が仮定県道に指定され、営繕費用の8割が官費を支給されることになった。そして大正2年から県費支弁道路に変更され、高野山に通じる高野街道（九度山で渡河）、西高野街道（渋田で渡河）、東高野街道（学文路へ）が指定されている。高野街道は、明治36年に北岸に開業した鉄道の高野口駅から川を渡って九度山に至り、椎出～神谷～不動坂～高野山女人堂にいたるルートで、従来の不動坂口から学文路に至るルート（東高野街道）から神谷で分離・整備されたものである。また西高野街道は笠田駅から紀の川を渋田へ渡河するルートが整備されたものである。[3)]

一瀬快純は当時の交通機関として次のものをあげている。

伝統的な輸送手段

① 馬（2人乗り）　不明

② 山駕籠（大正7年）　200名

③ 登山補助者（腰押、荷持）（大正4年）　約250名

新しい輸送手段

① 人力車（大正4年）高野口、椎出、橋本、学文路　500台（昭和9年）　高野山駅、山内各所　250台

② 鉄道　南海高野線

汐見橋（難波）―橋本（大正4年）―九度山（大正13年）―極楽橋（昭和4年）

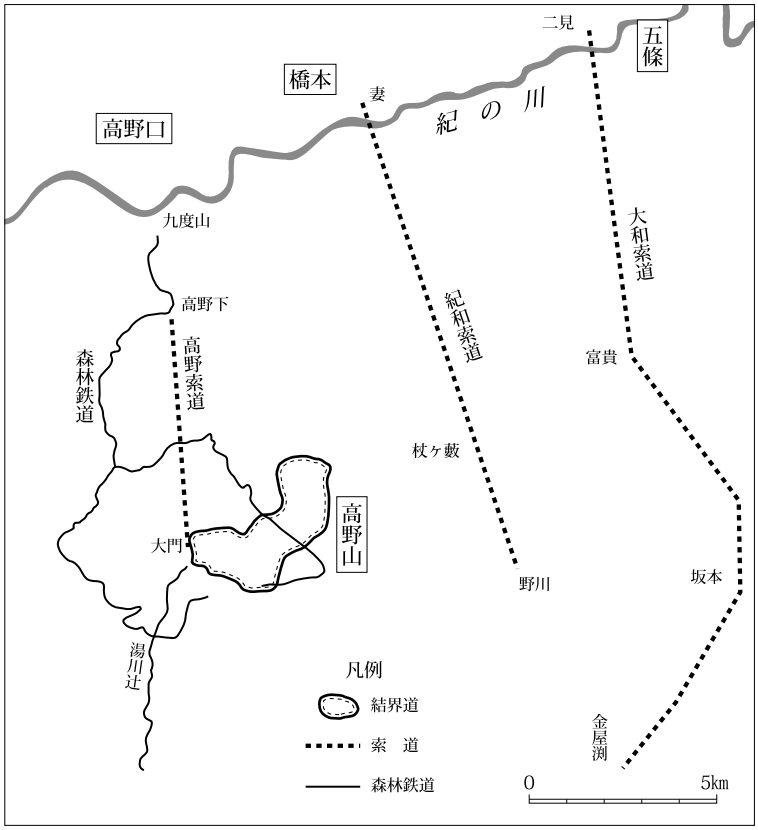
③ ケーブル　極楽橋－高野山駅（昭和5年開通）

④ 森林鉄道

高野山周辺は標高が高くて気候が冷涼なため、木目の美しい樹木が切り出されて、地域の重要な資源となっていた。そのため樹木の輸送のために、森林鉄道が敷設されている。自動車が普及すると林道の整備へと変わっていった。イ、ロは高野山営林部が専用の森林鉄道として利用し、ハ）は一般の企業であるが今のところ不明である。

イ）高野山（円通寺）―神谷―細川―椎出―九度山

（昭和9年以前に設置～33年～44年以前



道路と鉄道の整備

に廃止）

ロ）高野山（姑射山西麓）―湯川辻―花坂―細川―（合流）―九度山

（昭和 9 年以前に設置～ 33 年～ 44 年以前に廃止）

ハ）高野山（大門）―湯川辻―辻茶屋（花園村）

（昭和 8 年以前に設置～ 28 年～ 33 年以前に廃止）

⑤　索道

高野山の麓から山上へ、および周辺の村では、物資の輸送は自動車が整備されるまでは、索道によって行われた。

地形図をもとに調べると次のものがあげられる。

高野索道；椎出―大門（1912-60）

十津川索道；愛宕谷―上垣内（1917-23）

紀和索道；妻（橋本市）―杖ヶ藪―野川（野迫川村）（1917-51）

大和索道；二見（五條市）―富貴―坂本（大塔村）―金屋渕（野迫川村）（1929-59）

短期で終わった十津川索道の例もあるが、人々の記憶に残っていないが、以外に長く利用されている。

第 5 節　交通機関の利用者と道路の変容

年間の観光客が 120 万人前後で推移していた昭和 50 年代前半には、南海電車・ケーブルを使って高野山駅に降り立つ人は 60 万人前後であった。当時有料道路であった国道 370 号線を使って、車で高野山に入る車は 85 万台であった。南部へ抜けるルートとして、昭和 55 年に高野・龍神スカイラインが有料道路として開通した。利用台数は、半年で 25 万台を数えている。このような実数から、整備の方向は、道路の充実が重点的な政策として続けられてきた。[4)]

古道に添って道路の整備が行われると、古道は古い景観が失われて復原は難しくなる。古い道の景観がよく残るのは、新しい道路整備が進まなかった、黒川道、町石道の景観の残りがよい。断続的であるが不動坂より学文路へゆくルートも興趣深い。

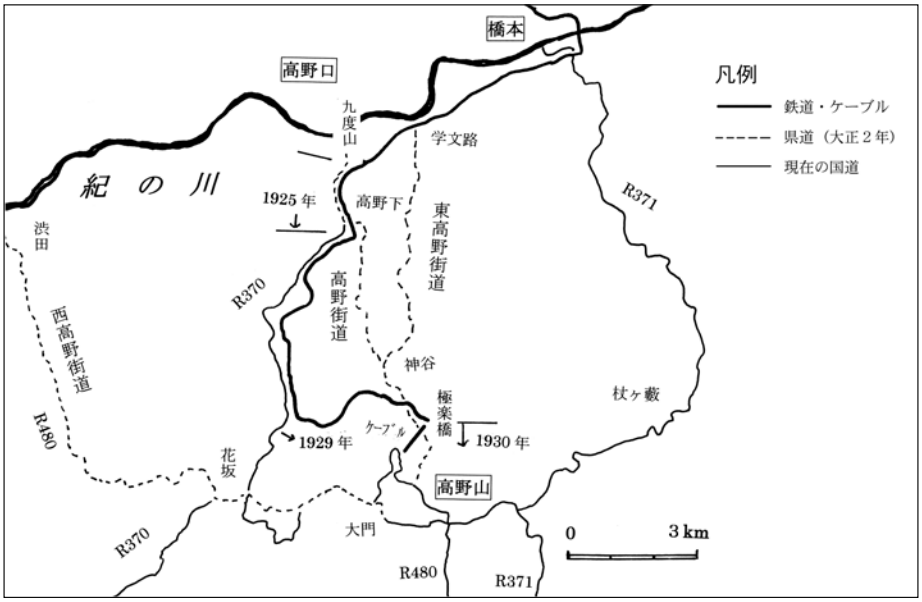
参考文献

1）日野西真定；高野山における女人禁制 「高野山史研究」創刊号　昭和 51 年

2）日野西真定；登山帳から見た高野参詣の諸問題（その 1）「密教文化」110　　昭和 50 年

3）一瀬快純；高野山に於ける明治以降の交通路 「明治・大正時代を中心とする高野山の研究」「密教研究」特集号 昭和 11 年

4）和歌山大学教育学部地理学教室；「高野山調査報告」昭和 57 年



道路と鉄道の整備

第４章　高野参詣道の歴史

第１節　空海の高野山開創

高野山の歴史は、弘仁７年（816）に、空海（774-835）が、現在の壇上伽藍の地に金剛峯寺を建立した時から始まる。

大同元年（806）、空海は、唐から帰朝する際の漂流する船上で、神々に対して「帰朝の日、必ず諸天（神々）の威光を増益し、国界（国家）を擁護し、衆生（生きとし生けるもの）を利済せんがために、一つの禅院を建立し、法によって修行せん。願わくは、善神護念して、早く本岸に達せしめよ」との誓願を立てた（「沙門空海書状（布勢海宛）」『高野雑筆集』巻上）。約10年後の弘仁７年６月に至って、空海は、その誓願の実現のために、満を持して高野山上に「修禅の一院」を建立せんことを請う「上表文」（『性霊集』巻９）を朝廷に提出した。翌月、これが許可され、ここに金剛峯寺はその第一歩を踏み出した。

ところで高野山は、空海にとって旧知の山であった。前掲「上表文」には、「空海、少年の日、好んで山水を渉覧しき（歩き回った）。吉野より南に行くこと一日、更に西に向かいて去ること両日ほどにして、平原の幽地あり。名づけて高野と曰う」と記されている。空海は少年の日、のちに「大峯口」と呼ばれる道筋を辿って高野山を発見した可能性がある（村上保壽・山陰『高野への道』高野山出版社、2001年、17頁）。

第２節　摂関・院政期の高野参詣と参詣道

１　摂関家・王家の高野参詣

金剛峯寺は、８～９世紀の間（空海と同寺第２世真然の時代）は、承和２年（835）に真言宗年分度者３人の設置が認可され、定額寺に列するなど、小さいながらも、日本の仏教界に燦然と輝く存在であった。しかし10世紀になると、延喜19年（919）に京都居住の東寺一長者に金剛峯寺僧職の首座たる座主職を兼任されて、東寺の末寺的な地位に堕し、また正暦５年（994）に落雷のために伽藍の諸堂塔のほとんどすべてを焼失するなど、衰微を余儀なくされた。

けれども、11～12世紀（摂関・院政期）に至るや、治安３年（1023）の入道前太政大臣藤原道長の「弘法大師廟堂」参詣を初例として、永承３年（1048）関白頼通、永保元年（1081）同師実、寛治２年（1088）白河上皇、天治元年（1124）鳥羽上皇、……と摂関家・王家の登山が相次ぎ、またその都度、荘園・堂塔・子院などが金剛峯寺に寄進・造立された。当該時期、同寺は、このような摂関家・王家の支援によって、ようやく中世寺院として再出発することができたのである。

これら摂関家・王家の高野参詣は、11世紀以降、次第に流布しはじめた入定信仰と高野山信仰に基づくものであった。

入定信仰とは、弘法大師（霊的な存在）が今もなお高野山奥之院の御廟内に生身のままでおわされていて、56億７千万年後に弥勒菩薩がこの世に出現されるその時まで、人々を救済し続けている、という信仰のことである。

また高野山信仰とは、「一度参詣高野山、無始の罪障道中滅」（『高野山秘記』）という言葉に端的に示されているように、高野山は仏の浄土であり、その地に徒歩で一度でも参詣するならば、人間に最初から備わっているといわれる逃れがたい罪までもが道中で消滅して、清らかな心身になることができる、という信仰のことである。

摂関家・王家の人々は、このような二つの信仰を胸に抱いて、「和泉路」（または「大和路」、または「河内路」）を経由して高野山麓の高野政所（伊都郡九度山町慈尊院）に至り、そこからのちに「町石道」と呼ばれる険しい表参道（以下、便宜上、「町石道」と呼ぶ）を徒歩でよじ登り、敬虔な気持で山上の弘法大師の御廟に詣で、自身とその一族の現世安穏と後生善処（来世に阿弥陀如来または弥勒菩薩の浄土

に往生すること）をひたすら念じたのである。

2　摂関・院政期の高野参詣道

堀内和明氏は、「中世前期の高野参詣とその巡路」（『日本歴史』619、1999年）において、次のような諸点を指摘している。

（ア）摂関・院政期における王家・公卿の高野参詣の際、高野政所に至るまでのルートとしては、摂関全盛期には「和泉路」が、白河院政期には「大和路」が、鳥羽･後白河院政期には「河内路」が、それぞれ多く採用されたこと。ただし、仁和寺御室の高野参籠は、康平2年（1059）の大御室（性信入道親王）以来、久安年間（1145～51）の高野御室（覚法法親王）に至るまで、「和泉路」が多く利用されていること。

ちなみに、「和泉路」とは、大阪湾沿いの熊野大道（熊野街道）を南下し、雄ノ山峠を越えて紀ノ川筋に達するルート。「大和路」とは、大和盆地の中央を貫く下ツ道をさらに南下して吉野川・紀ノ川筋に達するルート。そして「河内路」とは、和泉堺（堺市）の大小路までは「和泉路」と同様に熊野大道を南下するが、同所からは西高野街道を辿って長野（河内長野市長野町）に至り（同所で西高野街道は東高野街道と合流し、一本の高野街道となる）紀伊御坂（紀見峠）を経て高野政所に達するルートである。

（イ）高野政所から高野山に至るルートは、摂関・院政期全期を通じて「町石道」が多く採用されたこと。

（ウ）「和泉路」･「大和路」を利用した場合の高野参詣所要日数が10日（高野山上での2泊を含む）であるのに対して、「河内路」を採用した場合の所要日数は7日（高野山上での2泊を含む）であって、そこに3日程度の日数短縮が見られること。

3　高野参詣の作法

11～12世紀、摂関家・王家の人々の高野参詣が度重なるにつれて、次第に高野参詣の作法（お詣りの仕方）が定まってきた。ここでは、（A）上皇の初度の公式参詣、（B）上皇の二度目以降の公式参詣、の二つのケースを取り上げ、それぞれの作法の要点を箇条書きにして示すことにしよう。

紀伊国名所図会　法皇高野山詣

参照する主な史料は、次のとおりである。

① 寛治2年（1088）『白河上皇高野御幸記』（以下、『白河』と略記）。②天治元年（1124）『鳥羽上皇高野御幸記』（以下、『鳥羽』と略記）。③権中納言源師時の日記『長秋記』大治2年（1127）11月条（以下、『長秋』と略記）。

①は白河上皇の初度の高野御幸の記録、②は鳥羽上皇の初度の高野御幸の記録である。そして③には、白河・鳥羽両上皇揃っての高野御幸（白河上皇は3度目、鳥羽上皇は2度目の高野御幸に当たる）のありさまが詳しく記されている。

(A) 上皇の初度の公式参詣

（ア）出発前の7～10日間、精進潔斎を行う。

（イ）往路、京都から「大和路」（または「和泉路」、または「河内路」）を経由して高野山麓の高野政所に至るまでは、網代車（牛車）に乗ったり、舟運を利用するなど、移動手段にとくに規制はない。

（ウ－1）往路、高野政所から、二つ鳥居、笠木を経由して、高野山上の中院（現在の壇上伽藍とその周辺）に至るまでの180町の道（「町石道」の前半）は、必ず徒歩。

なお、『白河』2月25日条には、「路頭に卒都波（卒塔婆）札等を立て、町数を注す。」とあって、寛治2年（1088）当時すでに「町石道」には、町数を注した木製の道しるべが立っていたことがわかる。

（エ）道中、大声を出すことは禁止。

『白河』二月二十五日条には、「高声の者、上下に仰せて、これを禁ず。土人（土地の人）云わく、『この山において群動高声あらば（多くの生き物が高い声を出せば）、忽然として雷電風雨あり』と。よってこれを禁ずるなり。」とある。

（オ）高野山上に到着後、中院に新しく設えられた御所（檜皮葺の建物）で宿泊。

（カ）高野山上での2日目の早朝、奥之院の弘法大師御廟の参拝に先立って、上皇の使者が、壇上伽藍内の御社（地主神である丹生・高野両明神を祀る）に白妙の御幣を供える。

『白河』2月27日条には、その理由を、「先例。この山に参詣するの人は、地主明神たるによって、必ず幣帛（御幣）をたてまつる。その由緒を尋ねるに、昔、（中略）丹生明神は、大師草創の時に当たり、この地を付属す。寺の善神（正法を守る神）たるゆえに、必ずこの幣を得るなり。」と記している。

弘法大師が高野山を開創される時に、お山の地主神である丹生明神がその領地を譲って下さった。そしてその後は、金剛峯寺の守り神となられた。これらのことに敬意を表すために、必ず御幣をお供えしなければならない、というわけである。

（キ－1）中院から奥之院の弘法大師御廟に至るまでの36町の道（「町石道」の後半）は徒歩。

なお、『白河』2月27日条には、「中院より廟下に至るまでの三十六町に、おのおの率都波（卒塔婆）を立て、行程を注すこと、先のごとし。」とあり、『鳥羽』10月28日条には、「行程三十六町。町ごとに率都婆（卒塔婆）を立つ。しかるにその数は三十七本なり。子細を尋ぬるに、金剛界三十七尊の種子（仏・菩薩を表す梵字）を書くによって、歩数を縮めて、一本を加うと云々。」とあって、寛治2年（1088）当時すでに、中院～弘法大師御廟間の「町石道」には、高野政所～中院間の「町石道」同様、町数を注した木製の道しるべが立っていたことがわかる。また天治元年（1124）当時すでに、37本の道しるべは、金剛界の三十七尊を表すと理解されていたことが知られる。

（ク）玉川にかかる御廟橋のところで足を洗う。

『白河』2月27日条には、「廟を去ること町余（御廟から1町余り）にして、まず水の潺湲たるところあり（水がさらさらと流れているところがある）。黒木をもって橋を作る。上下ここにおいて足を滌う。」とあり、『鳥羽』10月28日条には、「礼殿（拝殿）を去ること三十町余り（1町余りの誤りか）、流れに跨りて橋あり。上下ここにおいて足を濯ぐ。

浄界を踏まんがためなり。」とある。

足を洗うのは、浄域に入るために身を清める行為であることがわかる。

（ケ）弘法大師御廟前で懇篤な理趣三昧法会を行う。

（コ）奥之院での法要のあと、中院にもどり、御影堂と薬師堂（金堂）を順次、内拝する。上皇が御影堂に入り、弘法大師の御影を拝んでいる間、お付きの人々は御影堂前の三鈷の松の「枝を折り実を拾う」。

『白河』2月28日条には、「影堂前（中略）に一古松あり。（中略）寺の宿老云わく、『大師、唐朝にありし時、有縁の地を占いて、はるかに三鈷を擲ぐ。かの万里の鯨波を飛んで、この一株の竜鱗に掛かる』と。この霊異を聞き、永く人感傷す。結縁のためと称して、枝を折り実を拾う。齎持せざるなく帰路の資となす（すべての人が大切に懐に入れ、高野参詣のお土産とした）。」とある。

現在も、三鈷の松の三つ葉を拾うことはよく行われているが、その行為の本来の意味が、弘法大師とご縁を結ぶためであることがわかる。なお、今日、枝を折ることは許されていない。

（サ）帰路、高野山の総門である大鳥居（現在の大門の前身）の下から高野政所までは、肩輿（轅）または馬に乗る。

『白河』2月28日条には、「次に薬師堂に入御す。礼仏ののち、即ち還御。巳の刻（午前10時ごろ）、鳥居下を臨発す。ここにおいて、御肩輿に拠る。」とあり、『鳥羽』10月29日条には、「卯の刻（午前6時ごろ）、御膳を供す。同刻、（中院の御所を）出御。辰の刻（午前8時ごろ）、互折坂下に至り、初めて竜蹄（すぐれた馬）に乗る。（中略）午の刻（正午ごろ）、政所に着御す。」とある。

当時の一山の総門たる大鳥居は、現在地から西に、つづら折りになった坂を五町ばかり下ったところ（十一町石付近）にあった。現在地に大門が移建されたのは保延年間（1135～41）のことといわれる。

（シ）帰路、高野政所から京都に帰着するまでは、移動手段にとくに規制はない。

(B) 上皇の二度目以降の公式参詣

(A)で紹介した上皇の初度の公式参詣の場合と大きく違っているところは、次の2点である。

（ウ－2）往路、高野政所から盤折坂（互折坂）の下まで、白河上皇は輿に乗り、鳥羽上皇は馬に乗る。ただし、盤折坂から中院御所までは、両院ともに徒歩（『長秋』11月3日条）。

（キ－2）中院から奥之院の御廟橋まで、白河上皇は輿に乗り、鳥羽上皇は徒歩。ただし、御廟橋から弘法大師の御廟までの間の往復は、両院ともに徒歩（『長秋』11月4日条）。

以上、11～12世紀、摂関家・王家の人々の高野参詣の作法について、（A）白河・鳥羽両上皇の初度の公式参詣、（B）同両上皇の二度目以降の公式参詣の二つのケースを取り上げ、その要点を箇条書きにした。

総じて言えることは、次の3点である。

(a) 初度の高野参詣の際には、すなわち一生に一度という思いで高野山に参詣する場合は、往路、高野政所から中院（壇上伽藍）までの間と、中院から奥之院までの間とは歩行する。つまり、「町石道」計216町の全行程を歩く。

(b) 二度目以降の高野参詣の際にも、少なくとも高野山の総門である大鳥居（現在の大門の前身）から中院までの間と、御廟橋から弘法大師の御廟までの間とは歩行する。

(c) 奥之院参拝を行うだけではなく、必ず中院に詣でて、御社・御影堂・薬師堂（金堂）を参拝する。

ちなみに、(a)に関連することであるが、2006～07年（平成18～19）の壇上伽藍内の中門跡発掘調査において、中門から金堂に向かう道路遺構が発見された。この遺構は、「遅くとも9世紀末～10世紀初頭には機能して」おり、「11世紀後半ごろには道路側溝を敷設し、白色土を衝き固めて路面を化粧するなど著しい修築が行われ」ているという（『史跡　高野山中門跡　第1次～3次調査』金剛峯寺、

2009年)。まさしく白河・鳥羽両上皇が歩いた道路であるということができよう。

また(c)については、『長秋』11月4日条に、「この山に詣づるの人は、必ず御影堂を礼したてまつる」という鳥羽上皇の言葉が載せられている。

4　覚法法親王の高野参籠

摂関・院政期における代々の仁和寺御室の高野参籠の際、高野政所に至るまでのルートとして「和泉路」が多く利用されたことについては前述した。この点を高野御室覚法法親王（1091-1153。以下、法親王と略称）の場合について、もう少し詳しく見てみよう。

「御室御所高野山参籠日記」((『大日本古文書』高野山文書之4。以下、「参籠日記」と略称）によれば、法親王は久安3～同6年（1147～50）の4年間に5度の高野参籠を遂げている。往復計10回のうち、実に9回まで「和泉路」を採用していることが知られる。残る1回（3度目の参籠の際の往路）は、窪津（渡辺津。現在の天満橋付近）から輿に乗って松原荘（松原市内の旧松原村村域）に至り、石瀬（河内長野市岩瀬）を経由して高野政所に着いている。おそらくは、窪津から熊野街道・八尾街道・中高野街道を利用して松原荘に至り、その後、中高野街道・西高野街道・東高野街道を採用して高野政所に到着したものと考えられる。

かかる異例の「河内路」利用（すなわち、当時の公式参詣ルートの採用）は、この時、252日間の高野参籠に挑む紫金臺寺御室（覚性入道親王。1091-1153）を同道していたことに、何らかの理由があったと考えられる。

ただし、かかる「河内路」採用は、往路1日半ばかりの日程短縮をもたらしたものの、2か月の参籠を予定し大荷物を抱える法親王にとっては、必ずしも快適なコースではなかったようである。「参籠日記」久安4年閏6月10日条には、「今日暑気ことに甚だし。石瀬の辺において、仮屋を立て暫く休息す。」とある。法親王の京都～紀ノ川筋間のコンセプトは、多少、時間はかかっても、出来る限り舟運を利用する、ということであった。

ところで、法親王は、高野政所から高野山に至るルートとして、往復計10回のうち、2回は「町石道」（このうち1回は、前述した紫金臺寺御室を同道した時）を、残る8回は「三谷坂」を、それぞれ採用している。この理由について法親王は、「三谷坂は、木影にして深き泥なし。道ほど近し」と記している（『参籠日記』久安3年5月21日条)。「町石道」に比して、木陰が多く、水はけが良く、そして何よりも短距離である、というわけである。この他に、「町石道」に比べると、「三谷坂」は地形上、水場に恵まれたルートである、といった理由も挙げられよう。さらに、東寺一長者の金剛峯寺支配の拠点である高野政所を経由するよりは、仁和寺領六箇荘内の津である三谷津を利用する方が、はるかに気楽で便利である、といった理由も考えられよう。

以上、覚法法親王の高野参籠ルートについて簡単に見た。総じて同法親王の場合、いかに快適に京都～高野山間を往復できるか、がルート選択の最大の眼目であったということができよう。父の白河上皇や甥の鳥羽上皇が、一生に一度という思いで「町石道」を徒歩でよじ登ったのに対し、法親王は、そのようなことはとうに済ませており、むしろ高野山でどのような充実した参籠が果たせるか、ということこそが問題だったのである（山陰「中世高野山の成立」『中世寺院と「悪党」』清文堂出版、2006年)。

第3節　鎌倉～室町時代の高野参詣と参詣道

当該時期、高野参詣は前代以上に盛んに行われたと考えられる。今、その様相を詳述する準備・紙数がないので、以下、(1) 町石の建立、(2) 後宇多法皇の高野参詣、(3) 庶民の高野参詣の3点についてのみ、簡単に見ておくことにしたい。

1　町石の建立

前述したように、白河上皇が高野参詣を行った寛治2年（1088）当時、すでに「町石道」の路傍には、町数を記した「卒都婆札」が立てられていた。けれども、それらは木製であるために腐りやすく、当然のことながら、たびたびの補修を余儀なくされていた。ここに、高野山の遍照光院に覚敷上人という聖がいて、これらの「卒都婆札」群を石造にすること

を決意した。その後、弘安8年（1285）の落成供養（法会）に至るまで実に21年。覚敷は、この盛大な法会を万感の思いで迎えたに違いない。

同法会において、覚敷上人は、「供養願文」（愛甲昇寛『高野山町石の研究』密教文化研究所、1973年、所引）を読み上げたが、そのなかで同上人は、この町石建立という大事業に協力を惜しまなかった数多の人びと、とりわけ鎌倉幕府の重鎮、安達泰盛（1231-85）の功績を讃えている。

2　後宇多法皇の高野参詣

ところで、町石の落成供養が行われてから28年後の正和2年（1313）、「河内路」と、この「町石道」を辿って高野山に参詣する一群の人々があった。後宇多法皇（1267-1324）の一行である。そこで以下、その道中の様子を、『後宇多法皇御幸記』から抄出・現代語訳しておくことにしよう。

正和2年8月のこと、6日に京都を出発された後宇多法皇のご一行は、大坂の四天王寺・住之江などを経て、7日午後10時ごろに山麓の高野政所に到着された。休息もそこそこに、8日午前2時ごろ、法皇は草履をおはきになって、早速、高野に向かう険しい山道に徒歩でいどまれた。この道（「町石道」）には1町ごとに石の町率都婆が立っているのであるが、法皇は、その1本ごとに立ち止まられ、その一つひとつを丁寧に拝される。それで御幸はことのほか遅々としてしまった。おりあしく昼間になって雷が鳴り、にわか雨が降ってきて、道はまるで泥水を流したよう。全身ずぶぬれになられた法皇は、鼻底の辻（高野町花坂）付近で、とうとう気を失われた。たまりかねたお付きの者が、手でかつぐ輿をおすすめ申し上げたところ、法皇は、次のようにおっしゃられた。「高野政所から山上の伽藍に至るまでの道に立っている180本の町率都婆というのは、胎蔵界の180の仏さまを顕わしている。また山上の伽藍～奥之院間の37本の町率都婆は、金剛界の37の仏さまに他ならない。私の多年の宿願は、これらの諸仏を巡り拝することにあるのだ。今、この結界の霊地をあゆむことがなかったら、どうして来世において再び王となることができようか。私は、今、俗世間から浄土に詣でている。一仏を拝するたびに心底から罪垢が消えてゆき、一歩あゆむたびに足下に八葉の蓮台が開けてくる。だから如何なる天候もいとわないし、どれ程の日数がかかってもかまわない」と。――法皇が高野山上の中院御所にお着きになったのは、高野政所を出発してから実に一昼夜のちの、9日午前4時ごろのことであった。

法皇が、前述した高野山信仰そのものの気持ちをいだいて、真摯に「町石道」を登ったことが確かめられよう。

3　庶民の高野参詣

当該時期（とくに鎌倉時代後期以降）、庶民の高野参詣は次第に盛行に向かったようである。その具体相は明らかでないが、以下に掲げる2種の徴証がそのことを示唆している。

（ア）元亨4年（1324）4月11日「官省符荘下方大藪村住尼妙蓮御影堂陀羅尼田寄進状」（『大日本古文書』高野山文書之2）に、

高野山は、弘法大師が入定された聖跡、諸仏がお集まりになる浄域です。過ぎ去った歳月はすでに五百年。仏前に供える香と花は、はるか五十六億年後の春暁を約束しています。五十六億年後に、弥勒菩薩が出現され、かつ弘法大師が出定される時、昔、高野山と縁を結んでいた人は、その時に弥勒菩薩と弘法大師からありがたい説法を聴くことができます。どうして一花一香の供養を捧げて得脱得果（苦界を脱して悟りを得ること）の約束をしない人がおりましょうか。

とあり、また正平7年（1352）閏2月15日「名手荘野上村住沙尼妙阿弥陀仏御影堂陀羅尼田寄進状」（『大日本古文書』高野山文書之2）に、

私は高野に登ることが叶わない五障三従の身（女性に対する差別的な表現）でありますので、無始の罪障道中滅の功徳を積むことができません。それで、この世でお大師様と深くご縁を結び、また後の世に至るまでお導きいただけるように、わずかながら私領をご寄進申し上げ、お大師様への廻向に変えさせていただきます。

とあって（以上、現代語訳）、当該時期、入定信仰

の利益と高野山信仰の功徳とが、金剛峯寺領膝下荘園の住民たち（村落上層の男女）に相当程度、浸透していたことが窺える。

（イ）建徳２年（1371）６月28日「金剛峯寺五番衆契約状案」（「高野山勧学院文書」）に、

（前略）

① 一　墾路（「町石道」）の関所において、参詣の旅人、或いは権威を募り、或いは強義を致し、関銭を出ださざる輩においては、厳密に治罰を加うべきこと。

② 一　不動坂は、去年より堅くこれを止められ畢んぬ。しかるにこの間、制法に背き横行せしむと云々。こと実たらば、はなはだもって然るべからず。向後なお押し通らしむるにおいては、宿坊に懸けて罪科あるべし。たとい相賀の沙汰落居せしむといえども、不動坂においては、永く停止せらるべきこと。

③ 一　旅人引き（客引き）のこと。且つうは寺家の悪名たり。且つうは旅人の難義たり。先規に任せて治罰を加えらるべし。宿坊に至りては、権門勢家を論ぜず、破却せらるべきこと。

（後略）

とあって、南北朝時代末期、「町石道」及び「不動坂」を通行する旅人が飛躍的に増加していたらしいこと、高野山上に宿坊となる子院が相当数、存在したこと、そして特定の宿坊と結託して客引きをする者がいたこと、等々のことが窺える。

また建徳２年当時、「町石道」には関所があってそこで関銭が徴収されていたこと、また同時期、「不動坂」は治安上の理由から〔直接には山麓の相賀荘（橋本市東部）の沙汰のために〕閉鎖されていたことがわかる。

本史料は「不動坂」と高野山上「宿坊」の初見史料であるが、この頃になると、東高野街道を通って「不動坂」を登る、すなわち、のちの「不動坂口（京口）」を辿る旅人が増えていることが特に注目される。

第４節　江戸時代の高野参詣と参詣道

１　江戸時代の高野山

天正10年（1582）の織田信長軍の高野山包囲、同13年（1585）年の羽柴秀吉の紀州攻め、といった安土桃山時代の難局を乗り切った高野山は、江戸時代、次の四つの顔を持つ紛うかたなき大寺院となっていた。（ア）高野山麓に２万1300石の朱印地（幕府公認の寺領）を有する宗教領主（江戸に参勤交代を行う日本最大の大名格寺院）。（イ）空海が建立した「修禅の一院」そのものである壇上伽藍を本部とした「学問の道場」。（ウ）奥之院の弘法大師御廟を中心にした日本有数の「信仰の霊場」。（エ）高野十谷と呼ばれる谷々に僧侶・俗人の男性だけが集住する「聖俗空間（聖にして俗、俗にして聖なる地域）」。

２「高野七口」の成立

江戸時代、高野参詣は、引き続き盛んに行われたと考えられる。準備・紙数の都合上、以下、「高野七口」なる用語そのものの管見での初見史料、及び若干の特記事項を記すに止めておく。「七口」と呼ばれる各街道それぞれの詳細については、本報告書第５章「高野参詣道」を参照されたい。

（ア）「高野七口」。この用語そのものの管見での初見史料は、①享保元年（1716）南谷一炊（春潮房懐英ヵ）著『天正高野治乱記』、及び②同４年（1719）春潮房懐英著『高野春秋編年輯録』である。

たとえば②の天正９年10月５日条には、「野山七口〈麻生津口、学文路口、大和口、大峯口、熊野口、保田口、龍神口なり。ただし、保田口はまた大門口と号す。（後略）〉」とある。同じく②の正保元年８月29日条には、「一　高野七口のこと。一に大門口。また矢立口、或いは和歌山口と号す。二に不動口。また京口と号す。三に大和口。また粉撞峠口と号す。四に大峯口。また野川口と号す。五に熊野口。また大瀧口と号す。六に龍神口。また相浦口と号す。七に保田口。また簗瀬口と云う。」と見える。「高野七口」なる呼称は、おそらくは中世末・近世初めに成立したように見受けられる。

（イ）特記事項１。天保９年（1838）刊『紀伊国名所図会』第３編巻之４「登山七路」の項に、「不

動坂口　また京口ともいふ。（中略）此の道登山正北の入口にして、京・大坂より紀伊見峠を越えて来たるものと、大和路より待乳（真土）峠を越えて来たるものと、清水村二軒茶屋にて合ひ、学文路を経てこの道より登詣するもの、十に八九なり。」とあって、江戸時代後期、最も利用される街道が「不動坂口（京口）であったことが知られる。前述したように、このような「不動坂口」の利用は、おそらくは鎌倉時代後期以降に次第に盛んになっていったと推測される。

（ウ）特記事項2。前掲『紀伊国名所図会』第3編巻之6「轆轤峠」の項の挿図に、「高野山より熊野への往還なり。此の峠より壇場の諸伽藍・寺院とも眼下にみゆ。女人堂巡りをすれば、このところに出づるなり。」との説明文があり、また天保10年（1839）完成の『紀伊続風土記』高野山之部　巻9「転軸山」の項に、「春の季、夏の孟、三山巡礼と称して道俗観礼を凝らす。その功徳皇いなりといふべし。巡礼の路、奥の院より転軸山に登り〈或いは千手院谷の奥より直に転軸山に登る路あり。〉、其れより楊柳山を巡りて摩尼山を拝す。また摩尼山をを始めとして巡礼するもあり。」との記述があって、江戸時代後期には、「女人堂巡り」または「三山巡礼」と称して結界の道を巡礼する人々がいたことが確かめられる。

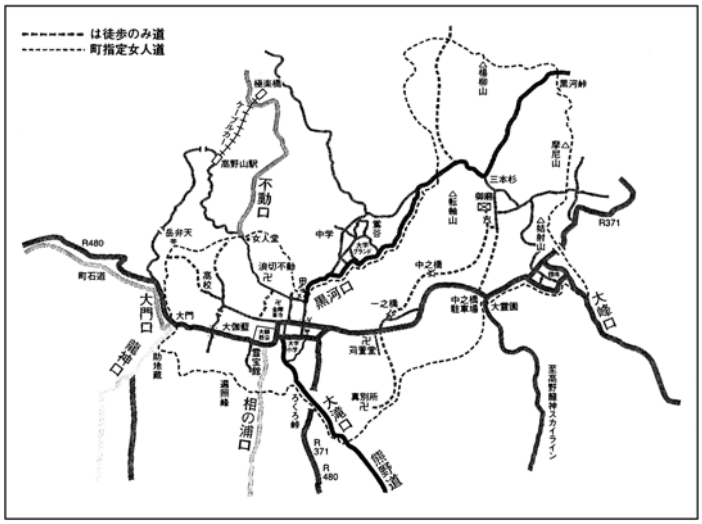
紀伊国名所図会　轆轤峠

第5章　高野参詣道

第1節　高野参詣道の概観

1　町石道と高野参詣道

一般に高野七口と言われる参詣道がいつ頃どのようにして成立して来たのかを概括的に述べておきたい。ただし、この七口の成立を正確な年代あるいは時期を示して説明することは難しい作業である。しかし、ある程度の時代的見通しを付けることは可能であると考える。その基準となるのが弘法大師空海の少年時代の体験と弘仁7年（816）の高野山開創の出来事である。



高野七口

空海は、20歳前に2泊3日の行程で吉野から高野の地に入ったことを述べている。当然、空海がまったく知らない山々であり高野の地である以上、おそらく吉野や天野の丹生神社に関係する狩人に連れられてたどった行程であったことが想像される。そして、高野から紀ノ川へ下ったと思われるが、このときの道は、天野の丹生都比売神社を経由したことは、その後の経緯から推測できるところである。

この高野から紀ノ川への道が高野への道の始まりといえる。もちろん、このときの道は、天野から慈尊院へのいわゆる町石道をたどったわけではない。慈尊院と天野間の道は、おそらく空海が高野山開創を企てたときに開設された道ではないだろうか。

すなわち、平安時代の町石道のもととなる街道の成立は、空海が高野山金剛峯寺建立のため、嵯峨天皇の勅許を賜って高野山を開創した弘仁7年（816）以降であることは間違いのないところである。つまり、翌年からおよそ六十数年をかけて一応の完成を見た弟子たちによる金剛峯寺創建の土木建設作業は、多くの人手と資材と物資などを周囲の村々から高野山に上げたことが予想できる。この物資や建設資材などの集積と保管のための場所と高野山とを結ぶ輸送ルートが町石道の起源であった。

とくに、寺院建設のための資材や道具さらに食料や燃料などの多くは、大和街道と紀ノ川を使って輸送して来たことは明らかである。その結果、紀ノ川河岸近くの土地に集積保管基地としての政所つまり事務所（現在の九度山慈尊院）を設置したのである。この政所と高野山とを結ぶ道すなわち後に町卒塔婆の立つ町石道が主要道として一番早く成立し、またもっともよく利用された道であったといえる。

空海が初めて高野山に登ったのは、弘仁9年（818）の11月で、この冬を越している。この時期にはこの道は、紀ノ川筋から高野山に上る土木建設作業員の往来もあり、街道としての姿を現しはじめていたのではないかと思われる。すなわち、修羅などの道具を使って木材や物資をあげることを可能とする幅員を持った道として整備されていたと考えられるのである。

それから1200年後の現在まで、この道がほぼそのままのルートで存在し続けていることは、驚くべき事実というべきである。平安時代の院政期には、180基の木製町卒塔婆が立ち、鎌倉時代に入って、現在の石造町卒塔婆となった。仏を表す梵字の刻まれた町石は、この道が信仰の道以外の何ものでもない事実を教えている。この道をたどった上皇や貴顕をはじめすべての人びとは、一本一本の町石を拝みながら歩いて上ったのである。

2　紀ノ川河岸からの参詣道

高野参詣道は、七口すべてが参詣道であるとしても、もっとも多くの参詣者が利用した街道は、主として京都や大阪や和歌山などを起点とする限られた街道いわゆる紀ノ川北側の東・中・西の高野街道であった。これらの街道は、対岸の紀ノ川南岸に舟渡しで着く場所によって、町石道（大門口・西口）、京大坂道（不動口）、西国街道、黒河道（黒河口・大和口）を通って高野山に至っているのである。

この中で町石道がもっとも古く成立し、空海自身も奈良や京都との往来で利用した道であるが、その他の道も平安時代中期から後期にかけて成立して来たようである。

伝燈国師真然大徳の時代、60年以上の歳月を費やした伽藍の建設は、紀ノ川河岸近在の村々から物資や資材と共に建設作業に従事する人びとを高野山に上げてきた。それらの人びとがやがて高野山の周辺の麓に住み着きはじめたことが考えられる。山内は女人禁制であるが、山外に住めば出身の村々から家族や女性を呼び寄せることができたし、土木建設の職人、寺院建築の宮大工などが高野山外のすぐ近くに集まって集落をつくっていったのではないだろうか。

やがて、高野山を支える食料や油、薪炭、槇などをつくり、高野山とのつながりを強めていった。このようにして成立した黒河（川）、摩尼、杖が藪、野迫川、花園、相の浦、大滝などの集落は、現在も高野山を生活圏内にしている。

高野山とこれらの集落を結ぶ道は、真然大徳の頃すなわち九世紀後期頃にはできあがっていたことは確かである。やがて、その集落を結ぶ峠や街道の口が代表的な集落名を冠して呼ばれるようになったのである。

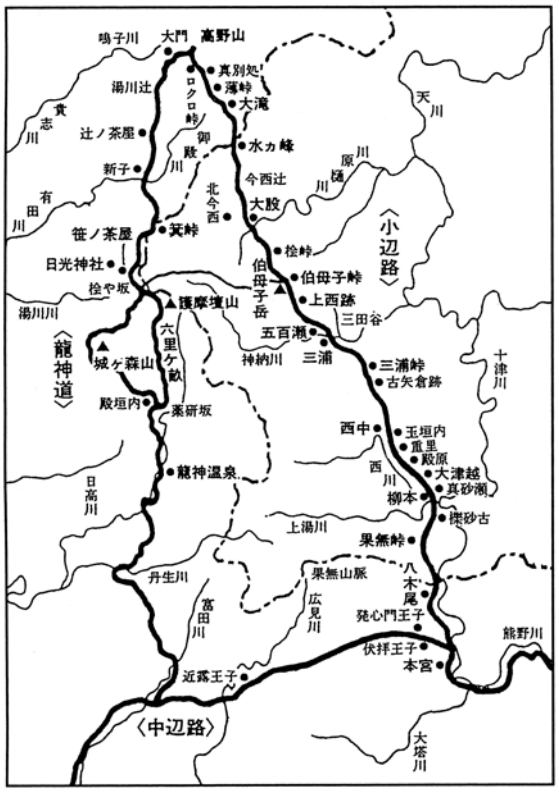
これらの道が信仰の道すなわち高野参詣道として姿を現すのは、弘法大師入定信仰の成立の時期すなわち10世紀後半頃以降ではないかと思う。そして、一度でも高野山に参詣すれば、この身の罪障が消滅すると教えられ、治安3年（1023）に高野登山を果たした摂政関白藤原道長の参詣は、以後、関白頼通をはじめとする多くの貴顕の登山を招き、それにつれて高野参詣道が整備されて行ったのである。

高野七口は、江戸時代後期にはほぼ確定したと言えるが、それでも七口の呼び名を一つに固定することは難しい側面がある。何故なら、高野山側の入口の名称と高野山外の村々や地域から入る口の呼び名とは異なるからである。口の名称がどの村を通って高野山に入ったかを示しているとしたら、それが時代と共に変化していることに気がつくのである。その変化がまた参詣道の歴史を伝えているのである。

3　小辺路

高野山参詣道の中で、高野山と別の寺社仏閣や行場とを結んでいる街道がある。一本は、吉野大峰金峯山寺との道すなわち大峰道であり、もう一本が熊野本宮との道すなわち小辺路である。小辺路は、高野と熊野とを結ぶ険しい街道であるが、奈良県十津川村の人びとには、高野参詣道として意識されていたようである。

小辺路の呼び名であるが、十津川村などの道標は、高野へ向かっては高野道（街道）となっている。本宮へは当然、熊野道である。小辺路とある道標は見



小辺路　龍神道・中辺路

当たらないが、通称として、江戸時代からこのように呼んでいたようである。

高野山との関係からこの道を見ると、奈良県野迫川村までは高野圏内であり、現在でも高野山の檀家が住み、生活・通婚圏内である。この関係は、高野山周囲のすべての村々と共通するものである。したがって、圏内の道は、高野山内の道であると理解した方が道の性格としてははっきりする。

それでは、小辺路のルートを簡単に見ておきたい。江戸時代の図絵では、高野山大門を出てすぐに「助の地蔵堂」の三叉路に出る。この入口に「くまの道」とある。小辺路は、この地点からはじまっているのである。ロクロ峠を過ぎ薄峠の三叉路を左に取り、坂を下って大滝地区に出る。

大滝から尾根道を進むと高野・竜神スカイライン（国道三七一号）に出る。その道路を進み、水が峯を経て、「くまのみち、これより本宮まで十四り半」の道標や石の地蔵を見て、野迫川村の大股集落に着く。大股から「かうやより、くまのみち」の道標を見て、伯母子峠へ、上西跡（屋敷跡）、弘法大師座像（施主は十津川村の人）を見て、三浦村の五百瀬に着く。ここにある道標は「右かうや、左ハせいの原」とある。三浦村の人たちには、この道は高野街道なのである。この他に「これより本宮へ十リ、右くまの、かうやへ八リ」という道標もある。

神納川を越えて三浦の集落に入り、三浦峠を越える。ここには大阪の施主による町石が立っている。町石道である。三十丁石の側に「右ほんぐう、左たまき山」の地蔵の道標がある。古矢倉跡（茶屋跡）、「すぐかうや道、右左在所道」の地蔵の道標を見て、十津川村西中に下り、重里、柳本へ。

江戸時代まで十津川村には寺院が存在しなかった。この郷村の信仰は神道であったからである。幕府は、宗門改めのために十津川郷に興聖寺（禅宗）末50カ寺を建立したが、明治の廃仏毀釈の嵐ですべての寺院が消滅した。仏像も焼かれた。

それでも、大師信仰と高野参詣は、別であったようである。何故なら、重里山に大正時代に開創された「四国八十八個所の札所巡り」の施設と移築された大師堂からうかがえることは、江戸時代はもとよりこんにちまで廃仏毀釈とは無関係に大師信仰が息づいてきたという事実である。この他にも、十津川郷の大師信仰と高野参詣を示す資料は、数多く残されている。

柳本から果無を越える。果無越の道に西国三十三観音が配祀されている。時代的には大正年間のものである。この峠越えの街道には観音堂や茶屋跡があり、往時の様子が偲ばれる古道といえる。八木尾に下り、熊野川に出る。かつては、ここから舟で大斎原にあった熊野本宮に至ったようである。

4　高野山結界道

(1) 結界道の定義

高野山結界道あるいは結界の道という名称は、歴史資料に見られる言葉ではない。高野山関係の史料や文献に結界の語はあっても、結界道や結界の道という言葉は見当たらないからである。史料的には、結界は、聖と俗を区切るあるいは区別するために使用される言葉であって、具体的には、例えば僧尼の寺院や修行地の聖性を世俗から護るために設定された境界をいうのである。

この境界つまり結界は、山や川などで地域的に設定されていたり、門や塀や垣墻などで場所的に設定されていたりするが、いずれの場合でも護られるべき境界すなわち聖地は、そこに通じる道や街道の口に立っている制札あるいは境内地を限る門や塀などによって示されているのが通常である。

この聖と俗を分ける境界線を道あるいは街道で示していると考えることができる場合、この道や街道を結界道あるいは結界の道と呼ぶことは、結界線を理解する上で適当な呼称ではないかと思う。高野山結界道は、まさにこの意味の道の役割を的確に表している例示である。

すなわち、高野山結界道とは、高野山金剛峯寺の境内地が根本的に僧侶の修行地であるが故に、この境内地に女人を入れないことを前提とした道の在り方を指しているのである。

僧侶が尼寺に、尼僧が僧侶の寺院に入ることを厳しく禁じていることは仏教の根本的な規律の問題であって、決して男女差別から生まれた規律ではない。修行地の環境を尊重することは、現在でも認められ

ることであり、僧尼の修行中に男女を問わず外部の人間が寺院や道場内に許可なく立ち入ることを禁じているのはその故である。

高野山結果道は、高野山金剛峯寺境内地の外郭を示している境界線を道で設定しているものである。その意味で、結界道あるいは結界の道という言葉は、高野山女人結界の境界線を考える上では意味的にも地理的にも確かに理解しやすい概念であるといえる。

(2) 結界道の特徴

現在の高野山金剛峯寺の境内地を区切る道を見ていくと、実際には意味の異なる二種類の道のあることがわかる。すなわち、金剛峯寺伽藍を中心とする境内地と奥之院御廟を中心とする境内地を区切る道である。前者の道は、いわゆる高野七口と呼ばれる出入り口が制札場や女人堂などで明確に設定されており、その七口を結ぶ外周道が女人禁制の区域を明確に示している。

しかし、厳密に言えば、この道は、例えば大門から相の浦口、轆轤峠へと境内地の南側の尾根を通る道は、「くまの道」と明示されているように、基本的には街道であって、道そのものは決して女人の往来を禁じているわけではない。その意味では、道自体には決して女人禁制が意識されているわけではない。意識されているのは、女人が道を越えて境内地・山内に足を踏み入れる行為であったのである。

それでも、あえて女人を意識している道を史料から示すと、江戸時代後期の『高野山案内』の絵図に、京大坂道の出入り口にある不動坂の女人堂から嶽弁天を経て大門に至る道に「にょにん道」という記述がある。あるいは女人堂の石造地蔵尊の銘に「女人くまの道」とあることからも、高野山の神奈備である嶽弁天に女人が登山し、大門から熊野に向かうことを認めていたことがわかる。すなわち、この道は、不動坂女人堂と大門を結ぶ連絡道であって、嶽弁天について大峰奥駆道のように女人の入山を禁止するような山岳信仰がまったく見られないことがわかる。

それに対して、奥之院御廟を護るように聳えている背後の三山を結ぶ道には街道の意味がまったく存在しないと考えられる。その理由として、史料から見る限りでは、この道は旧暦三月から初冬にかけて巡拝されていた宗教性の高い道、「三山めぐり」の道であって、一般の人が街道として利用する道ではなかったからである。

結界道　女人堂「女人くまの道」の銘がある地蔵

具体的に示すと、三山の頂上に菩薩像（転軸山に弥勒菩薩、楊柳山に楊柳観音菩薩、摩尼山に如意輪観音菩薩）が祀られており、一般の道が山頂を避けて通じているのが通例であるにもかかわらず、三尊を巡拝するために山頂を結ぶ道であるのは、特別の道であることを示している。江戸時代の絵図に三山の山頂を結ぶ道がほとんど描かれていないことからも、この巡拝道が一般に通行する道でなかったことがわかる。

(3) 結界道と女人道

そこで伽藍を中心とする境内地を囲む尾根道と奥之院の背後（北側）を通る二つの道を結ぶ為には、奥之院御廟の背後にある三山の山頂を通る道を女人道とする必要がある。しかし、この三山の道を女人が通行したとは思えない。絵図や地図では奥之院御廟のすぐ北側を東西につなぐ道が描かれているからである。江戸時代後期の文献では、女人が背後から御廟に参詣した記述が見られるが、この道を利用したようである。

そうであるならば、山頂を結ぶ道の内側に女人道があることになる。この事実は、山頂を結ぶ巡拝道は、女人道ではないということである。女人の進入を規制していた道は、奥之院御廟のすぐ背後を東西に通っている道というのが正確ではないかと思う。

史料によると、女人がこの道を通ることは問題ではなかった。しかし、この道から御廟の境内地に入ることは禁止されていたようである。例えば、黒河村の女人が奥之院に灯油を届けるために、粉撞峠で男性を待っていたが、来ないためにやむなく灯籠堂にある貧女の一灯の油を足しに入ったことが語られている。この証言は、女人禁制が道ではなく奥之院境内地に入ることであったことを示している。

いずれにしても、女人道と結界の道を分けて考えるならば、高野山結界道は、三山の頂上を結ぶ道を含めて考えることができる。すなわち、三山巡りの道を現在の高野山金剛寺境内地を外周する道として指定することができるのである。

それに、三山を結ぶ道を女人道として指定することは、歴史的には曖昧であるし、女人が通行する必要があったとは思えない。むしろ、女人が三山に立ち入ることは禁止されていたのではないだろうか。その意味でも三山巡りの道は結界道であったのである。

女人道に限定するならば、奥之院御廟のすぐ北側を東西に結んでいる道を女人道と考えるのが妥当であると考える。

5　不動坂と京大坂道

(1) 不動坂の意味づけ

不動坂は、現在の南海電鉄高野線終点極楽橋駅付近から高野山不動坂女人堂までの距離およそ2700㍍、高低差310㍍の急峻な坂道を指している。この坂は、京大坂道の中でもっとも厳しい難所ともいうべき道である。

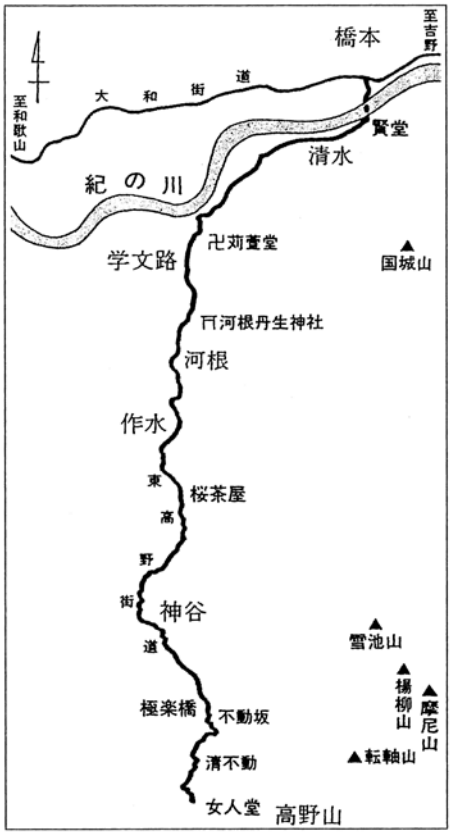
この街道は、紀の川南岸二軒茶屋の船着き場から賢堂、清水、学文路へ、あるいは学文路の船着き場に着いて、学文路から南に道を取り苅萱堂、河根、千石橋、作水、神谷を経て極楽橋に出て不動坂を上る街道である。近世後期においては、京大坂道と呼ばれたように、町石道以上にもっとも多く参拝者が利用した道である。

この街道の中で、不動坂は、大正4年高野山開創千百年にあわせて、あまりの急坂のため側に新たな道が造られた。以後百年の間に旧不動坂は利用されることなく、道の姿が消滅してしまった。加えて、神谷から極楽橋までの一㎞の道も人跡が絶えて、街道としての姿が消えてしまった。それでも、極楽橋から南海電鉄の線路を横切って山手に入ると、現在でも大師の足跡の残る「四寸岩」があり、そばに寛政3年（1791）の供養碑が立っている。

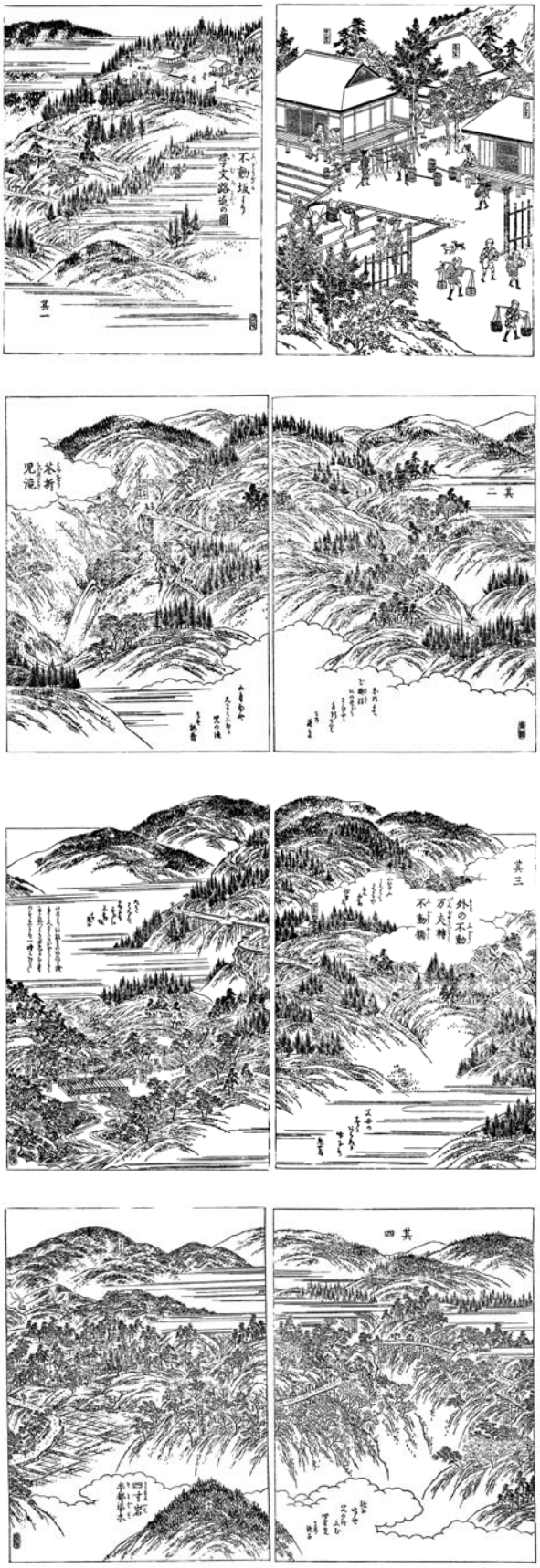
この道は、利用されなかったことが幸いし、自動車道として利用されているごく一部を除いて、旧街道の姿をそのままに保存していることである。旧址そのままに整備することは、自動車道建設の為に失われていく歴史街道を現在に甦えさせる貴重な試みであり、この急坂の往来は、急坂なるが故にかつての参詣者の祈りと思いを現代人が追体験できる稀な街道であるといえる。

(2) 旧不動坂の価値

この旧不動坂は、現在の不動坂の上に通っており、



京大坂道（東高野街道）不動坂



紀伊名所図会　不動坂より学文路までの図

京大坂道六地蔵堂

河根の千石橋（東側）

河根の京大坂道二里石

河根の丹生神社と日輪寺

昭和初期から利用されなかったために、参詣登山者がもっとも難儀した「いろは坂」、「外の不動堂跡」や「岩不動」、罪人を処刑した急峻な「万丈ころがし」、三叉路に立つ「道標」と「花折り坂」の大きな「花立」など『紀伊名所図会』に登場する史跡を復活させることができ、少なくとも中世から江戸時代までの参詣道の姿をそのままに保っていることは貴重である。

また、現在、不動堂から高野山駅までのバス道によって切断されているが、「女人大門道」から不動坂に抜ける山道も残っており、この旧道の整備は旧街道の様子を知る上で重要である。

(3)　京大坂道

京大坂道は、近世から昭和初期まで高野登山の主要参詣道であった。この街道は、京・大坂から高野山に上るのに、もっとも便利で安全なルートであった。時間的にも町石道よりもはるかに早く高野山に着くことができた。

この街道は、おそらく平安時代中期頃から高野参詣の人びとが利用するところであったであろうが、胎蔵界百八十尊を象徴する町卒塔婆が立ち並ぶ町石道のように上皇や貴顕が必ず利用した参詣道というのではない。

しかし、この道は主要な高野参詣道を性格づけている条件を持っている。それは、高野山との関係を示す丹生神社と別当寺（日輪寺）が河根に建っていることである。丹生神社の建立が伝承では応和２年（962）とあるところから、参詣道としての成立をこの頃に置くことができる。弘法大師入定信仰の成立する時期に重なっている。

不動坂と道標

また、日輪寺の寺伝では、江戸期の元和年間に仁和寺宮が高野参詣の休憩所として利用したとある。河根の千石橋の建設の逸話にあるように大名家もこの街道を利用しており、江戸後期には貴顕庶民を問わず、この京大坂道を利用していたようである。

なお、高野参詣道の中で丹生神社の脇を通る街道が三本ある。一つが慈尊院の丹生官省符神社の脇を上る町石道であり、二つが三谷・天野道の登り口にある丹生酒殿神社の脇を上る道であり、３本目がこの河根の丹生神社の脇を通る道である。その意味で、高野参詣道を象徴する丹生神社の存在と尾根道を通る古代の道の特徴を持っていることから考えると、この京大坂道も尾根道を通る道であることから、高野参詣道としての成立を平安中期頃と見るのが妥当ではないかと思う。

そして、近世の参詣道を象徴するものとして、「苅萱堂」の存在がある。この街道には学文路に苅萱堂が建っていた。現在はその境内地に真言宗西光寺が建っており、千里姫の墓（宝篋印塔）がある。

明治の末に南海電鉄が椎出（高野口駅）まで通じ、そこからかつての「まきの道」である「長坂」を上って神谷で京大坂道と合流し不動坂へ向かった。ほとんどの参詣者がこのルートを利用するようになると、長坂に高野参詣道を象徴する新しい苅萱堂が建てられたのである。

この京大坂道には、現在も参詣道を象徴するものとして弘法清水のほかに、河根の千石橋、本陣屋敷、神谷の宿場跡、さらには参詣道を象徴する六地蔵や道標などが残っており、高野参詣道として残すべき価値を有している。

６　黒河道

(1) 黒河道のルート

黒河は、江戸時代の絵図や文献では黒川とも記されているが、ここでは黒河と記名する。また高野山では「くろこ」と読んでいる。

この道は、紀ノ川南岸の大和街道の清水・二軒茶屋から南に下る街道である。大和方面から高野山へは距離的には最短の道であるが、途中で丹生川を渡るなど高低差の激しい山道を上下する為に、時間的には京大坂道の方が早い。

このルートの拠点地をあげると、二軒茶屋から賢堂へ、真言宗定福寺の脇を通って坂道を上り、明星ヶ田和を経て丹生川を渡り市平、久保へと至る。そこから西（右）に道を取ると粉撞峠を経て千手院口から山内に入るルートと、久保から東（左）に道をとり仏谷、黒河、黒河峠を経て粉撞峠で先の道と合流して千手院口から山内に入るルートがある。

ところで、この道のルートと名称を決定することは難しい面がある。文献や古地図、古絵図などに見られる峠や口の位置と名称が一定していないからである。例えば、高野山絵図によっては、黒河峠の位置が楊柳山の東（右）にあったり西（左）にあったり、あるいは同じ口の記述が黒河口であったり仏谷口であったりするからである。

また、当然と言えば当然であるが、高野山側から見た絵図にはまったく記述されていない里道や峠が久保や黒河側から記述された絵図では描かれていたりする。そのようなことから、このルートを決定するとき、他の街道では想定できない作業として、高野山側の史料だけでなく黒河村や久保村側の絵図や史料などから総合的に記名と呼称の調整をする必要がある。

(2) 文献史資料上でのルート

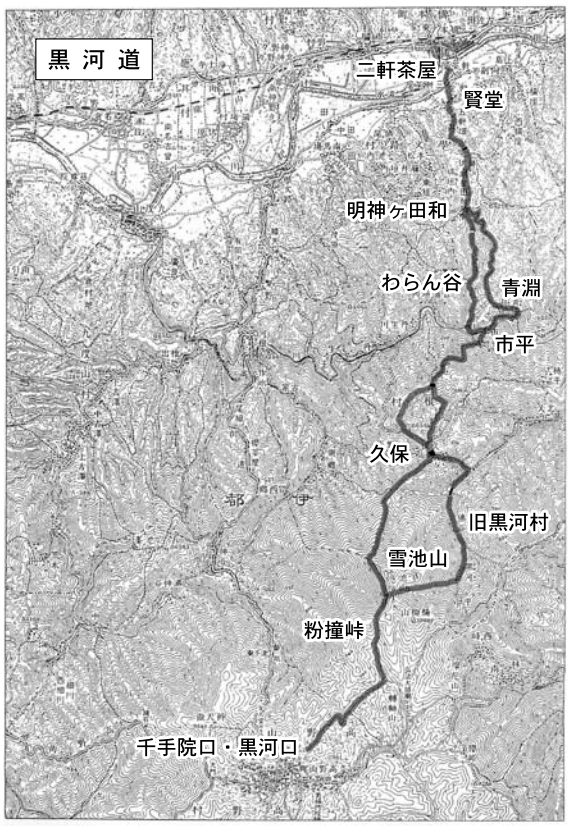
一般に、黒河道あるいは黒河口と呼んでいる道は、人びとが黒河村方面から高野山内に入ってくる街道であると理解している。基本的にはこの理解で正しいであろう。しかし、高野参詣道としての黒河道のルートを具体的に確定するとなると、一筋縄ではいかない問題が出てくるのである。

例えば、高野山側では、大和街道から清水の二軒茶屋、賢堂から久保小学校の北側に立つ「右かうや、左まにん　道」とある道標を「左まにん道」の方向にとり、黒河村、平村を経て楊柳山の東の黒河峠（口）から高野山内千手院口に入る街道を黒河道と決めている。しかし、この説では久保小学校の道標が「右かうや道」とあるにもかかわらず、どうしてその指示を無視しなければならないのかがわからない。

このような疑問を考えるとき、これまでの理解（常識）が確実な史料にもとづいて実証的に理解して来たのかを考える必要がある。もちろん先ほど述べたように、そもそも何が確実な史料であるかを決定することが困難であるにしても、現在残されている史資料を原点にルートを考える方法は妥当なやり方であると思う。

その結果、久保小学校の北側に立つ道標の指示にしたがって、道を右にとり粉撞峠を経て千手院口に入る道は、厳密には黒河道あるいは黒河口ではなく、清水と高野山を結ぶ高野街道である。峠は楊柳山の西の粉撞峠であり、口は大和口というべきである。実際に、粉撞峠のところに大和口と記している絵図があったり、久保小学校作成の地図に「旧橋本高野街道」とあるところからもこの理解が実証的に妥当であることがわかる。

黒河村は、伝燈国師真然大徳の頃（9 世紀後期）に高野山建設に従事した人たちが住み着いた集落であることからも、高野山との関係は密接であり、「日常のほとんどの買い物は高野山であった」という聞き取り史料からもわかるように、黒河村や仏谷村などは高野圏の集落であったのである。江戸時代には「番太」の屋敷があったことからも、高野山にとっ



黒河道

て古くから重要な地域であったことがわかる。

また、黒河村の人たちは「御番株」という役目で高野山奥之院燈明の油の補給を担当していたことがわかっている。その対価としてお供物や下燈などのさがり物に恵まれていたことが文献に見える。黒河口や峠は、おそらく毎日のように黒河村や仏谷村の人たちが通った峠であったのである。

橋本や大和方面からこの道を取ったとき、参詣者が久保の三叉路を右ではなく左にとり黒河村を経て黒河口や峠から高野山に入ったことも当然である。しかし、黒河村の人たちが参詣のために峠を越えたことは考えられない。彼らは日常的には明らかに高野山を支えるために黒河道を通ったのである。

しかし、清水の二軒茶屋から高野山に向かい、久保の道標を右手にとり粉撞峠を越えて高野山内に入った人たちは、明らかに高野参詣を目的としたことは明らかである。そうすると、雪池山（銅岳・あかがねだけ）の西を通る久保からの街道（高野街道）と黒河道が合流する粉撞峠こそがこの黒河道を参詣道にしている峠であることがわかる。この峠の重要性を証明しているのが粉撞峠の地蔵菩薩立像石仏の銘文である。そこで、この銘文の年代を考えながら、この街道の参詣道のルートを確定して見たい。

銘文は、「香春峠、永正九　八月廿二日、[上部欠] 十三年、検校重任」とある。香春峠は「こつぎとうげ」と読むのであろうが、文献的には粉撞峠、粉突峠ともあり、現在は子継峠と表記している。永正九年は、西暦 1512 年である。500 年前に高野山の検校（座主）重任が造立したことがわかる。この地蔵菩薩像は、明らかに境界を区切る峠の地蔵尊である。

この地蔵尊の存在は、何を明らかにしているのであろうか。すなわち、室町時代中期には、二軒茶屋から高野山に向かい久保から粉撞峠を越えて高野山内の千手院口に至る高野街道が成立していたことを示しているということである。この時から 82 年後、当時の最高権力者が実際にこの街道を高野山側から清水の二軒茶屋に向かって駆け下りた。このことからも、この街道がすでに高野参詣道として成立していたことを証明している。この最高権力者とは、太閤豊臣秀吉である。

黒河道

茶堂跡

茶堂弘法大師座像

太閤秀吉は、文禄３年（1594）３月３日、高野山に登山したとき、六日に歌舞音曲を禁じている山上で能楽を催した。そのためか、辺りが暗くなり、豪雨と共に雷鳴がとどろいた。恐れおののいた太閤秀吉は、馬に乗り、千手院口から粉撞峠を経て清水まで駆け下りたという話が残っている。太閤秀吉が粉撞峠の地蔵菩薩像の側を通って雪池山の西側を下っていることは、この遁走の道がすでに高野街道として利用されていたからであり、馬道としても利用できたからである。そこで、『紀伊続風土記』などの記事を参考にこのルートをたどってみたい。

それによると、太閤秀吉は、粉撞峠を越えて雪池山の西側の道を真っ直ぐに駆け下り、久保村から山道すなわち「姉子谷」「美砂子谷」「太閤坂」を通って市平に出て、「太閤の馬渡し」で丹生川を渡り、「わらん谷」(蕨谷)の道を通って明星ヶ田和を経て賢堂、二軒茶屋に下ったとされている。この道が太閤秀吉が選択した高野街道であったのである。現在の黒河道である市平から青淵へ回り、「わらん谷」東側の尾根道を通り明星ヶ田和に至る高野街道と区別するならば、「太閤道」と呼ぶ方がいいのかも知れない。

現在の地図では、「わらん谷」の道は消えているが、江戸時代の道路絵図や明治41年の地図では街道に相当する道が記入されている。青淵から明星ヶ田和への尾根道は、大正時代には「わらん谷横手」と記述されているところから、明らかに「わらん谷」道の脇道であったことがわかる。「わらん谷」道が沢に沿っているために消えたのに対して、この横手道は、尾根道のために消えることなく現在も使われているのである。

(3) 黒河道の姿

久保の道標を右手にとり雪池山の西側を上り粉撞峠すなわち大和口へ出る道には、久保を過ぎて茶堂（おめん茶屋）があった。現在、その遺跡が残っており、お堂にあった弘法大師像や不動明王像は現在もある。参詣人を受け入れる茶屋と大師像などの存在は、粉撞峠の地蔵尊の存在と共にこの道が高野参詣道であることを証明していると見てよい。

したがって、高野山側からは黒河道として捉えられている道は、仏谷や黒河村から楊柳山の東（右）の峠に出る道という認識が強いにしても、雪池山(銅岳）を西（東江村）から見た絵図（元禄年間作成）や九度山町史などでは、そのようなルートにはなっていないことがわかる。

すなわち、黒河から平を経由するのではなく、実際には急峻な坂道を上らなければならない平村を避けて、黒河村を過ぎて西（右）へ山道を取り、雪池山（銅岳）の東にある「ひうら坂」を経て黒河峠から粉撞峠で久保からの道と合流して千手院口へ入っていたのである（この黒河峠は、高野山側からは楊柳山の北側になるので見えない)。黒河道は、黒河村を経由する道と粉撞峠・大和口で久保村からの道と合流する道として認識されていたのである。これは、『紀伊国名所図会』の説明でもある。

いつの時代もそうであるが、遠方から来る旅人は、知らない村々を通過する時、相当緊張するものである。古い街道は、山辺の道が代表するように、村の中を通るのではなく山側の外れたところを通っている。参詣道を考えるとき、このことも考慮する必要がある。遠方からの旅人は、道標の指示に従ったり、旅人用の施設がある道を選ぶのである。

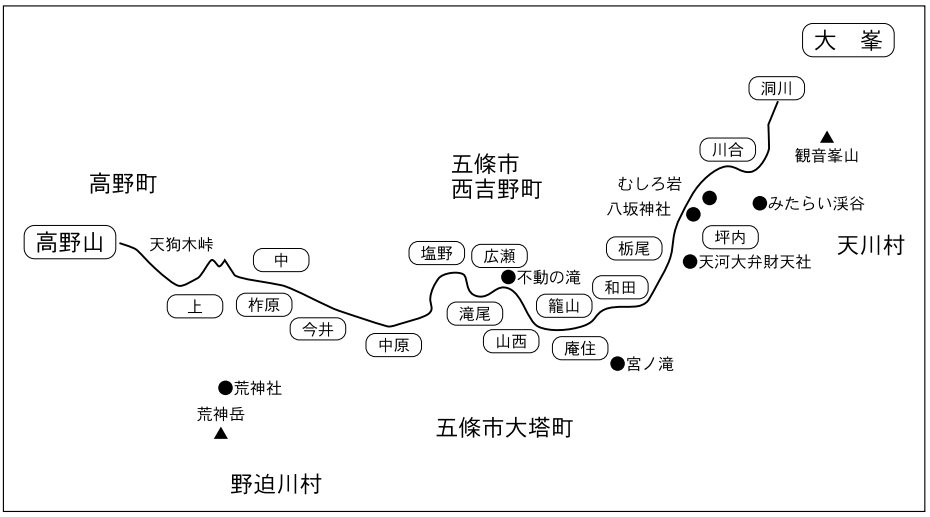
久保の道標が「右かうや道」「左まにん道」とあれば、黒河村に用事がないかぎり、「右かうや道」すなわち在所の人びとが高野街道と呼ぶ道を選択し、五百㍍ほど行くと傍らに「尾領松」が立っており、大きな鍋から道ゆく参詣者に振る舞われるミソ汁の湯気が上がる茶堂で休息し、石の弘法大師像や木造不動明王像にここが高野山の麓であることを実感し、この道が高野参詣道であることに安心したのではないだろうか。

その意味で、黒河道の理解は、黒河村からの道に限定するのではなく、久保村からの高野街道を通る道も含めて、黒河村を経由するしないを問わず、久保から来る左右二つの街道が一つとなって粉撞峠から高野山内千手院口に入る道として捉えておくのが正しいと思う。江戸時代の高野山絵図の中に粉撞峠を黒河口や大和口と記述していることからもこの理解で妥当であると思う。

7　大峰道

(1) 大峰道の起源

大峰道すなわち高野から吉野大峰山への街道の成立時期については、正確な年代は不明である。しかし、史料から推測して、ある程度の時期を設定することは不可能ではない。この史料の中に間違いなく吉野から高野へ2泊3日をかけて歩いた人物がいる。弘法大師空海である。



大峰道

空海は、その様子を次のように記述している。「空海、少年の日、吉野より南に行くこと一日、更に西へ向かって去ること両日程にして、平原の幽地あり、名づけて高野という。」

この時、空海は高野の地について、まったく何の知識もない。そもそも高野の存在さえ知らない。当然、そこへ行くルートはまったく知らない。したがって、高野の地を知っている者の案内なしには、高野の地に入ることは不可能である。この案内者は、後の伝記で登場する狩場明神のような狩人あるいは山人ではなかったかと思われる。

空海が通ったルートは、狩人の利用する山野ルートに限定してよいと思う。吉野川を渡って、吉野山を経て金峯山（青根ヶ岳）へ、大天井ヶ岳付近から西へと尾根道をとり、水場で一泊し、天川村北部の分水嶺である山岳を尾根伝いに右手北方に吉野川流域を見、左手南東側遠方に山上ヶ岳から大普賢岳を見ながら天辻まで行き一泊し、天辻から出屋敷峠、天狗木峠、桜峠を経て東から高野の地に入ったのではないかと考えられる。

しかし、この尾根道ルートは、狩人の道であっても旅人の道ではない。天川村の史料では、大峰街道の阪本・洞川間は、7世紀後半の白鳳年間には通じていたとされている。また、別の史料では、飛鳥橘寺の石垣の石材は洞川で採石されたとされていることからも、空海以前に天川村に街道が通じていたことは十分に考えられる。

空海が私度僧となって金峯山で修行したとき、少年の日に経験した尾根道ではなく、人家を通るこの街道を通ったことは十分に考えられる。そして、高野山に拠点を置き、高野から吉野へ往来したとき、阪本からは当時の大峰街道を利用したことは確実である。この街道は、江戸時代の街道に当てはまるのかどうかわからないが、沢をはずして尾根道を利用した個所もあったのではないだろうか。

(2) 参詣道としての大峰道

江戸時代における史料では、この街道は、高野山内東方の大峰口と吉野大峰山を結ぶ参詣道として位置づけられている。『紀伊国名所図会』の大峰口の説明では、「大峰よりおよそ十五里。この道当山東方の入口にして、大峰山上より洞川に下り、天川を経て天狗木より入る。」とある。

この高野大峰街道は、中世から昭和のはじめ頃までは、高野山と大峰山上ヶ岳を結ぶ巡礼道として多くの巡礼者が往来し、街道沿いの集落は人びとの宿場として栄えていたようである。

往来の実態は、高野山から洞川に向かう利用者が多かったようである。このことは高野参詣後あるいは高野山経由で大峰に向かう人たちが利用した街道であったことを示している。もちろん、大峰参拝後高野山に参詣する人たちが利用したのは当然である。

この街道について、江戸時代の道中記などを見ると、もう少し具体的な記述が載っている。

大峰道

(3) 高野大峰街道の様子

正徳元年（1711）5月記の「大峯山より高野越道中記」では、山上よりとろ川、大門、沢原、つほの内、九尾（つづら）、とら尾、和田、庵住、山西、広瀬、松尾、坂本、中原、いまゐ、野川弁財天、天狗木を経て高野大塔までの地名が出ている。中原・今井間は高山を小川づたいに上る本道なりとあるが、かなりぬかるんだ難所のようである。

弘化3年（1846）の道中記では、大峰登山後洞川で一泊し、翌日、中越、川合、大つ、沖金、中谷、沢原、日裏、九尾、栃尾、和田、庵住、山西、広瀬、滝尾、塩野、塩谷、松尾を経て阪本で1泊。2日目に中原、今井、平川、野川弁才天（柞原）、野川（中村）、上村、天狗木峠の茶屋で昼食、桜峠を経て高野山に入っている。

天川沿いの道は、江戸時代でも屈曲の多い、しかも川筋ではぬかるんだ道があり、細い木橋を利用して川岸を左右に選びながら通じていた悪条件の道であったようである。中世以前では、街道は、川筋を避けて、尾根や中腹を通っていたことが考えられる。

また、正保3年（1646）の記録では、阪本・中原・平川間の道や中村から天狗木峠の上り道はもっとも厳しい上りのようで、「難所、牛馬つねに不通」とあるところからも、難所は、川筋だけではなかったことがわかる。

なお、現在、天川村では、江戸時代のルートをもとに「すずかけの道」として高野山への道を整備し、毎年の行事としてこの街道を歩いている。

(4) 宿場と街道に残る大師伝説

この街道の繁栄を宿場や旅宿の数から推測してみたい。阪本はこの街道のほぼ中間に当たるために、参詣客で賑わう宿場として栄えていた。また、中原にも数件の旅宿があったし、今井にも大小いくつかの旅宿があり、巡礼者を無料で泊める善根宿があった。天川村地域にも集落ごとに数件ずつに旅宿が営まれていたようである。

高野山領の天狗木峠には休憩と旅宿を兼ねた「天ぐみ茶屋」があり、多いときには300人を泊めたようである。

現在、この街道に残されている弘法大師にまつわる伝説や史跡などを紹介しておく。高野山から天狗木峠を今井の方に下ると、大峰山から水の珠をもって高野山に向かった弘法大師を追いかけた野川弁財天を祀る神社がある。

中原の安楽寺奥之院には弘法大師が一夜で彫り込もうとしたが夜が明けたので片方の足を彫り残したという伝説のある磨崖仏が残されている。また、大師と水の伝説を伝える滝尾の水や和田と栃尾の水、音無の滝や不動の滝、大師が籠って修行した籠山などがある。

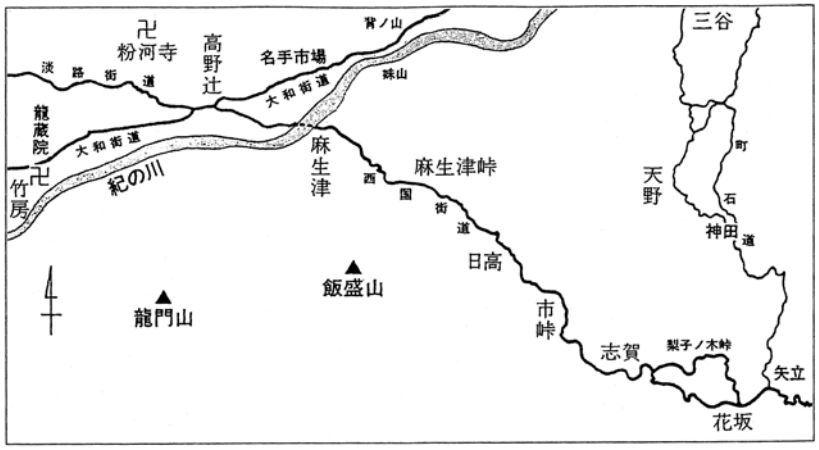
8 西国街道

(1) 西国街道について

西国街道は、麻生津峠を越えて高野山に上る街道部分と高野山から不動坂、神谷を経て「まきの道」（長坂）を椎出に下り、梨の木峠を経て九度山に至る街道部分とに分かれている。その内、麻生津峠から高野への街道を西高野街道（紀ノ川南岸）とも呼んでいる。この道があえて西国街道と呼ばれているにはそれなりの理由がある。

すなわち、西国霊場の三番粉河寺を打って、四番和泉の槙尾山施福寺に向かうとき、この街道を通って高野山に参詣するからである。高野山からは、先ほど述べたように九度山に出る。そこから紀ノ川を渡り、北へ進み蔵王峠を越えて槇尾山に至る道である。高野山の絵図に「まきの道」とあり、九度山にも「まきの道」の道標があるところから、この道が西国巡礼に利用されていたことがはっきりする。

この西高野街道は、別に「わかやま道」とも呼ばれているように、和歌山方面から大和街道を通って



西国街道

高野山に上ってくる主要道でもある。西国街道は、粉河寺を出て、大和街道に出てすぐ「右ハ　かうやみち、ひたりわ　いせみち」の道標が立っている高野辻を右に取り紀ノ川南岸の「麻生津」へ向かう道である。

粉河と高野山を結ぶ最短の道である。その意味では、平安時代からの道であり、11世紀初期に祈親上人が高野山からこの道を歩いたとき、麻生津峠から紀ノ川沿いの竹房村にあがる煙を見て、不思議の感にうたれ、そこを尋ねて、高野山中院流の祖明算上人の誕生を知る話が残っていることからも、かなり古い街道であることは確かである。

院政期の歌人西行法師と明算上人とは、紀州神崎の佐藤氏の同族である。西行は、明算上人を敬愛しており、このためか高野山にかなり長く滞在しており、金剛峯寺方と大伝法院方との争いが起こったとき、双方から和合の仲介役として信頼されている。明算は後に竹房の誕生地に隠居寺（龍造寺）を建てているが、西行法師もまたこの寺との往来で西国街道を利用したことであろう。

(2) 西国街道のルート

街道は、紀ノ川を渡ると、茶屋跡の残る麻生津集落の寛政7年（1795）の銘のある「右高野山大門へ五里、左粉川わか山みち」とある道標にしたがって、ひたすら麻生津峠を目指して上る道である。

麻生津峠には、平成に入ってしばらくまで十一面観音像を祀っていた「観音茶屋」が建っていたが、世界遺産登録前に取り壊されてしまった。相当の価値のある建造物であったので悔やまれる。

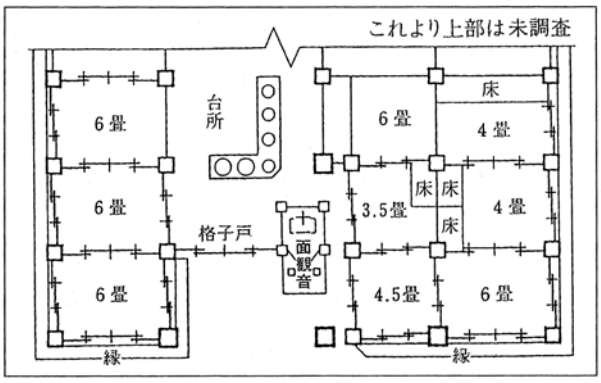
この茶屋は、高野山に納骨するために利用された茶屋であるが、部屋数もあり、高野山参詣者の旅宿を兼ねていたようである。『紀伊国名所図会』の絵図や残された写真からもその規模の大きさがわかる。現在は、観音像のみが残っている。

峠を後にすると、日高の道標である地蔵菩薩像を見てしばらく行くと、市峠の道標に出る。この街道には道標や地蔵が配置されている。このことは、この街道が遠国からの参詣者で賑わっていたことを示している。三谷坂にはこのような道標や地蔵はない。

さらに志賀の集落に入り、梨の木峠の地蔵の前を通って花坂に出るのである。花坂の矢立からは町石道を上って大門口に至る。

なお、この街道には、『紀伊続風土記』によると、

麻生津峠の観音茶屋外観



観音茶屋平面図

麻生津の渡しから花坂までの間に、六地蔵が配置されている。これは明らかに道標の役目をしている地蔵である。このことは、江戸中期に入って、高野山参詣者の往来が相当あったことを物語っている。またその他に、この街道には廻国供養碑などの板碑が立っているのも特徴である。

9　三谷坂

(1) 三谷坂の歴史的意義

高野参詣道の中で参詣のために利用した歴史的起源を平安時代中期にまでさかのぼって検証できる道の一つがこの三谷坂である。この道は、紀ノ川南岸の三谷に鎮座している丹生酒殿神社と天野の丹生都比売神社とを結ぶ急坂の道である。

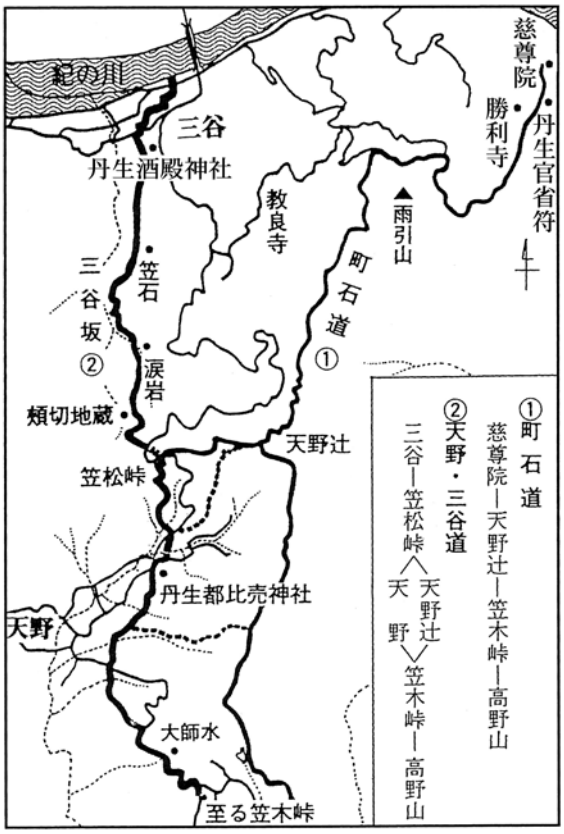
平安時代院政期に白河上皇の第四皇子で仁和寺第四代門跡覚法法親王が高野参詣の折りにこの道を利用したのが記録的には最初である。もちろんそれ以前から紀ノ川と天野を往来する道として利用されていたことは確かであるが、高野参詣道として歴史的に登場する初見は、覚法法親王の記録（『高野参籠日記』）である。

覚法法親王の高野往来のルートを簡単に紹介しておくと、第一回目の高野参詣道は、往路は紀ノ川を船渡しで慈尊院の浜に着き、町石道を利用した登山をしているが、復路では大門から町石道を下り、天野辻（六本杉峠）から西に折れて笠松峠に向かい三谷坂を下っている。第２回以降は、往復路ともに三谷坂を利用している。天野の丹生都比売神社に立ち寄る場合もあるが、慈尊院から町石道を上り下りすることはなかった。

この選択には、東寺支配下の慈尊院に対して、仁和寺門跡の立場から気を遣わせることを避けたという面もあるが、参籠を目的とする往来のためか、三谷坂を利用した方が短時間で高野往来が可能であるという利便性が評価されたことも間違いなくある。それと、「三谷坂は、木影にして深き泥なし。道ほど近し。上下よろこびをなす。」という『日記』の記述からもわかるように、道の状況がよかったことも選択肢として大きかったようである。

(2) 三谷坂の石仏について

この道がある時代に天野を経由して高野山に上る



三谷坂　町石道

参詣道であることを如実に示しているのが、この急坂の途中にある「頬切れ地蔵」と呼ばれている石造仏の存在である。

時代的には鎌倉時代初期の石仏と見られているが、地表に露出した緑色片石の自然石（最大長 223 cm以上、最大幅 117cm以上、最大高 65cm以上）に、正面と左右側面の三面を造り出し、上面に屋根の形の笠を造り出している。

いずれも座像であるが、正面北側には智拳印の大日如来像、西面には定印の阿弥陀如来像、東面には与願施無畏印の釈迦如来像が彫像されている。この三尊形式の信仰を考える上で興味深いのは、上部が方形の庇を持ったお堂の屋根を思わせる形に造り出されていることである。

仮にお堂の中にこの三尊がまつられているとしたら、この三尊はいかなる信仰を語っているのであろうか。そして、高野参詣道の主街道とも言うべき町石道を外れたこの坂道にこのような見事な石仏を安置しなければならなかった理由とは何であろうか。かなり明確な意図を考えざるを得ないのである。

そこで、まず三尊が明らかにする意味について考えてみたい。智拳印の大日如来像は、密教の主尊であり教主、それも金剛界の教主を表している。その意味で、この三尊が真言密教の聖地である高野山信仰、それも大塔から奥之院までに立つ金剛界36本の町石が示している奥之院大師入定信仰を表していることがわかる。

そして、この石仏の造られた時期が鎌倉初期とするならば、阿弥陀如来像は、平安末期から鎌倉初期にかけて成立する高野山阿弥陀浄土信仰を明らかに反映していると見ることができる。さらに、釈迦如来像は、現当二世の信仰すなわち現世の救済仏である釈迦如来と来世の救済仏である弥勒仏とその中間の菩薩である弘法大師の存在を表しているとしたら、やがて来る弥勒菩薩の下生と高野山での説法を象徴していることは明らかである。

すなわち、この三尊は、高野山奥之院の浄土信仰と、弥勒下生の砌である高野山で今なお入定している弘法大師空海への信仰とを物語っているのである。もっと端的に言えば、この三尊は、高野山浄土信仰と奥之院大師信仰とを表しているということである。

(3) 高野山信仰の道として三谷坂

それでは、この石造仏の三尊が高野山浄土信仰と奥之院大師信仰を三谷坂に再現しているということから、隠されたいかなる造立理由を考えればよいのであろうか。

まず、考えられることは、この石仏を造らせた施主とはいかなる人物であろうかという問題である。石仏の彫りの見事さは、この石仏が専門的知識を持った優れた仏師の手によることを教えている。そうすると、それなりの財力を持った身分の人物が施主となっていると考えるのが自然である。

そして、この場所が三谷の丹生酒殿神社と天野の丹生都比売神社とを結ぶ比売命（女神）の歩いた道であること、六本杉峠（天野辻）で町石道に連絡していながら慈尊院と高野山を往来する僧侶たちがまず利用することのない道であること、この二つの事実から推測すると、この場所は人目とくに僧侶の目を避けている人物たち、おそらく女性たちの意図を映しているように思われるのである。

つまり、女人禁制の山規によって高野山奥之院御廟に直接参詣できない施主の女性は、それに代替する信仰施設がほしかったのではないだろうか。そのために、丹生都比売に守られたこの場所に高野山奥之院御廟に代わる石造仏を造ったのではないだろうか。すなわち、施主は、女人堂までしか行けなかった女性のためにこの石造仏を造ったと考えざるを得ないのである。

坂道から少し横手に入ったこの場所は、三谷坂でも小川が流れ、籠堂の一宇も建てることのできる空間が確保できる唯一の広場となっている。このような条件を考慮しながら結論づけると、町石道を離れた三谷坂は、鎌倉初期のある時期、高野山に向かう僧侶や一般の参詣者の目から離れた場所で高野山浄土信仰と奥之院大師信仰を秘かに守った女性たちの信仰心を跡付けている参詣道であると考えることができるのである。三谷坂の石造仏にこのような信仰の跡を読み取るとき、この道もまた女人道の一つであったことがわかる。

(4) 三谷坂の周辺

三谷坂の入り口に鎮座する丹生酒殿神社は、丹生都比売命が紀ノ川を上って初めて上陸した場所と考えられているが、その境内に無数の鎌を打ち立てた櫟の木をご神体とする「鎌八幡宮」（もとは兄井にあった）がある。また、船着き場の近くに金比羅さんが祀ってある。あたりは古くからの雰囲気を漂わせている気配がする。

三谷坂を登ると弘法大師の笠が雨引山から風にとばされてこの石に掛かったという「笠石」や「涙岩」と呼ばれる水場などの史跡があり、歴史を感じさせる道である。

引用文献

村上保壽・山陰加春夫:「高野への道」高野山出版社　2001年

第６章　参詣道に関連する文化財

第１節　勝　利　寺

勝利寺は、高野山開創以前にすでに現在の地に開基されていたと伝えられている。そして、『紀伊続風土記』によると萬年山世尊院と称されていたとあることから、起源的には慈尊院とは別な寺院として建立されたことが推測できる。

もしも、空海以後に創建されたとしたら、高野山や慈尊院に創建の伝承が残っている筈であるが、そのような伝承や資料はまったくない。また、創建時の高野山金剛峯寺からすれば、政所（慈尊院）以外の施設をこの地に必要とする理由はなかったであろうし、金剛峯寺の建立に手一杯である状況で独立した寺院を建立する余裕などなかった筈である。

慈尊院の建立は、時代的には空海以後であり、高野山に物資を送る基地として設立された政所に付属するお堂として開基されたのがはじまりである。

天治元年（1124）10月の鳥羽上皇『高野御幸記』では、高野政所の一角に小堂があり、そこに住む僧から、この堂は慈尊院と号しており、弥勒仏を安置しているという説明を受けている。会理僧都作の本尊弥勒仏像の銘が寛平４年（892）とあることから、９世紀後期頃に慈尊院（弥勒堂）が建立されたのではないかと思う。

１　空海と勝利寺の位置づけ

勝利寺が空海以前に現在地にあったとしたら、空海は高野政所を開設するとき、勝利寺をどのように見ていたのであろうか。高野政所を現在の慈尊院の地に開設したことは、勝利寺を利用しなかった、あるいは出来なかったということである。

この理由として、次の条件が考えられる。第一に、高野山への物資の集積場として、紀ノ川河岸から容易に物資を運ぶことができる場所（土地）であること、第二に、大切な法具や仏器、貴重な書類の保管所として湿気の多い高野山を避ける必要から比較的乾燥した設置場所を決めなければならなかったことである。

この条件からすると、慈尊院の南西の谷を越えた山腹に立っている勝利寺は、明らかに不利な場所（土地）である。寺院の設置場所としては、落ち着いた山あいの場所であるが、空海の意図からは、現在の慈尊院の場所以上の条件を満たす土地ではなかった。

しかし、高野山金剛峯寺が開創され、丹生官省符神社が創建され、多くの僧俗が高野山と政所を行き来しはじめる時代になったとき、勝利寺の位置づけに大きな変化をもたらしたことは明らかである。それを実証する資料は近世をさかのぼるものは少ないが、御幸門の存在が上皇の高野御幸や天皇の遺髪を高野山に納める勅使の宿所として利用されたことを示している。また、優れた文化財を所有していたことなどから、平安時代中頃には、慈尊院の塔頭となったようである。文書史料からも慈尊院との深い関係がうかがわれるからである。

宝暦十二壬午十月八日　勘録帳
慈尊院慈氏寺所蔵文書

２　高野参詣道の勝利寺

弘法大師42歳のとき彫刻されたという厄除け十一面観音像を本尊とする伝承などからもわかるように、勝利寺は、近世に入ると高野参詣者に高野山大師信仰を唱導する役割を担っていたようである。高野参詣道・町石道の玄関口にあり、十一面観音像

の存在と厄除け信仰から多くの参詣者で賑わったのである。

その意味では、慈尊院（政所）と丹生官省符神社と勝利寺の２寺１社でつくる境内地は、明治以前の神仏習合思想あるいは信仰から総合的に位置づけて見る必要がある。

すなわち、高野山大師信仰の幅広さは、平安時代から現代まで信仰宗派もさまざまであり、貴顕から庶民までさまざまな層の人たちが参詣登山をしてきた。この事実からすると、高野参詣道の意味づけも幅広く捉えるべきである。

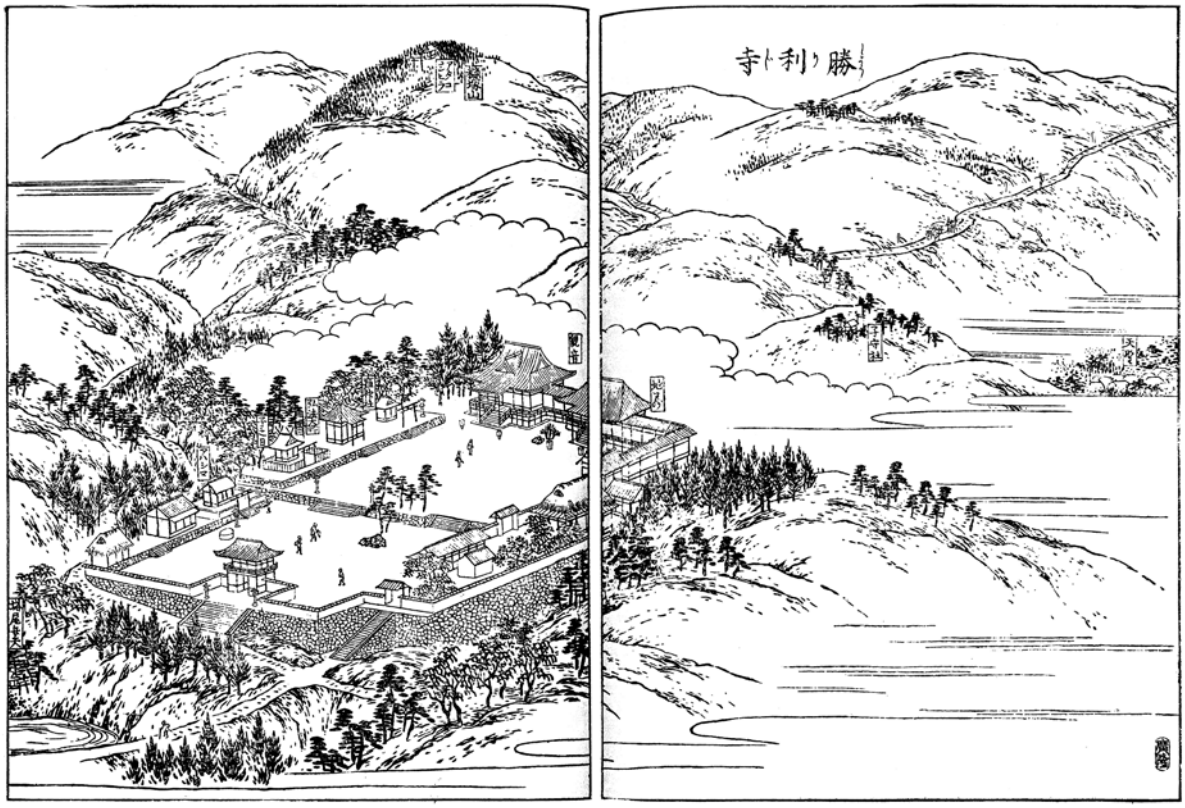
町石道の玄関口にある２寺１社でつくる神仏習合の境内地を一体として見たとき、日本文化の持つさまざまな重層性を感じるのである。その根底にあるのが弘法大師空海の母公についての記録である。

すなわち、弘法大師の母公が政所の近くに宿所を置き、そこに弘法大師が九度も通って来たという九度山の地名伝承、さらには慈尊院が母公の祈願所であり女人高野の地として信仰されて来た事実には、明らかに母公の存在が投影されていることは否定できない。

また、勝利寺の伝承には、母公が十一面観世音菩薩と女人成仏の宝鏡である干栗駄鏡を当寺に納め、参詣の衆生を浄土に導かんと誓願されたとする話が残っている。そして、丹生官省符神社の祭神は、丹生明神、高野明神と天照大神である。他に気比明神、厳島明神の比売神を祀っている。

このように見てくると、この２寺１社の境内地が女性のための信仰地である側面を持っていることが読み取れるのである。この推論を補強する根拠として、勝利寺の境内に中世建立の４基の「一石五輪塔」がある。この内、天正 20 年（1592）11 月 25 日の日付の２基は、女性のものである。１基は妙仙禅定尼の菩提のために造立しており、もう１基は香春禅定尼が自身の逆修供養のために造立している。二人の女性の関係はわからないが、総高 55.6㎝の一石五輪塔を勝利寺に造立していることは、ここが女人高野の地であることを証拠立てているように思える。

町石道に立つ 180 本の町石が表す仏の梵字は、胎蔵界を象徴している。大悲胎蔵とは母なる子宮（仏



紀伊国名所図会　勝利寺

心）を意味している言葉である。大いなる慈悲の仏心から生まれた仏たち。それが町石道の真相である。このように考えると、町石道の表玄関が女人高野の境内地でもあることは、ごく当然な理解であるといえる。

このような理解は別にしても、平安時代後期には、慈尊院と丹生官省符神社と勝利寺が高野参詣者の意識には一体となった聖域として受け取られていたことは間違いのないところである。

3　勝利寺の文化財について

九度山町の中心的寺院である慈尊院の裏の岡を少し登ったところにある勝利寺は、現在無住の寺ではあるが、往年には慈尊院と並び九度山地区の重要な寺院であった。当然両寺院とも弘法大師信仰に根ざした寺であり、本山でもある高野山の山麓にあるという地理的関係から、長く人々の信仰を集めてきた寺である。特に弘法大師信仰の集大成的な意味合いで実施される高野詣の道中において、京からの表参道でもある高野街道に位置し、高野山山麓に存在する両寺院は、高野詣で最後の宿泊地としての地理的重要性も大きく、また弘法大師の母君の寺としての慈尊院は、女人禁制の高野山において、女性にとっては高野山に最も近い場所としての地位も大きかった。特に天皇や公家・その後の武家たちの高野詣では、個人とは違って参詣するためにはそれなりの宿泊施設が必要となってくる。勝利寺はその時の宿泊場所の代表として利用されたと考えられている。その宿泊場所としては、現在紙遊苑として使用されている「庫裏」であったと考えられる。また、下記のように勝利寺の堂塔の堂々とした構成は、慈尊院塔頭の一寺院としての立場だけでは説明がつかない。さらに、残された仏像等の遺物の立派さは、慈尊院本坊と比較しても遜色がないといえる。それだけに勝利寺については、もう一段の深い研究がなされるべきであろう。

勝利寺　境内

勝利寺　本堂

(1) 本堂・観音堂

江戸時代中期の明和８年（1771）に瓦の吹き替えをしたとの記録があり、建物自体はこの時に再建されたものと考えられる。元は三間四面の建物であったと思われる内部の木組みや、格天井に見られる様式等に、江戸時代よりも古い趣を感じる。そのため元の建物部分については、室町時代前期ごろまで遡

勝利寺　十一面観音本尊

れる可能性があるのではないかと思われる。

(2) 観音堂本尊・十一面観音菩薩立像及び両脇侍仏

勝利寺の本尊として安置されている十一面観音菩薩立像は欅の一木作りで、平安時代初期に流行した翻波式衣紋や彫刻の全体の表現方法、ならびにやや荒げ削りのままで古風な檀像風の仕上げにより、弘法大師最初の寺でもある神護寺の薬師如来立像のような感じを示している。ただ製作年代は残念ながら神護寺本尊よりかなり遅い平安時代後期の作になると思われるが、正当な仏師による雰囲気のある良作である。

江戸時代初期の製作と思われる須弥壇の上には、同時期に作られた厨子がある。その厨子に本尊は納められていたためか、本尊自体は虫食いもほとんどなく保存状態は非常によい。

また光背や装身具は後補のものではあるが残っている。厨子の両脇には、平安時代後期の本尊と同じ頃に作られたと考えられる十一面観音立像が二体残っている。その内の向かって右側の十一面観音菩薩立像は、元々本尊のお前立ちとして作られたものと考えられる。また向かって左側の十一面観音菩薩立像は、同時代の作ではあるが、お前立ちの仏像ではなく、元は別の寺院の本尊であったものが、勝利寺に寄進されたものと理解した方が同じ仏像が二体あることの説明としては納得がいく。二体とも一木造で本尊よりも幾分時代の下がる鎌倉風の力強い表現が見られ、表現としてはリアリティーのある魅力的な十一面観音である。

(3) 地蔵堂

本堂と渡り廊下で繋がっているお堂で、地蔵菩薩を本尊とする三間四面のお堂である。本堂と同じ時期に再建されたと思われる。ただ本尊の地蔵菩薩やそれを納めている厨子は江戸時代よりも遥かに古く、室町時代にはすでに元のお堂があったと考えられる。

本尊を納める須弥壇と厨子は、建物よりも古く、室町時代末から江戸時代初期のものであると考えられるが、厨子の扉の左内面に描かれた毘沙門天と愛染明王の絵の作風から、室町時代後期に作られた可能性が高い。

(4) 地蔵堂本尊・地蔵菩薩立像ならびに脇侍仏

平安時代後期の作で、本堂と繋がっている地蔵堂の本尊である。欅の一木造りで、像高約1メートルの彩色像である。平安時代後期の様式を示す仏像で、平安時代の浄土教信仰の高まりと共に浄土と対をなす地獄の救済者として厚く信仰された仏である。地獄の王閻魔大王の本地仏とされ、鎌倉時代を中心に多くの信仰を集めたが、穏やかな顔の表情と、ほぼ左右対称となる衣紋の流れに、平安時代末期の浄土教信仰の救済仏としての品格を感じる。

地蔵堂本尊の厨子の右手に立つ、1メートル20センチの不動明王立像と、ややこぶりの毘沙門天立像が左手に立っている。形としては地蔵菩薩との三尊形式で祭られている。

(5) 仁王門

江戸時代中期の宝暦五年（1755）に上棟式が執り行われたとの記録がある。もっとも鬼瓦の銘により門の完成は18年後の安永二年（1773）まで完成するのに時間がかかったと考えられる。江戸時代の中頃に立てられた仁王門としては標準的な作例となる建物である。18年の年月を掛けただけの荘厳さと品格を示し、門を飾る装飾品も手の込んだ複雑な形態で作られている。

(6) 鐘楼

地蔵堂と渡り廊下で繋がれている建物である。一見火の見櫓的な建物に見えるが、それは太平洋戦争時の金属供出で鐘を供出したため鐘がなくなったことによる。古くからの古地図にも記されているようにしっかりとした鐘楼建築である。本堂・地蔵堂と共に同時期に立てられたものと考えられる。

(7) 大師堂・弘法大師像

本堂とは別棟の建物に大師堂がある。その本堂とは仏の建物である大師堂の本尊である。室町時代後期の作で、等身大に近い大型の弘法大師座像である。高野山への信仰としては当然存在することが当たり前の仏像ではあるが、大きさと時代とを鑑みれば評価されてしかるべき仏像である。

(8) 阿弥陀浄土変相図（当麻曼荼羅）

真言宗の寺院ではあるが，浄土信仰の代表的な美術品である当麻曼荼羅を当寺院は所有している。こ

の当麻曼荼羅は、阿弥陀浄土変相図が正式名称であるが、当麻寺に原本が所有されていたこともあって一般的に当麻曼荼羅と称されている。鎌倉時代中期頃から盛んに全国的に流布された絵画で、浄土教信仰が圧倒的な流行を見せる中、浄土教的教義を示す新義真言宗が出てくるように、真言宗も浄土教的な信仰を取り入れざるを得ない時期となって行く。極楽往生を願う阿弥陀信仰は時代の趨勢となり、民衆の中に広く伝わっていくのであるが、その流布に対して大きな役割を果たしたであろうと思われるのが、中将姫による当麻曼荼羅の作成とその縁起および信仰である。

阿弥陀如来の信仰に誘うため、絵解きがおこなわ

絵因果経　茶掛

絵因果経

れる時の本尊として掲げられるもので、当麻寺に所蔵されている綴れ織りの阿弥陀浄土変相図、通称当麻曼荼羅の模本を使用することが多かった。その当麻曼荼羅を地方に流布し信仰を深める役割の一端をになうために作られたのが、縮小版の当麻曼荼羅で、勝利寺にある当麻曼荼羅もその縮小版である。一辺がおおよそ4分の1であることから面積で16分の1となるため、十六分の一曼荼羅と呼ばれている。それでも一辺は128 × 112センチあり、鎌倉時代後期に作成されたと考えられるこの当麻曼荼羅は、中将姫信仰と共に高野聖によって広く流布された信仰の証として有意義なものであると考えている。

(9) 勝利寺本絵因果経

紀州藩主より寄進されたとされる勝利寺本絵因果経は、絵因果経全八巻の中の第五巻に該当する。製作年代は鎌倉時代後期のものと考えられる。元は絵巻であったが戦後散逸し、現在は絵巻ではなく、裁断されて表装し直されたものが数点確認されている。当然全巻が散逸されることもなく残っていれば、問題なく重要文化財には指定されている文化財ではあるが、どのような経緯があって散逸してしまったのかは不明である。しかし、このような重文クラスの文化財が勝利寺に存在したということは、勝利寺そのものが慈尊院と共に著名な寺院として存在したことの証明以外の何者でもない。

勝利寺本絵因果経については『国華』810号に田中一松氏による研究があり、裁断される前の状況が判る。本紙は33枚継ぎで約27センチの高さで、全長は17メートル弱にもなる。下段にはお釈迦様の本生譚（ほんしょうたん）を記した経文が書かれ、上段にはその内容にあわせた絵が描かれた。絵を見ながら経文の内容を説明し絵解きする形で利用されたと思われる。正式名称は「過去現在因果経」と記すように、仏教の基本概念の一つである因果応報の因縁について説いたものである。お釈迦様の前世における善行から、現世で悟りを開かれるまでの伝記を語る本生譚といわれる物語である。それに絵をつけて理解を早めるようにしたものが絵因果経である。過去の作善が現在の仏（釈迦）を生んだことを示し、仏教の根本概念を説明するのにはよいテキス

トであったと思われる。

(10) その他

室町時代後期に能や猿楽および田楽が流行するが、その時代を代表するかのような桃山時代製作と考えられる能面が二面残されている。また江戸時代前期の作で、本堂の左右の壁に4枚づつ貼り付け絵として保存されている真言八祖図や、室町時代の作になる弘法大師画像および江戸時代前期の不動明王像など多数の文化財が残されている。現在紙遊苑として使用されている庫裏も、元は高野山参詣の最後の宿泊地として勝利寺が使用されたときの宿坊であったと考えられる。「万年山勝利寺縁起」には、嘉応元年（1169）に後白河法皇が高野山への参詣の時、勝利寺に宿泊したとある。また御幸門と呼ばれる門もあり、多くの来訪者がこの寺に宿泊したと考えられ、歴史的にも由緒のある寺である。

第2節　定　福　寺

1　由　緒

定福寺は高野山真言宗の寺院で橋本市賢堂に所在する。高野山への古道である黒河道が寺の東側を通り、定福寺は黒河道に向かって石段の参道を開くかたちとなっている。黒河道は橋本市賢堂を起点として高野七口の一つ黒河口に至る橋本―高野山を最短距離で結ぶ道として知られ、橋本から紀の川を渡って黒河道を登る高野参詣客はまず同寺門前を通って高野山へ向かう。定福寺はまさに高野山黒河口への登山口にあたる。

寺の創建については記録が残されておらず詳らかでないが、『伊都郡学文路村誌』によると永禄年間（1558-1570）にこの地に建立されたとの伝承を紹介している。本堂は当初黒河道に向かって東面していたと伝えるが、現在は南面となっている。本堂鰐口には文政13年（1830）、堂前の石燈籠には天保15年（1845）の刻銘がそれぞれ認められる。

直接由緒にかかわる具体的な資料は失われて存在しないが、後述の本尊阿弥陀如来の推定時期や九重石塔のほか石塔類の時期、さらに寺に伝わる堂座講修正会などの民俗行事、寺に残されている念仏道具などからこれらをさらに遡る歴史をうかがうことができる。

2　本尊阿弥陀如来坐像（和歌山県指定文化財）

定福寺本尊の木造阿弥陀如来坐像は等身の仏像（像高88㎝）で、両手を腹前で組む上品上生印（弥陀正印）を結ぶかたちで表現される。阿弥陀如来は仏教では西方極楽浄土の教主とされ、念仏を行うものは必ず往生させるという仏で、浄土思想の普及に伴って多くの作品が造像されるようになる。

本像は頭身の主体部を一材から彫り出した一木造の仏像。9～10世紀の南都の影響を色濃く受けた作風で、均整のとれた頭体と緩やかに起伏する衣文表現にも柔らかさが感じ取れる優品で、10～11世紀ころの作と推定されており、浄土信仰が高野山麓

黒河道と定福寺参道

定福寺本尊阿弥陀如来坐像

定福寺九重石塔

の当地域でも広がっていたことがうかがえる。

なお、本像は長く秘仏とされ、住職一代に一度だけ開帳されることとされていた。

3　九重石塔（橋本市指定文化財）

定福寺境内黒河道沿いの石段の傍らに砂岩製の層塔が残されている。基礎部の銘から弘安８年(1285)に建立されたことが知られる鎌倉時代の石造層塔である。『紀伊続風土記』の賢堂村定福寺の項に「村中にあり境内東の岸に古き九重の石塔あり、銘に弘安第八暦二月願主とありて其余読かたし」と記されており、ここに記される紀年銘は現在も読み取ることができる。高さは2.43ｍを測り、下から８層目と九輪の六段目以上が欠損しているが、県下では鎌倉時代の年代の明らかな石造層塔の類例としては数少ない貴重なものである。

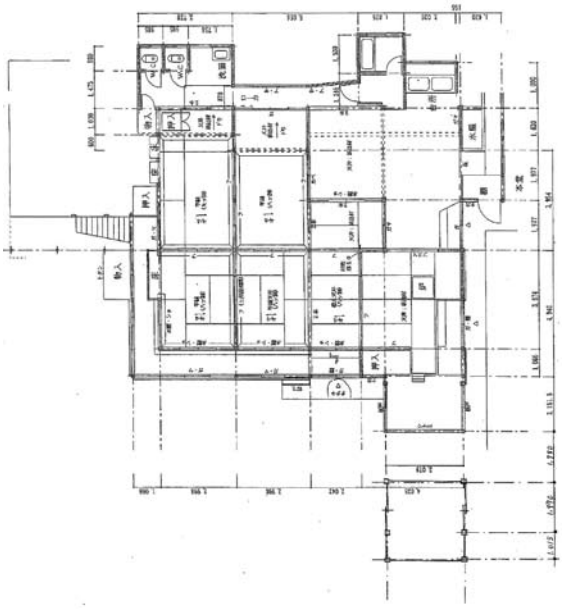
また、『伊都郡学文路村誌』には、「塔の下には石棺を埋めてあると言はれ『一村大飢饉の際に非ざれば発掘すべからず。』との伝えがあるとて人々畏怖して手を触れず」と記され、定福寺は信仰面ばかりでなく、賢堂村の中心的な拠点として、村人の拠り所となっていたことが察せられる。この九重石塔は上の伝承から黒河道の傍らで鎌倉時代以来往来する人々を見守ってきたといえる。

なお、この石造九重塔がすでに世界遺産に登録されている高野山町石道石造卒塔婆が鎌倉時代の文永・弘安年間にかけて建立されていることと時期を同じくしていることは注目される。

4　庫裏（国登録有形文化財建造物）

定福寺庫裏は桁行13.1ｍ、梁間10.5ｍの東西棟をもつ入母屋造の建物で、四周に庇をまわす。屋根は桟瓦葺とし、北側と西側に台所・洗面所等の増築が行われている。妻面は白漆喰で塗り込める。平面プランは棟通りで大きく南北に分け、南側を表向き（ハレの空間・公空間）とし、北側を裏向き（ケの空間・通常の生活空間）とし、東から1.5間を土間（現在は床を張る）、南面に玄関、東面に土間に通じる入口を２か所設ける。南側の表向き空間は西

定福寺庫裏



定福寺庫裏平面図（県教育委員会所見から）

から上座6畳、次の間6畳、4畳、土間とし、上座には厚い一枚板を床板とする「押板床」を構えるもので、この床構えは武家や大寺院など限られた建物に用いられることからこの建物の格式の高さが察せられる。4畳の南側には玄関を設け、玄関上には虹梁を載せる。北側の日常空間は、西から6畳、6畳、南北に3畳間を並列、土間の順に仕切る。建物の玄関･土間を除く周囲には一段さがった落縁を廻らす。

建築年代は明らかでないが、鬼瓦には宝暦11年（1761）の銘があって、これが庫裏の建築年代とみられている。九度山町の萱野家住宅主屋（九度山町指定文化財）は明和2年（1765）に建立されたもので高野山の僧侶が里坊とした建物であるが、当庫裏と同様の建築物であることから、当寺の庫裏もかつて里坊として建築された可能性があり、高野山の僧が避寒のために当地を訪れていたことが考えられる。また、同様の建築物の例が比較的近い場所に残されていることから、当地域の周辺にはいくつもの同様の建築物が建てられたことが想像され、周辺地域の庫裏としての典型を示す建築物とも考えられる。

5　民俗文化財

(1)　堂座講

室町時代頃から村々には堂座という組織が成立し、堂や寺の仏前で正月の修正会などの行事が行われた。そこでは堂内の座席の順位や左右の位置などが決められていて、厳しく守られてきた。堂座講は堂座・座講・堂の講などとも称され、構成員も村落の中で限られた者に限られていたことから、その閉鎖性ゆえに現在では多くが消滅してしまっている。

賢堂 座講 牛玉杖の儀式（『橋本市史』から）

賢堂 座講 弓放ちの儀式（『橋本市史』から）

賢堂定福寺の座講は年に2回開かれ、正月を初講、12月を納め講・しまい講という。寺の前を流れる堂の谷川の東と西から一人ずつ年行司が選ばれ､12月から2人で正月の修正会の準備に入る。修正会当日は堂内で読経や牛玉杖を用いた儀礼が終わると、本堂を出て境内の八幡神社へ移り、続いて九重石塔に立て掛けた大塔婆（8m程度の杉の皮つき丸太の側面を削って面を作ったもの）の前に御幣を立てて経をあげる。そのあと、弓放ちの儀式となる。長老が一本は天に向けて放ち、二本目は地に向けて放つ。三本目は明けの方向に向けて水平に放つ。これらの行事が終わると、22本の竹に「奉読誦普門品千部諸願円満所」､「奉唱念仏百万遍五穀成就所」記した護符を挟んで村境の11か所に立てる。

この座講は、近年こうした民俗行事が絶えていくなかで、今日に伝えられている数少ない貴重な行事といえる。

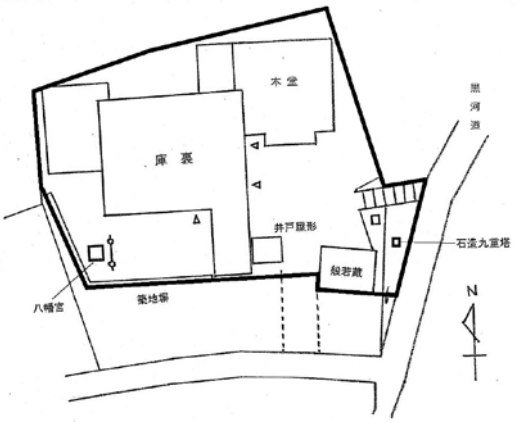
(2) 念仏

賢堂に残る念仏鉦・紐・撞木、太鼓等

平安時代から阿弥陀仏を念じれば極楽浄土に往生できるという浄土思想の広がりは高野山にも及び、その影響は山麓の周辺地域にも広がっていった。当地域においても中世には念仏が広がっていったとみられ、村々での六斎念仏として戦前頃まで各地で行われていた。

当地の念仏はすでに消滅してしまっているが、念仏が行われていたことを裏付ける念仏鉦や太鼓、古文書などが定福寺に伝えられている。念仏鉦は元禄5年（1692）の鉦をはじめとして6挺、寛政6年（1794）、天保4年（1833）の「太鼓念仏中」と記す太鼓6点が現存する。また、戦前まで踊念仏があったと伝え、念仏鉦が21挺あったというが戦時供出されたという。鉦をたたく撞木も18本残る。古文書などの記録類では寛文9年（1669）「賢堂村御念仏叩き鉦覚」、貞享5年（1688）「賢堂六斎衆中六斎人数覚」をはじめ昭和30年代までの史料が残されており、江戸時代初期の史料が現存することはこれ以前から念仏が行われていたことがうかがえる。

また、『紀伊続風土記』には「向副横座賢堂三箇村廻り持の阿弥陀の画像あり古天より降りたる阿弥陀なりとて天筆の阿弥陀といふ此像は河内の平野の大念仏和泉下の宮辺と此処と三幅の本尊なり此地にては大念仏本尊と唱ふといふ」とあって、阿弥陀画像が伝わっていたことが知れる。向副・横座・賢堂の3か村はもと1村であったことから、3か村廻り持ちの記述は1村であった頃からこの画像が当地に存在した可能性を示すとみられ、また、当地においても大念仏の本尊としてこの画像が掲げられていたものとみられる。しかし、残念ながらこれは現存していないのが惜しまれる。



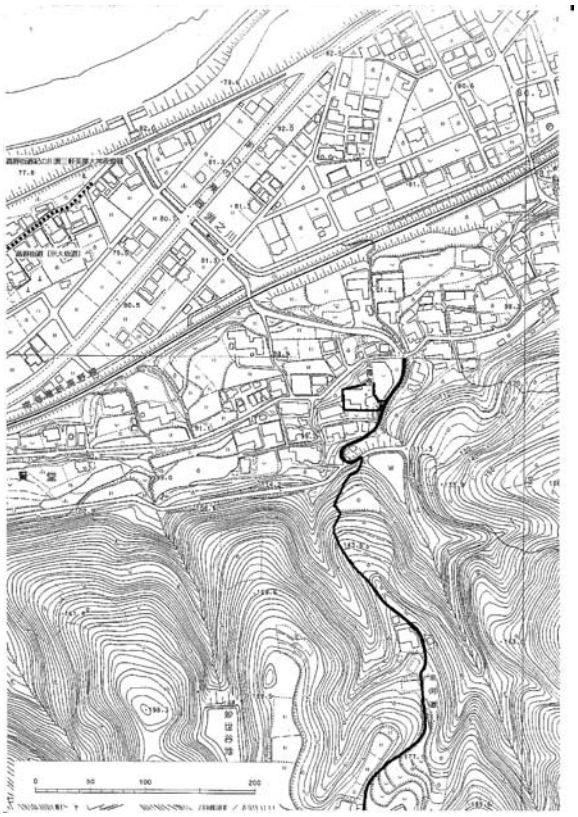
賢堂定福寺（配置図）範囲

6　黒河道と賢堂定福寺

定福寺と黒河道の関係を直接物語る史料は知られていない。定福寺は橋本から紀の川を渡り高野山へ向って山間に分け入る入口にあたるという地理的環境が注目される。また、かつて本堂が東向きに建ち、参道が黒河道に向って開かれている境内配置からも黒河道を意識したものであることが察せられる。

また、定福寺には上記のような文化財が伝えられており、鎌倉時代の九重石塔、室町時代の五輪塔・一石五輪塔・宝篋印塔など石塔類、中世に起源を持つとみられる当地域に残る民俗行事などから、寺の歴史も中世まで遡ると推定できる。高野登山にこの道が用いられはじめた頃にはこの寺が登山口にあたる当地に存在したことは容易に推察できる。

次に、高野山との関わりを考えると、本尊の阿弥陀如来坐像は都作的な作品として評価されているが、都作的な仏像は高野山とその周辺にみられるこ


定福寺周辺図

とが知られており、高野山の影響を考えることができる。念仏についても高野山の念仏が周辺地域に広がったことが知られており、寺に残される念仏鉦等の資料は、念仏が当地で行われたことを物語るものであり、高野系の念仏が当地とその周辺で行われていたとみられる。事実、隣接する清水地区では昭和30年代まで高野系の念仏が行われていた。

さらに、庫裏は宝暦11年（1761）の建築と推定されているが、前述のとおり建物の意匠から格式の高い建物であることが知られており、高野山の里坊とした可能性が考えられる。このように高野山と当地の密接な関係が同寺に残される文化財から推定される。

これら高野山との関係を示す文化財は当地と高野山の間を最短距離で結ぶ黒河道を介することは明らかである。かつて、太閤秀吉は高野山から下山の際当地を通っていることが史料に見え、貴人が多くの従者を伴って通行するに堪える道であったことが知られる。こうした高野山への動脈の一つ黒河道にあって、当寺が黒河道の登山口として意識されていたことは上記文化財からもうかがい知れる。

参考文献

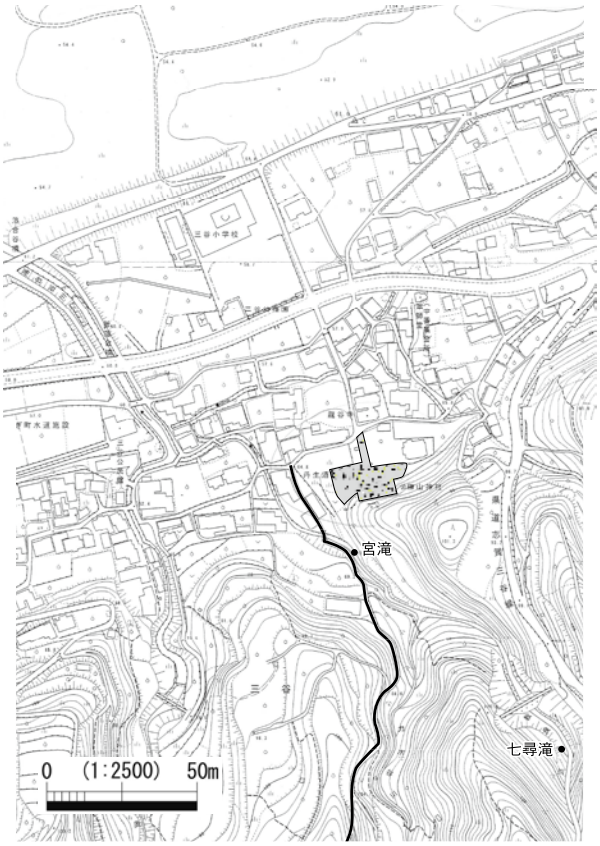
・伊都郡学文路村誌 学文路史蹟調査会 1936
・橋本市史 / 下巻 橋本市 1975
・紀ノ川流域の仏像 和歌山県立博物館 1981
・日本の美術 / 紀伊路の仏像 至文堂 1985
・橋本市史 / 民俗・文化財編 橋本市 2005
・紀伊国金石文集成 南紀考古同好会 1974
・橋本市史 / 民俗・文化財編 橋本市 2005
なお、境内には中世後半、室町期以降の五輪塔・一石五輪塔・宝篋印塔等の石塔類が残されており、同寺の歴史をうかがう手がかりの一つとなる。
・橋本市史 / 下巻 橋本市 1975
・橋本市史 / 民俗・文化財編 橋本市 2005
・高野山麓の六斎念仏　紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会 2009
・紀伊続風土記 / 伊都郡相賀荘賢堂村

第3節　丹生酒殿神社

「丹生酒殿神社」は、和歌山県伊都郡かつらぎ町大字三谷631番地ほかに所在する。紀ノ川南岸の比較的未発達な低位段丘面南端、紀伊山地から延びる丘陵の入口に立地し、高野山への参詣道である「三谷坂」に東接する。三谷坂の起点は紀ノ川沿岸の三谷津であるが、本地を境に傾斜が急になることと、道中最初の宗教施設であることから、三谷坂を通る高野参詣における実質的な玄関口であったと解される。また、三谷坂は天野を経由して高野山へ上る道であることから、高野山開創に深く関わったとされる丹生都比売神社との結びつきも強かったものと思われる。

『紀伊続風土記』には、丹生都比売神が本地に降臨した際に酒を献じたのが神酒の最初であり、それ故に「丹生酒殿神社」と称すとされている。また、旧暦の6月晦日に丹生都比売神社の神主が社人6人を率いて本地西側の谷に落ちる「宮滝」に胡瓜を供えたことや、丹生都比売神社の神主が丹生都比売神社に入る前に紀の川で禊して、百日間「竈門屋敷」（現在の「竈門垣内」、本地近く）にある竈門明神社に参詣したことなどが記されており、本地やその周辺においては丹生都比売神社と関連する伝承の多いことが窺われる。

『丹生大明神告門』に、「（前略）紀伊国伊都郡奄



丹生酒殿神社付近

太村乃石口ニ天降坐天、（中略）丹生都比咩太御神太御名顕給天（後略）」とあるが、「奄太村乃石口」は、境内南に落ちる滝（「七尋滝」）に比定されている（谷口 2003）。丹生大明神告門の成立年代は不詳であるが、「天野社位階注文」（『宝簡集』、1246）に引用されていることから、少なくともこれを遡る。また、『御手印縁起』所収の「山図」には、「伊都郡三谷村」の記載がある領域内に、「丹生高野酒殿」の記載とともに鳥居の描画がある。なお、『御手印縁起』は、12 世紀半ば以降、高野山が寺領拡大のために作成した偽文書である。ほかに、「酒殿社神主職譲状」（『丹生一麿氏文書』、1212）が建暦二年の年紀を有する。これらのことから、本地に座す丹生酒殿神社は遅くとも 13 世紀にはすでに存在していたといえる。

「酒殿社神主職譲状」（前掲）には、下記のように記されている。

「譲符属渡
　酒殿神主事
　右譲渡神主職者、自先祖之時于今無相違相伝之職也、
而丹生友家譲渡、若妨此職者可蒙　神冥之罰也
　放譲
状之旨如右、
　　建暦二年壬申正月廿七日
惣神主丹生則道」

丹生酒殿神社

七尋滝

惣神主丹生則道が丹生友家に、先祖代々の相伝により丹生酒殿神社の神主職を譲ったということがわかるが、惣神主とは丹生都比売神社の四神を祀る 4 人の神主（一の祝、二の祝、三の祝、四の祝）のうち、一の祝のことを指す。なお、則道が丹生都比売神社の惣神主職を友家に譲ったという内容を記す「天野社惣神主職譲状」（『丹生一麿氏文書』、1212）は、「酒殿社神主職譲状」と同一の年紀を有する。このことから、少なくとも 13 世紀はじめごろには、丹生都比売神社惣神主と丹生酒殿神社神主とが兼職されるようになっていたことがわかる。

以上から、丹生酒殿神社は、高野山開創に深く関わったとされる丹生都比売神社と地理的・歴史的に直結する拠点地として、遅くとも 13 世紀はじめごろには重要な位置を占めるようになったものと考えられる。さらに、本地を核とした一定の地域内に丹生都比売神に関わる多くの伝説を生み、顕著な普遍性をもつ信仰の対象として、高野参詣などの文化の形成に大きな役割を果たしてきたといえよう。

高野山参詣道「三谷坂」とも深い関わりを持つ丹生酒殿神社は、和歌山県の歴史を考えるうえで重要な史跡である。

第７章　参詣道の石造物

今回の石造物の調査対象の参詣道等のすべてについて、新出の有銘・無銘の中世を中心とする石造物を数十点見出すことができた。以下、その中の主だった遺物について紹介する。

第１節　高野山結界の道（女人道）

女人道は高野七口に設けられた女人堂を繋ぐ道として位置付けられている。

１「女人くまの道」の在銘地蔵石仏

現存する女人堂に立つ、砂岩製の舟形地蔵立像である。法量は、総高 64cm、像高 29cm、最大幅 34cm、奥行 22.2cm。銘文は正面から向かって左に「自是女人くまの道」、右に「為三宝謝徳乃至法界平等利益」、左側面に「施主、堺住人」、右側面に「奉供養高野山三十三度参詣」とある。地蔵尊の上部には、地蔵尊の梵字の「カ」を刻する。（実測図参照）

紀年銘はないが、地蔵尊全体と銘文の手法により、中世末から近世初頭の遺物と推定する。造立者の実名は明らかにしてない。注目されるのが、「女人くまの道」の銘文である。

“女人道”と明記する史料は、近世末の史料の『紀伊国名所図会』にある「女人堂道」とあるのがこれまで最古で、同名所図会に「女人堂めぐり」と明示するのを関連史料として挙げるだけであった。ところが、今回、本地蔵石仏の発見により、さらに、中世にまで“女人道”の呼称が存在したことを遡らせる可能性が出てきた。

女人熊野道の銘がある道標（地蔵石仏）実測図

同じく“くまの道”についても注目すべきで、熊野参詣の後に高野山へ、またはその逆に高野山からと熊野へと参詣するルートの存在が指摘される。本地蔵石仏の造立の目的は高野山参詣の三十三度の記念によるものであることも明記する。

２「くまの道、やまみち」在銘の明和２年（1765）地蔵石仏

相浦口の女人堂跡に舟形の地蔵立像の石仏がある。砂岩製で、法量は総高 53.5cm、最大幅 29cm。上部に地蔵の梵字の「カ」を刻し、向かって右側に「明和二　やまみち」、向かって左に「四月日　くまの道」と銘文がある。

明和２年（1765）４月に造立されたものである。ここでも「くまの道」が明記されている。

３　お助け地蔵所在一石五輪塔

近年、信仰を集めているお助け地蔵と称されている地蔵石仏がある。これは、明和８年（1771）12月造立のもので、「右 里うしん道、左 くまの道」と銘文がある道標である。大門から南へ 100m 程の同所付近は龍神道と女人道が交差する地点である。ここでも女人道ではなくて、熊野道として明記している。ここには、室町時代の五輪塔の残欠や近世の地蔵石仏が複数見られる。その石造物の中でも、一番古いと判断されるのが以下に述べる一石五輪塔である。

緑泥片岩製で、完形の一石五輪塔である。型式は地輪の下部を地面に埋め込む、埋込式である。法量は、総高 56cm、地輪高さ 29cm、地輪幅 11.8cm、奥行 7.6cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻する。銘文はないが、その形態は 15 世紀末頃の、文明期の遺物と推定する。

なお、一石五輪塔については、女人道の轆轤峠付

近においても2基が見出せた。いずれも、緑泥片岩製で銘文はないが、その形態により15世紀末と16世紀中頃の一石五輪塔と推定される。

4　真別所の鎌倉期五輪塔

真別所円通律寺の墓所のすぐ側を女人道が通るが、その墓所には近世の石塔とともに中世の石造物が見られる。中でも、鎌倉時代中期の弘安期ものと推定される五輪塔の残欠品の水輪と空風輪は、特筆される。

水輪の法量は高さ54.5cm、径70.8cm。上面には高さ2cmの円形座枘があり、その下には深さ8.2cmの円形の納入孔をうがつ。下面には、地輪を受けるための高さ2.2cm、径11.7cmの枘を造り出している。正面には大きく梵字の「ビ」を刻す。

空風輪は一石に造る。法量は、枘を含んだ空風輪全体の高さ42.8cm、火輪を受けるための枘の高さ4.0cm、径8.2cm。風輪の高さ17.6cm、径32cm。空輪の高さ21.2cm、径30.8cmである。風輪には梵字の「ウーン」、空輪に「ケン」と大きく刻している。高野山内の同時期の遺物の中でもひとまわりは大きい、大型のものである。

第2節　高野山結界の道（三山）

三山とは、高野山奥院の背後に位置する摩尼山・楊柳山・転軸山の3つの山を指してそのように言っている。その3つの山の尾根を廻るのを三山めぐりと称している。

1　摩尼山頂文明期一石五輪塔

緑泥片岩製で、完形の一石五輪塔である。型式は地輪の下部を地面に埋め込む、埋込式である。法量は、総高35cm、地輪高さ17cm、地輪幅9cm、奥行6cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪正面には、「妙悟」と銘文がある。紀年銘はないが、その形態により、室町時代の15世紀末の文明期頃の遺物と考える。

2　摩尼山頂享保5年（1720）の地蔵石仏

砂岩製の舟形の地蔵石仏である。地蔵立像を刻出する。法量は、総高37cm、幅18cmの小石仏である。舟形の上端に地蔵をあらわす梵字の「カ」を刻し、その上部左右に「真言、百万遍」。向かって右側に、「摩尼山庚申講中五人」。向かって左側に「享保五天子九月日」と銘文がある。

享保5年（1720）9月に、摩尼山庚申講の五人が、真言百万遍を成就した記念に摩尼山頂に造立した地蔵石仏と知られる。享保5年（1720）当時、摩尼山庚申講なる信仰集団が存在したことを今日に伝える。

3　楊柳山頂室町時代五輪塔

楊柳山頂にただ一基存在する、中世の石造物である。室町時代の五輪塔の水輪の下半分のみの残欠品で、砂岩製である。法量は、幅21cm。三山の古絵図で確認すると、山頂には五輪塔が一基描くものがあり、おそらくはその遺物の一部と考える。

4　転軸山頂鎌倉時代反花座

転軸山頂には中世石造物が複数見出され、特に注目されるのが反花座である。現状は下記に紹介の室町時代の宝篋印塔の基壇となっている。花崗岩製で、四面の側面を2区に分けてそれぞれに格狭間を入れる。その上に反花を配している。元は、五輪塔か宝篋印塔の反花座であったと考える。格狭間と反花の形状から、鎌倉時代の後期の遺物と推定する。

本遺物に見られる、四面の側面を2区に分けて格狭間を入れ反花を配する反花座は関東地方に多く見られるものであるが、元は奈良の古遺品にある手法のものである。高野山においては、初めて見出された同系統の遺物である。三山においては初めて見出された鎌倉時代の遺物である。

5　転軸山頂室町時代宝篋印塔

相輪の上端が欠落する他は、完備した室町時代初期の応永期の遺物と推定される宝篋印塔である。花崗岩製で、法量は総高72.3cm、幅27cmである。塔身には、梵字の「キリーク」「タラーク」「ウーン」「アク」が刻されている。尊名は、阿弥陀・宝生・阿閦・不空成就の金剛界四仏である。

同時期の石造物は、造立当初の形を止めているものは少なく、ほとんどが残欠品である。その点、本塔は造立当時の姿のままを残していて貴重である。銘文はない。

6　転軸山頂文明17年（1485）一石五輪塔

緑泥片岩製で、完形の一石五輪塔である。型式は

地輪の下部を地面に埋め込む、埋込式である。法量は、総高 49.0cm、地輪高さ 21.5cm、地輪幅 12cm、奥行 11.6cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪正面には、「文明十七年、覺乗　逆修、七月日」と銘文がある。

文明 17 年（1485）7 月に、覺乗が自身の逆修供養のために造立した一石五輪塔と知られる。三山において、在銘品では最古の年号を有する遺物である。

7　転軸山頂天文 14 年（1545）一石五輪塔

砂岩製で、空風輪が欠損した一石五輪塔である。型式はそのままでも立てて置ける、安置式である。法量は、現高 35.6cm、地輪高さ 16.4cm、地輪幅 13.8cm、奥行 13.6cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」を刻し、地輪正面には「天文十四年、善順　逆修、二月廿七日」と銘文がある。

天文 14 年（1545）2 月 27 日に、善順が自身の逆修供養のために造立した一石五輪塔と知られる。

8　転軸山頂元禄 5 年（1692）一石五輪塔

砂岩製で、完形の一石五輪塔である。型式は地輪の下部を地面に埋め込む、埋込式である。法量は、総高 48cm、地輪高さ 21.8cm、地輪幅 12.2　cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪向かって右側面には「紀刕和歌山、川比勘太夫為」、地輪正面に「了壽院西月貞永信尼」、地輪向かって左側面に「元禄五壬申□、六月六日」と銘文がある。

紀州和歌山の川比勘太夫の妻と思われる了壽院西月貞永信尼のために、元禄 5 年（1692）6 月 6 日に造立された一石五輪塔と知られる。院号の法名により、相当の地位の人物であったことが考えられる。

なお、高野山においては、この元禄期の頃まで、同タイプの一石五輪塔の造立が見られる。共通して、埋込式の砂岩製のものである。背面の整形は荒く、あらたたきのままである。転軸山頂には、この他に砂岩製の五輪塔の空風輪 1 点・一石五輪塔 5 点、緑泥片岩製一石五輪塔 1 基が見出された。

第 3 節　不動坂

近世になり、高野山登山は、山麓の橋本から学文路（橋本市）⇒河根（九度山町）⇒神谷（高野町）⇒不動坂（高野町）と経て、高野山上の女人堂（現存）へと行くルートが最短で盛んに用いられ、高野山の表参道の様を呈するようになった。この道は、京・大坂道と呼ばれた。

今回の調査を契機にして、江戸時代に使用された古の不動坂（旧不動坂）が見出されたが、その古道整備の時の平成 23 年に、岩不動（別名：中の不動）付近から経石と思われる扁平な河原石と、拳大程の大きさまでの河原石が、100 点程散乱している様が見られた。記されていたであろう経文は、確認できなかった。詳細な、それら河原石を採取する際に、江戸時代の通貨の寛永通宝を 1 点発見できた。恐らくは、経塚施設がこの付近にあったものと考える。寛永通宝はその経塚の副葬品であろう。河原石の石材は、緑泥片岩・花崗岩・砂岩など各種の石材が認められた。

1　華　瓶

砂岩製で、総高 97.4cm、上端幅 39.0cm、下端幅 45.0cm。裾広がりの方柱状の形態をする。上端は円形に彫りくぼめた中に、2 つの円形の納入孔をうがつ。通常の華瓶は納入孔は 1 つであるが、大型のために 2 つとしたことが考えられる。紀年銘はないが、正面に「弘法大師御法楽」と銘文がある。その形状から、江戸時代初期の遺物と推定する。（実測図参照）

華瓶とは、神前・仏前に供える生花を立てる器のことである。高野山周辺には、近世の華瓶が広く分布する。本華瓶は、それら高野山周辺の遺品の中で、最大規模の大きさのものである。通常の大きさの 2 倍以上もある遺物で、高野山山頂の手前で、本華瓶に生花を捧げたのである。

本華瓶は、高野山西南院所蔵の江戸時代後期のものと推定されている高野山古絵図にそのかつての姿が描かれている。不動坂の道をはさんで両側に、向って左が今回見出された華瓶で、右側には「四社明神」と銘がある同タイプの華瓶がある。その意義は、銘文にもあるように、参詣人は高野山入山を前に高野山の地主神である高野山四社明神と高野山を開いた弘法大師に生花を捧げたのである。

高野町不動坂「弘法大師御法楽」銘のある華瓶実測図

不動坂　華瓶（弘法大師御法楽）

（追記）

本稿脱稿の直後、不動坂の華瓶の一対の内、所在不明となっていた「四社明神御法楽」と銘がある華瓶が、付近において偶然に発見された。紹介の華瓶と同一タイプの遺物である。おそらくは、同時に造立されたものと考えられる。（掲載写真参照）

不動坂　華瓶（四社明神御法楽）

2　四寸岩

弘法大師空海の足跡が２つあり、その幅が４寸あることから、四寸岩と称する、緑泥片岩の岩石である。かつてはこの岩を、京・大坂道から高野山登山をした参詣人は必ず通らねばならなかった。　この四寸岩の名称については、高野山だけでなく、近くは奈良県吉野郡川上村の四寸岩山が挙げられる。同山は大峯山系で、修験道関係が指摘される。また、遠く関東においても埼玉県入間郡越生町の高山不動尊へと向う四寸道の道中にある大岩があり、東北では山形県の山寺立岩寺の四寸道が挙げられる。いずれも修験道関係の遺跡であり、高野山においても同様に修験的要素を今日に伝える遺跡として重要である。

3 「くまの道」の在銘地蔵石仏

高野町神谷に所在する、江戸時代後期の遺物と推定される地蔵立像石仏である。砂岩製で、法量は、高さ 50cm、幅 23cm。正面上部中央に、地蔵菩薩をあらわす梵字の「カ」を刻し、向かって右に「右これよりくまの道」、向かって左に「施主大阪山口屋利兵衛」と銘文がある。

4　旧不動坂発見の寛政４年（1792）道標

今回の調査で、不動坂の元の登山道が見出され、江戸時代の在銘の道標も発見された。法量は、高さ 95cm、幅 24cm、奥行 23cm。細長い、方柱状の形態である。銘文は、正面に「右かいやせ　きのを　京　大坂道」、背面に「寛政四壬子年七月立」、右面に「南無大師遍照金剛」と刻す。寛政４年（1792）造立の道標である。（掲載写真参照）

不動坂　道標

5　作水の地蔵堂内の一石五輪塔２基

京大坂道には、橋本市清水地区の第一の地蔵から始まり、高野山山麓の高野町西郷地区の第六の地蔵と称されているものまで６つの地蔵が街道筋に順に見ることができる。今でも、在地においては広く信仰の対象となっている。

『紀伊続風土記』にはその六地蔵の記載があるので、江戸時代後期にはその存在が確認できる。実際にそれら地蔵尊を調査すると、江戸時代のものばかりであったが、第五の地蔵がある作水の地蔵堂内において、在銘の一石五輪塔が２基見出された。

先ず、地・水・火輪を残す残欠品の砂岩製一石五輪塔である。法量は、現高 53.3cm、地輪高 18.5cm、地輪幅 13cm である。地輪底部を地中に埋め込む埋込式一石五輪塔である。銘文が次のようにあるが、向かって右側が欠落していて、被供養者の法名があったと思われる部分が不明となっている。

（ア）　逆修

時正

文明十一年九月

と銘文がある。文明11年(1479)9月の彼岸中日に、逆修のために造立された一石五輪塔であることを伝えている。

次に、地輪のみの残欠品の砂岩製一石五輪塔である。法量は、高さ 16cm、幅 12.5cm、水輪の跡をわずかに残していて、その水輪の下端の幅は 11.5cm である。銘文が、

道常禅門

（ア）

□享元年七月

とある。年号のはじめの一文字が欠落のため不明となっているが、一石五輪塔全体の手法により、「長享」と推定する。長享元年（1487）10 月 7 日に、道常禅門のために造立されたものと知られる。

注目されるのが、地輪底部にある枘(ほぞ)である。高野山の一石五輪塔の形態に地輪底部に枘があるものが 16 世紀の遺物の前後に多くあって、その大半が緑泥片岩製のものであるとは度々の機会に紹介したが、近年、その数はわずかであるが、砂岩製の一石五輪塔にもその枘式のものが発見されてきた。本一石五輪塔もその一つであり、新たな貴重な石造物の発見となった。

第４節　黒河道

黒河道については、高野七口の一つとされながらも、これまで本格的な調査研究がなされてなかった。それは、これまで同道が周辺住民の生活道であるとの見方があったことによる。ただ、豊臣秀吉が高野山登山の後に、駆け降りた道であると伝えていて、太閤坂の地名も残り、他の参詣道と同様の性格がある可能性は秘めていた。今回、そのことを実証する遺物が見出された。

最も注目すべき発見が、高野山への入り口の峠の子継峠から発見された永正９年（1512）地蔵石仏である。同石仏により、中世後期の高野山参詣道としての黒河道の存在が、垣間見られることとなった。同時代において、相当の参詣人の高野山登山が、黒河道を使用したことなどが推測される。

次に、黒河道の参詣道の中程にある、九度山町東郷の高野豆腐工場跡地より室町時代の在銘の五輪塔（下記の 2，3）の他、無銘ではあるが室町時代初期の応永期・天文期・慶長期と推定される宝篋印塔の基礎が３基見出された。付近は集落の存在が確認されない地点である。このような、山中に石造物の造立となった事由は何故であろうか。

そのヒントは他の高野山参詣道に求めることができる。それが高野山町石道である。かつて高野山山麓の九度山町古沢地区・同笠木地区などにおいて、死者の死体は高野山の中腹の花坂へ登山して運び込んで葬った、という記録や伝承があることである。これは山中他界の信仰である。山の中腹付近には死者の霊が漂い、その霊は次第に浄化して山頂に行くと信じられていた。推定の域を出ないが、おそらくは上記の花坂のケースと同様に、黒河道の東郷においても、付近の山麓の村々から死者が同地に運び込まれて、それに関連して造立された石造物と推定する。本石造物の存在について周辺地区への聞き取り調査をしたところ、東郷においてはその存在が知られていた。東郷から黒河道へ通じる古道も一方においてあることから、その可能性がでてきた。

さらに、花坂においてはかつての高野山の結界のシンボルと考えられる袈裟掛石・押上石が今も存在するが、黒河道においても下記の３に述べる大黒岩と称する大石が見出された。高野山町石通と黒河道は、ルートは違うものの共通の信仰の遺物が発見されたのである。

黒河道の山下の出発点ともいえる、定福寺においても数十基を数える中世石造物が今に残り、ここでも新たな発見があった。戦後に廃村となった、旧黒河村においてもこれまで中世石造物が無いとされていたが、無銘品ながら中世の一石五輪塔が発見された。

また、高野山参詣道としての黒河道のかつての往時の姿を伝えるものに、同道の久保地区に立つ茶堂がある。近年まで江戸時代に遡る茶堂があったが、老朽化にともない解体され、かつての建造物よりかなり縮小した小堂として再建された。今回の調査で、

九度山町久保茶所跡の弘法大師版木拓影

これまで同堂にあったとされた鉄製の茶釜と、同所で発給していた江戸時代と思われる弘法大師像のお札の版木が再発見された。高野山参詣人へお札やお茶の接待をしたことを示す貴重な資料である。（掲載拓影参照）。お札には右から左へ「法師田和茶所」と刻されている。

この久保の茶堂の弘法大師像は花崗岩製の丸彫りのものであるが、その基礎に「弘法大師、奉四國遍路納経、是ヨリ奥院へ三十六丁二間半、丹生川村、施主俗名 弥次良 妻くめ、享和元年酉年三月廿一日立」と銘文があった。享和元年（1801）丹生川村の夫婦が四国遍路をして、その納め札を奉納する目的で弘法大師像を造立したことと、同時に同地から奥院までの黒河道の道程の 36 町余りの距離を示す道標であったことが分かる。この弘法大師像は煤で真っ黒であったものを、近年磨いて元の色になったものである。黒河道から高野山登山をする参詣人の人たちに相当のお茶による接待をしたことが伺える。

同地の久保から以下に述べる子継峠を経て高野山の奥院へと辿るルートが最短距離であり、一口に黒河道と言っても、本弘法大師像が示すルートと久保から黒河村へ行き奥院へと行く道と２つはあったことが指摘される。久保から黒河村へと行くルートを示すものとして、旧久保小学校前の明治期に造立された道標がある。

なお、前記の東郷の高野豆腐工場は、昭和の初めまでは稼動していたとされる。付近からは、直径が 45.5cm を測る砂岩製の大型の石臼が２点地表に露出する他に、コンクリート製の大型の水槽の残欠が３基並んでいるのが確認された。近代建造物の遺構ではあるが、これまで知られてなかったもので、貴重な発見である。

１　子継峠の永正９年（1512）地蔵石仏

九度山町久保地区から最短で結ぶ高野山へ入る峠の子継峠から発見された室町時代中頃の在銘品の石仏が見出された。本石仏は、これまでも子授けの信仰があった石仏で、何枚にも重ねて子宝を願う人たちが奉納した、よだれかけが納められていた。峠名から派生した信仰と考える。奉納された年で古いも

のは、昭和30年代から見られた。

緑泥片岩製の舟形光背の一石彫成の地蔵菩薩立像石仏である。上部が欠損する他は、造立当時のままに現存する。法量は、総高84.0cm、地蔵菩薩の像高59.6cm、幅40.0cm、奥行19.2cm。欠損部分から想定される造立当初の本石仏の総高は120cm程にもなるものと考える。

この当時の石仏は、高野山奥院に見る通常のものでは、小型で総高30cm程、大型でも90cm程度である。その点、本石仏は最大級の大きさであり、造立者の経済的背景があっての造立となった遺物と考える。石仏の下部に蓮弁を刻し、その上に尊像を半肉彫する。向かって右側に「十三年　検校重任」、向かって左側に「香春峠　永正九㊐八月廿二日」と銘文がある。（実測図参照）永正9年（1512）8月22日に、時の高野山主の検校の重任が造立した石仏と分かる。上部が欠損していて、銘文の「十三」の意味は不明である。高野山主による石造物の造立は鎌倉時代の高野山町石の若干の事例の他にはなく、極めて重要な位置を占める石仏である。

さらに、本石仏の重要性を高めているのが、峠名である「香春峠」を明記していることである。「こつきとうげ」と読まれる。本石仏は、いわゆる峠の地蔵として造立されたのである。峠とは境界を意味していて、全国に峠の地蔵は造立されているが、峠名を明記する中世の石造物は類例がなく、全国的にみても貴重な遺物である。

また、民俗学的にも本石仏は貴重で、いわばこの世とあの世の境が峠であり、黒河道より、高野山登山をする参詣人の人々の異界の高野山の入口の道標としての性格もあったことが指摘される。かつては本石仏付近にお堂があったことも分っている。高野山は女人禁制であり、この本峠付近にもかつて女人堂が存在したことも考えられる。

峠名も、現在は子継峠とされているが（または、粉撞峠・粉突峠とも表記される）、500年前の中世の時代は香春峠と表記していたことも明らかにしていることも重要である。黒河道の参道筋の村々である、九度山町久保地区・旧黒河村では、かつて本地蔵石仏付近において奥院から輩出する線香の灰を野菜などと交換して持ち帰り、畑の肥料としていたとは古老の談である。そのことを裏付けるような峠名である。

子継地蔵

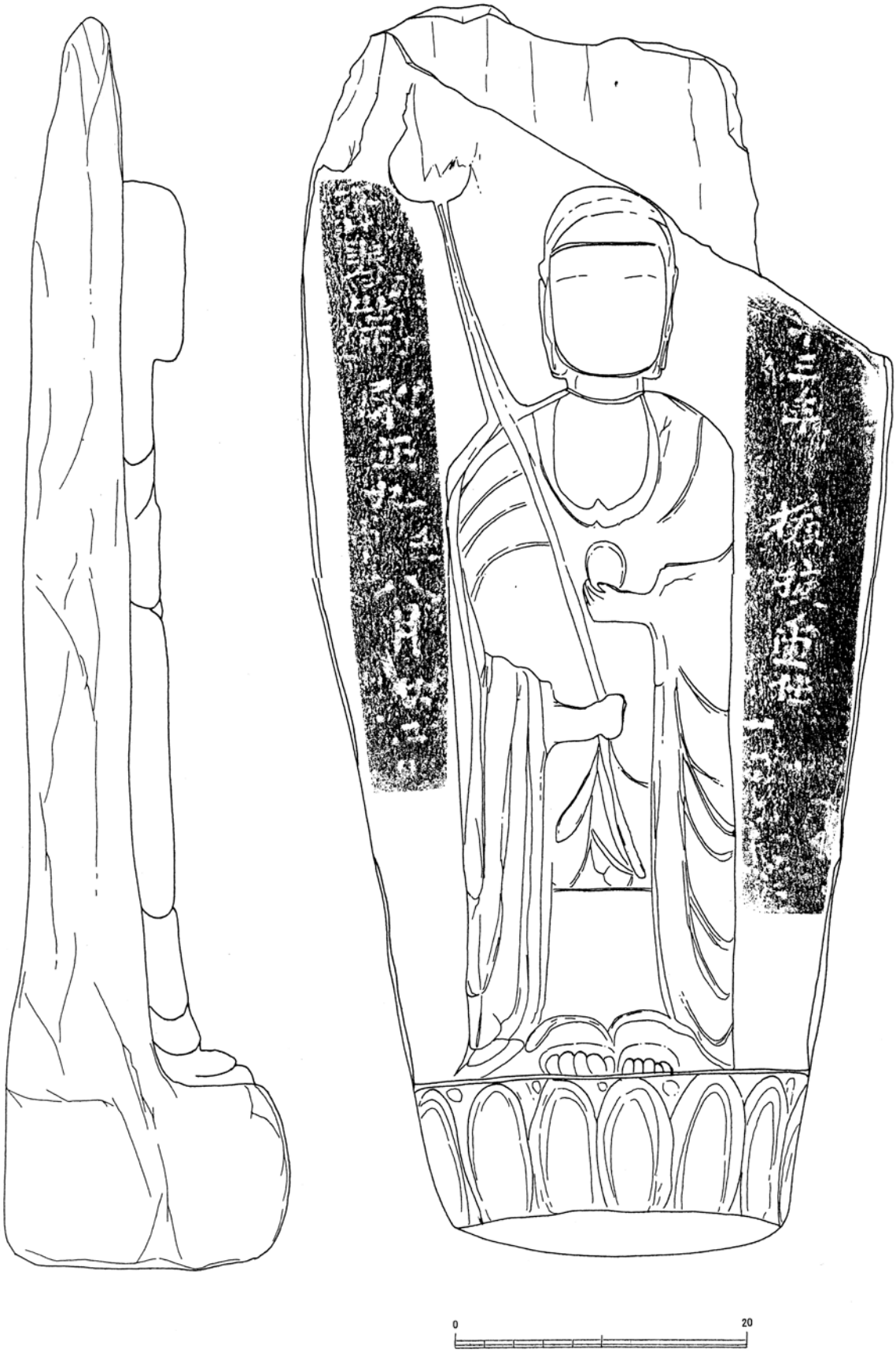
2　九度山町東郷応永４年（1397）五輪塔

九度山町東郷の高野豆腐工場跡地より発見された。砂岩製で、五輪塔の地輪部分のみの残欠品である。法量は、高さ14.4cm、幅20.0cm、上端には、別石の水輪を受けるための径3.8cm、深さ0.2cmの孔をうがっている。正面には梵字の「ア」を刻し、「道光禅門、三月、応永㊂年、五日」と銘文がある。㊂は4の異体字で、応永4年（1397）3月5日に、道光禅門のために造立された五輪塔と知られる。

3　九度山町東郷喜吉３年（1443）五輪塔

これも、九度山町東郷の高野豆腐工場跡地より発見された。砂岩製で、五輪塔の地輪部分のみの残欠品である。法量は、高さ11.4cm、幅17.5cm、上端には、別石の水輪を受けるための径4cm、深さ0.4cmの枘孔をうがっている。正面には梵字の「ア」を刻し「道妙禅門、嘉吉三二月三日」と銘文がある。嘉吉3年（1443）2月3日に、道妙禅門のために造立された五輪塔と知られる。

なお、この高野豆腐工場跡地付近の黒河道に面し



高野町子継峠の永正９年（1512）地蔵石仏実測図

た岩肌に大黒さんの足跡とされている自然石の岩の通称大黒岩がある。また、一説には、弘法大師の足跡とも伝えている。足跡の法量は、凹面の長さ24cm、幅10cmである。

4　旧黒河村平地区文明期一石五輪塔

平地区の観音堂付近において発見する。15世紀末頃の文明期の一石五輪塔と推定される。緑泥片岩製で、埋込式である。空輪は欠落し、風輪の一部も損している。高さ36cm、地輪高さ22cm、幅8.2cm、奥行4.8cm。地・水・火の各輪に梵字の「ア」「バ」「ラ」を刻し、地輪の正面右上部に、「妙日」と銘文を刻している。妙日のために造立された一石五輪塔と知られる。平地区については、平家落人伝承があるところである。平氏供養のための塚があったことも分っている。確かな文献史料はないものの、本石造物の発見により少なくとも室町時代までは遡ることが可能となった。

また、同村仏谷地区においても、砂岩製の完形の一石五輪塔が見出された。法量は総高46.0cm、地輪高さ16.0cm、地輪上端幅12.6cm、地輪下端幅14.0cm、地輪上端での奥行12.0cm。銘文はないが、各輪に梵字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻する。形態により16世紀末の天正期の遺物と推定する。

5　橋本市賢堂定福寺弘安８年（1285）九重層塔

花崗岩製である。現状は八層の層塔であるが、元は九重の層塔であったことが指摘される。基礎の正面に「弘安第、八暦乙酉、二月十三日、願主黄善、敬白」と銘文が刻されている。層塔の形状と銘文ともに、鎌倉時代中頃の弘安期の石造物である。「黄善」という在俗出家者が願主となって、弘安８年（1285）2月13日に造立された九重の層塔と知られる。

初軸の塔身の4面に反花座を刻して、二重円光の光背を掘りくぼめた中に如来坐像を半肉彫する。現状の正面が薬師如来で、その反対側が阿弥陀如来である。左が釈迦如来、右が弥勒菩薩と判断される。この四方仏は、密教系ではなく顕教系のものである。東方を向くのは薬師如来、西方が阿弥陀如来、南方が釈迦如来、北方が弥勒菩薩であり、四方仏としては、造立当初のままの方位に立つ塔であることがわかる。本塔は橋本市内で在銘最古の遺物でもある。高野山町石卒都婆の造立と同時期の遺物であり、注目される。

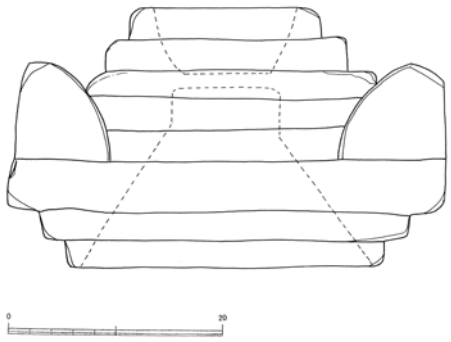
なお、近刊の『橋本市史 民俗文化財編』（平成17年）において、橋本市利生護国寺所在の文永11年（1274）宝篋印塔を市内在銘最古の遺品であると比定されているが、実はその形態は室町時代後期のものである。

6　橋本市賢堂定福寺鎌倉時代宝篋印塔

花崗岩製で、笠のみの残欠品である。法量は、高さ23cm、幅40cm。隅飾の高さ14cm、幅9cmで、外側の線は直立に近く、背の高い一弧で無地の馬耳状の鎌倉時代中期の古式を呈している。笠の高さに対する幅の比率も1/2に近く、これも古式のものに見られる数値である。（実測図参照）

全体に重厚さがあるものの、若干の規格化された様子もうかがえることから、少し下って鎌倉時代後期の遺物と推定する。笠のみの残欠品であるが貴重である。鎌倉時代の宝篋印塔は、紀ノ川域では本宝篋印塔が、今回初めて見出された鎌倉時代の遺物である。

笠の上端には、相輪を受けるための径11cm、深さ5cmの枘孔がある。注目されるのは、下端にうがった奉納孔で、二重の構造になる大変珍しいものである。下端の径は27cmで下端の幅いっぱいに孔をあけて、深さ13cmまでに徐々に幅をすぼめて、さらにその先の深さ4cmまで幅4.8cmの小型の円孔をうがつ。この奉納孔の形から想定されるのは、蓋を有した蔵骨器であり、おそらくはこの笠を受ける塔身部分にも納入のための奉納孔があったものと考える。これほど大きな笠にうがった納入孔は、管見にない。



橋本市賢堂定福寺鎌倉時代宝篋印塔笠実測図

7　橋本市賢堂定福寺享徳４年（1455）五輪塔

砂岩製で、五輪塔の地輪部分のみの残欠品である。法量は、高さ 14cm、幅 20.6cm、上端には、別石の水輪を受けるための径 5.4cm、深さ 0.8cm の枘孔をうがっている。正面には梵字の「ア」を刻し、「道宗禅門、享徳四七月五日と銘文がある。享徳４年（1455）７月５日に、道宗禅門のために造立された一石五輪塔と知られる。

8　橋本市賢堂定福寺文明８年（1472）五輪塔

緑泥片岩製で、五輪塔の地輪部分のみの残欠品である。法量は、高さ 11cm、幅 17.4cm、上端には、別石の水輪を受けるための径 5cm、深さ 0.2cm の枘孔をうがっている。正面には梵字の「ア」を刻し、「妙林禅尼、三月、文明八年、廿五日」と銘文がある。文明８年（1472）３月 25 日に、妙林禅尼のために造立された五輪塔と知られる。

9　橋本市賢堂定福寺文安２年（1445）五輪塔

砂岩製で、五輪塔の地輪部分のみの残欠品である。法量は、高さ 13cm、幅 16.6cm、上端には、別石の水輪を受けるための径 4cm、深さ 0.6cm の枘孔をうがっている。正面には梵字の「ア」を刻し、「永香禅尼、二月、文安二、廿一日」と銘文がある。文安２年（1445）２月 21 日に永香禅尼のために造立された五輪塔と知られる。

第５節　西国街道

和歌山方面の大和街道にある粉河から高野山へと登山する、粉河⇒麻生津⇒麻生津峠⇒市峠⇒志賀⇒花坂⇒高野山への主要道は、西国街道（いわゆる西高野街道）として平安時代後期にさかのぼる高野山への古道として注目されている。今回それに相応する石造物が見出された。

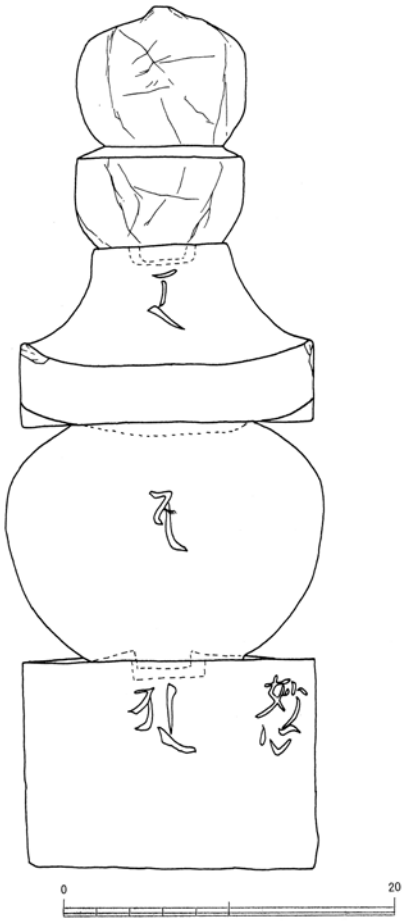
かつらぎ町御所は、この西国街道より少し脇道にそれたところにあるが、『紀伊続風土記』によると昔、高野御幸の時にこの地に仮御所が建てられたことにちなんだ地名とある。同地の薬師寺には、南北朝時代の薬師堂厨子と平安時代の 11 世紀の作と推定されている薬師如来像と地蔵菩薩像・菩薩像の３体がある。石造物についても、薬師寺裏に集積されていて、室町時代の在銘品に混じって、不動明王をあらわす梵字の「カーン」を碑面に大きく刻した緑泥片岩製の板碑が確認される。銘文は認められないが、梵字の手法により鎌倉時代末から南北朝時代の遺物と推定する。

さらに、かつらぎ町御所においては、別に中世の五輪塔等を集積する場所があって、そのほとんどは室町時代の遺物であるが、その中の１基の砂岩製の地輪と水輪が一具のものは、南北朝時代末頃の形状であることが認められる。

また花坂においては、室町時代の仁和寺門跡の静覚法親王の陵墓と伝承する地点で、下記の石造物が確かめられた。

1　伝静覚法親王五輪塔

砂岩製で、地輪・水輪・火輪・空風輪の４石彫成の五輪塔である。室町時代の典型的な別石造りの五輪塔で、伝承の静覚法親王の時代とは合致する。同時代の別石造りの五輪塔は、造立当初の現状を止め



高野町花坂伝静覚法親王陵墓五輪塔

るものはほとんど存在しない中、本五輪塔はよくその姿を伝えている。（実測図参照）

法量は、総高51.6cm、幅19.0cm。各輪に梵字の「ア」「バ」「ラ」を刻するが、空風輪の正面の碑面は欠落していて梵字を確かめられない。地輪正面に「妙心」と銘文がある。

静覚法親王は、『高野春秋』によると、応仁の乱の兵火で灰塵に帰した仁和寺から、応仁2年（1468）2月に高野山へと逃れて高野山光台院に入り、後光台院と称された。静覚法親王が後光台院と称したことは、仁和寺側の史料の仁和寺御伝等にも認められる。

光台院は、その開基が後鳥羽天皇の第二皇子の道助親王とされているが、一方で白河天皇の第四皇子の御室覚法親王とも伝え、代々御室仁和寺が兼帯した。室町時代の戦火で、門跡の静覚法親王が高野山光台院へ逃れた理由も、これにより分かる。覚法親王の陵墓の敷地は15坪程で、その手前に50坪程の畑があり、古来より御室屋敷と呼ばれていて、静覚法親王御隠棲庵跡とされている。考えられるのは、同地に高野山光台院の里坊があったことであり、同親王没後に同地裏山に葬られたことなどが考えられる。

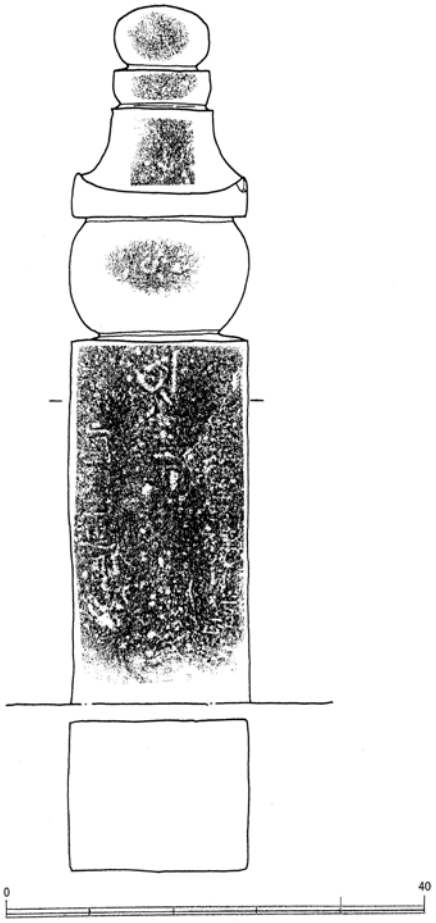
2　伝静覚法親王一石五輪塔

『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告 17輯』（昭和13年刊）によると、先に紹介の伝静覚法親王五輪塔に並んでもう1基五輪塔が立っていたが、今は花坂大橋の3町ばかりに移動して、地蔵尊として尊崇されていると記されている。それが本紹介の一石五輪塔である。何故移設されたかは明記されてないが、御陵に並んで立っていたことから、ここでは伝静覚法親王一石五輪塔として述べる。

現状も、昭和13年当時と同じで御陵の西側300m程の道の路傍の、向え御室と言われる場所に立つ。石材は砂岩製で、完形の一石五輪塔である。地輪の下部を地中に埋め込む、埋込式一石五輪塔である。法量は、総高82.8cm、地輪高さ43.2cm、地輪幅21.0cm、地輪奥行18.0cm。地輪下部の埋め込み部分を含めると、総高は1m以上になる。各輪には、梵字の「ア」「バ」「ラ」「カ」を刻するが、空輪部分は摩滅したのか梵字は明白にされない。

地輪正面には、3行にわたり銘文が認められるが判読ができない。向って右側に造立の年月日と中央と左側にある。右側の年号は不読であるが、その下は「三年癸亥八月廿一日」と読める。（実測図参照）この一石五輪塔の形態は、15世紀末から16世紀初頭であり、そこに該当する癸亥の3年は、文亀3年（1503）となる。同年7月15日は静覚法親王が65歳で寂した時にあたる。

この一石五輪塔が造立されたのが、同年8月21日であり、7月15日から数えると、親王寂後36日目にあたる。そうなると、親王の35日法要の後に供養のために造立された一石五輪塔とも考えられる。一石五輪塔の形態からも同時期の遺物と比べると、大きさは通常の2倍以上もあって注目される。



高野町花坂伝静覚法親王陵墓一石五輪塔

第6節　三谷道

三谷道は、『御室御所高野山御参籠日記』の久安4年（1148）4月6日条に「到三谷之前下船、経三谷坂到天野」と明記され、平安時代末期にまで遡ることができる古道である。また、三谷道の出発点ともいえる丹生酒殿神社は、丹生都比売神の降臨の地の伝承がある。今回そのことに相応する古遺品が、数点見出された。それらは、高野山登山の表参道とされる町石道に立つ石造物の町石の鎌倉時代中期の文永・弘安年間のものよりも古い石造物であった。

1　頬切地蔵（自然石一重塔造り出し石造物）

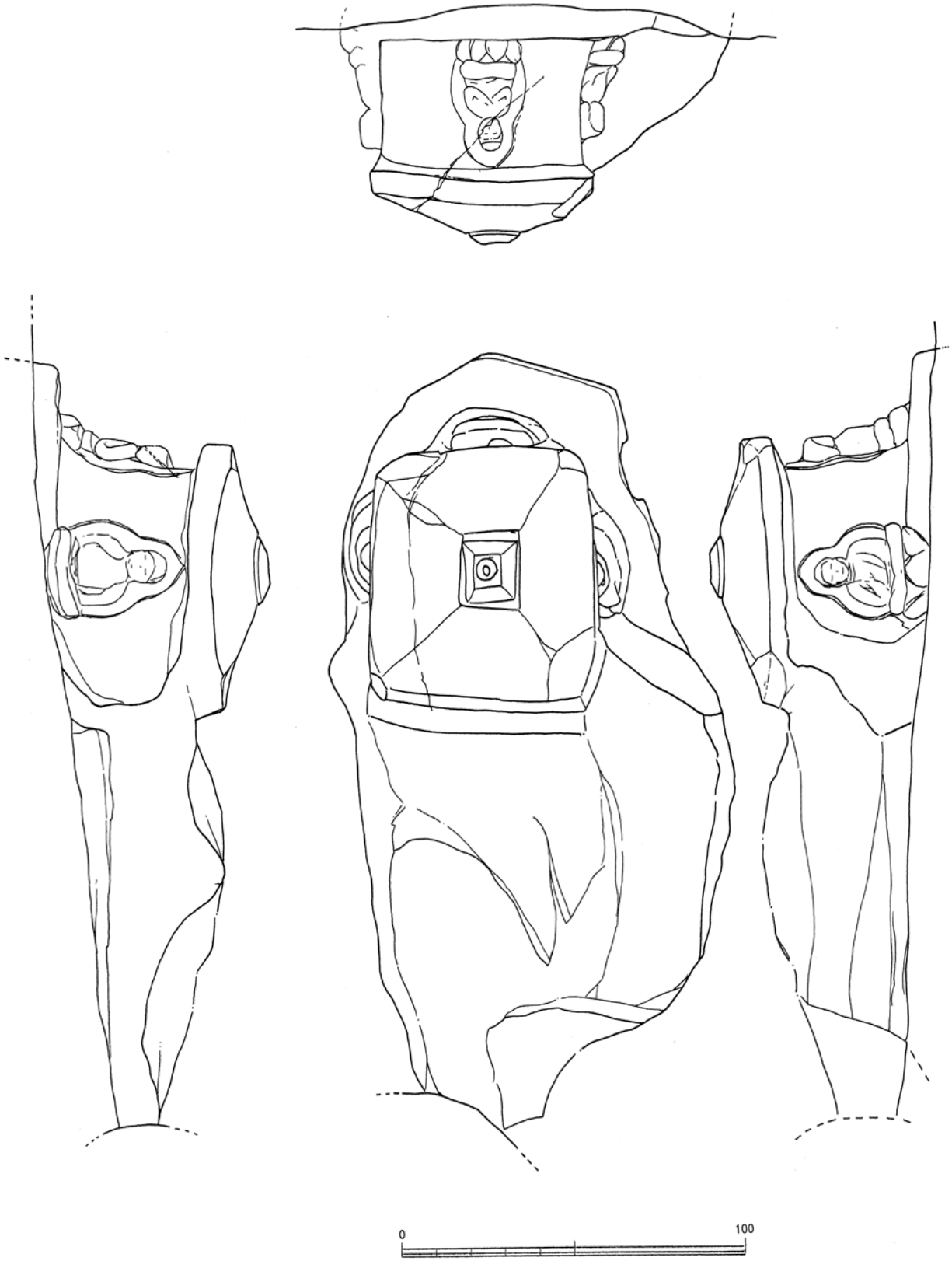
かつらぎ町立三谷小学校の南約2㎞の三谷道の山中に立つ石造物である。地元では、頬切地蔵と称さ

かつらぎ町三谷道頬切地蔵刻出の釈迦如来実測図

かつらぎ町三谷道頬切地蔵刻出の大日如来実測図

かつらぎ町三谷道頬切地蔵刻出の阿弥陀如来実測図

三谷道頬切地蔵　各仏



かつらぎ町三谷道頻切地蔵実測図

れ、『紀伊続風土記』には、「頬切地蔵　境内五十三間　村の南天野街道にあり　紀ノ川より十五町にあたる自然石に大日地蔵阿弥陀三尊を刻む　中尊の頬少し切れたり」と明記する。

法量は、奥行 223cm、幅 117cm、高さ 65cm の緑色片岩の突き出た自然石を加工して、方形（一辺は 60cm ～ 65cm）の一重塔を作り出して、正面に金剛界の大日如来、左側面に釈迦如来、右側面に阿弥陀如来の、3 体の如来石仏を半肉彫する（像高 25cm）。背面は自然石のままという、極めて特異な形態の石造物である。（実測図参照）

管見では、同種の石造物は他では知らない。また、石造物の種目の一重塔についても、これまで、最古の遺物とされたのが、京都市内出土の弘安元年（1278）銘のもので（現在、所在不明）、現存では無銘の京都高山寺の鎌倉時代後期と推定されるものが一番古い。その点、本塔は国内一重塔中においても、最古の遺物と判断される。

3 体の如来はいずれも、ふくよかな連弁に座していて、二重円光を薄肉彫した中に刻出された如来の形もふくよかな造形を成している。銘文は無いが、それら全体の手法は鎌倉時代のもので、おそらくは同時代でも初期のもので、12 世紀末から 13 世紀初頭の作と推定する。

また、石仏だけでなく、その頭上に作り出された笠の形態も古式のものである。背が低く、左右によくのびて、軒は全体に反える真反りに近く、屋根の流れや、隅の降り棟の曲線のおだやかでおおらかとなっている。頂部には、方形の露盤を作り、その中央には宝珠を受けるための枘孔をうがっているが、その別石の宝珠は無くなっている。

つまり、本塔の構造は、二石彫成塔ということになるが、何故、わずかな大きさの宝珠を別石にしたのか、その意図は不明である。ただ、大型の自然石の岩倉を利用した丸堀の一重塔の石造物は他に類例が無く、全国的にも極めて貴重な遺物である。本塔造立の趣意は銘文が無いので不明であるが、その形状が岩石から湧き出た様子から推察されることは、金剛界大日如来が阿弥陀如来と釈迦如来を従えてこの世に現れたお姿を表現したものかと推定する。

その上、注目すべきは、本塔の方位が正しく東西南北を向いていることが挙げられる。向かって正面の金剛界大日如来が北を、右の阿弥陀如来が西を、左の釈迦如来が東を正しく向いている。これは、造立に際して意図的に作り出されたものであり、西方の阿弥陀如来は、同如来の浄土の極楽浄土が西方にあることに合致する。

石材の緑色片岩については、紀ノ川域に産出する緑泥片岩系のものである。和歌山県下における緑泥片岩製の石造物で、最古の遺物は鎌倉時代後期のものであり、同系の石材とはいっても、従来のものより、100 年以上はその石材の使用を遡らせる結果となった。石材工芸史上においても、本塔発見の意義は大きい。

なお、頬切地蔵の名称の要因となっているのが、正面の金剛界大日如来の顔面にある石材の割れ目である。これについては、掲載の実測図にもあるように、笠の正面右端から斜め走る岩石そのものの石材の亀裂であり、本塔造立当初よりあった割れ目と判断する。緑泥片岩系の石材は縦に割れるという性質があり、造形的には作成が困難であったのにもかかわらず、本塔ができたことも指摘される。

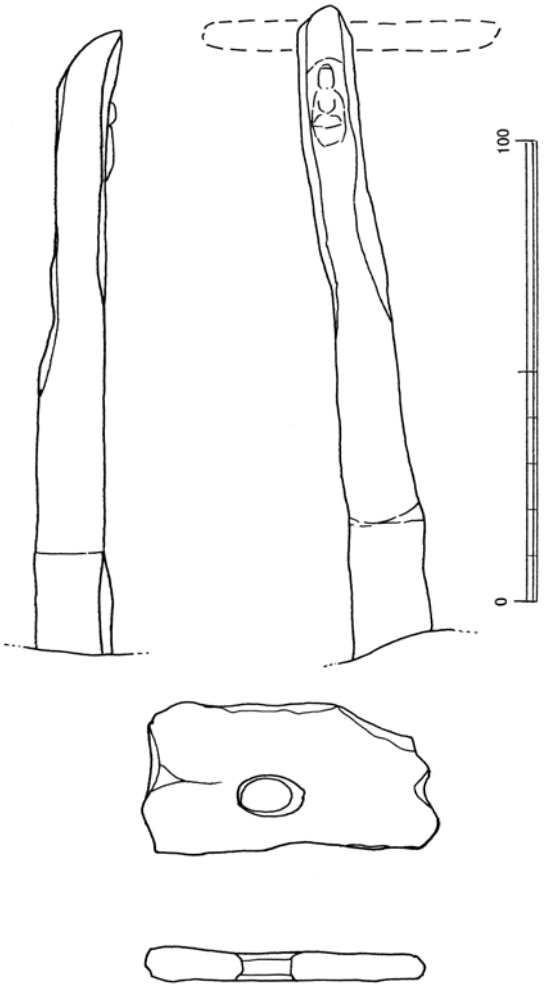
2　笠石（南北朝時代笠塔婆）

三谷道には、もう 1 基、貴重な石造物が道の脇に立つ。それが、笠石と称されているもので、三谷小学校の南 1㎞程道を登った所にある。伝承では、弘法大師空海の笠が、雨引山から風に飛ばされてこの石に掛かったとされている。

実は、本塔は石造物の分類でいうところの笠塔婆である。笠・塔身ともに原形を止める貴重な遺物である。地中に下部を埋め込む、埋込式となっている。現状で地中に埋め込むべき埋込部が地表に出でいる。塔身と埋込部ともに一石である。塔身は方形に面取し、埋込部は円柱状となっている。

法量は、塔身の高さ 112cm、幅 15cm、地表に出た埋込部分高さ 22cm、幅 16cm、笠の高さ 8cm・幅 65cm。

本笠塔婆も特異な形態で、塔身の上端を尖らせて笠を突きやぶる形態となっている。笠の上の宝珠は造らずに、その塔身の上端がその代用となっている。



三谷坂　笠石

このような構造の笠塔婆は、この他では知らない。この点でも、全国的にみても貴重な遺物である。石材は緑泥片岩石製で、塔身の下部を地中に埋め込む、埋込式となっている。

笠の形態も自然石をそのまま利用した特異なもので、通常の笠に見られる軒や反りが存在しない。

笠塔身の上部には、蓮弁に座る阿弥陀如来座像（像高 14cm）を半肉彫する。銘文は無いが、その形からは室町時代より以前の、南北朝時代のものと推定する。石塔は、元は木製であったものが石造化するが、本笠塔婆はまさに初源的な木製時代の卒都婆の名残を今日に伝えている形態であり、その点からも貴重である。

3　丹生酒殿神社所在の相輪

かつらぎ町三谷の丹生酒殿神社には、付近の兄井地区から遷宮された鎌八幡宮の御神体を納めた中世末から江戸時代初めに制作と推定される箱が奉納されている。

三谷坂　笠石

その箱の中には肝心の御神体は入ってなかったが、鉄製のはさみと、滑石製の宝塔の相輪が納められていた。その石塔の残欠の制作の時代は、12 世紀末から 13 世紀の初めの鎌倉時代初めの頃と推定される古式のものである。法量は、総高 24cm、最大径 9cm、上部の宝珠の最大径 6cm、下部の枘の高さ 4cm、枘の径 6cm。別石の笠の枘孔に接合するようになっている。

滑石製の石造物は、和歌山県下では打田町・和歌山市内等を中心として分布する。鎌倉時代初めの古式の石塔としては、宝塔がその種目として挙げられる。筆者の管見にある宝塔として打田町備前で見出したものは、塔身に四方仏を半肉彫するもので、その像容から一見して鎌倉時代初期として断定される古遺品であったが、今回発見の丹生酒殿神社所在の相輪もその系譜をひくものと考えられる。

このように、和歌山市側では見出さる滑石製石造物も、これまで伊都郡内では高野山奥之院における鎌倉時代初期から中期のものと推定される五輪塔の水輪の他はなかった。その点において高野山以外の伊都郡内では、はじめて発見された滑石製石造物で

ある。

第７節　勝利寺

九度山町勝利寺においては、これまで既に知られている室町時代の在銘の石造物が３基ある。今回の調査において、新たに在銘の一石五輪塔４基と五輪塔の地輪１基の新出の遺物を見出すことができた。この都合５基の石造物は一列に並んだ状態で見出され、以下に紹介する１が左端にあり、右へ、5. 4. 3. 2と並ぶ。

注目されるのは、その中の2. 3. 4の３基については、別石の基壇の反花座に立っていることである。一石五輪塔については、基壇とは遊離するものばかりであり、造立当初の形を今日に伝えるものは少なく、極めて貴重である。

1　室町時代五輪塔

砂岩製で、五輪塔の地輪部分のみの残欠品である。法量は、高さ12.4cm、幅17cm、上端には、別石の水輪を受けるための径3.6cm、深さ1cmの枘孔をうがっている。正面には梵字の「ア」を刻し「大山祐壽、大師、四月一日」と銘文がある。「大師」とは、「大姉」と刻すべきところを間違ったものと解するが、同様のケースは他に知らない。

2　天正８年（1580）一石五輪塔

砂岩製で、完形の一石五輪塔である。型式はそのままでも立てて置ける、安置式である。法量は、総高60.6cm、地輪高さ19.5cm、地輪幅16.2cm、奥行16.2cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪正面には「天正八年、為良月□□禅定門、四月四日」と銘文がある。天正８年（1580）４月４日に、良月□□禅定門のために造立された一石五輪塔と知られる。

3　天正８年（1580）一石五輪塔

砂岩製で、完形の一石五輪塔である。型式はそのままでも立てて置ける、安置式である。法量は、総高56.6cm、地輪高さ18.5cm、地輪幅16cm、奥行16.5cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪正面には「天正八年、為□□西信定禅門、十一月十二日」と銘文がある。天正８年（1580）11月12日に、□□西信禅定門のために造立された一石五輪塔と知られる。

4　天正20年（1592）一石五輪塔

砂岩製で、完形の一石五輪塔である。型式はそのままでも立てて置ける、安置式である。法量は、総高56.6cm、地輪高さ19.6cm、地輪幅16.4cm、奥行16.4cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪正面には「天正廿年、為妙仙禅定尼、菩提、十一月廿五日」と銘文がある。天正20年（1592）11月25日に、妙仙禅定尼の菩提のために造立された一石五輪塔と知られる。

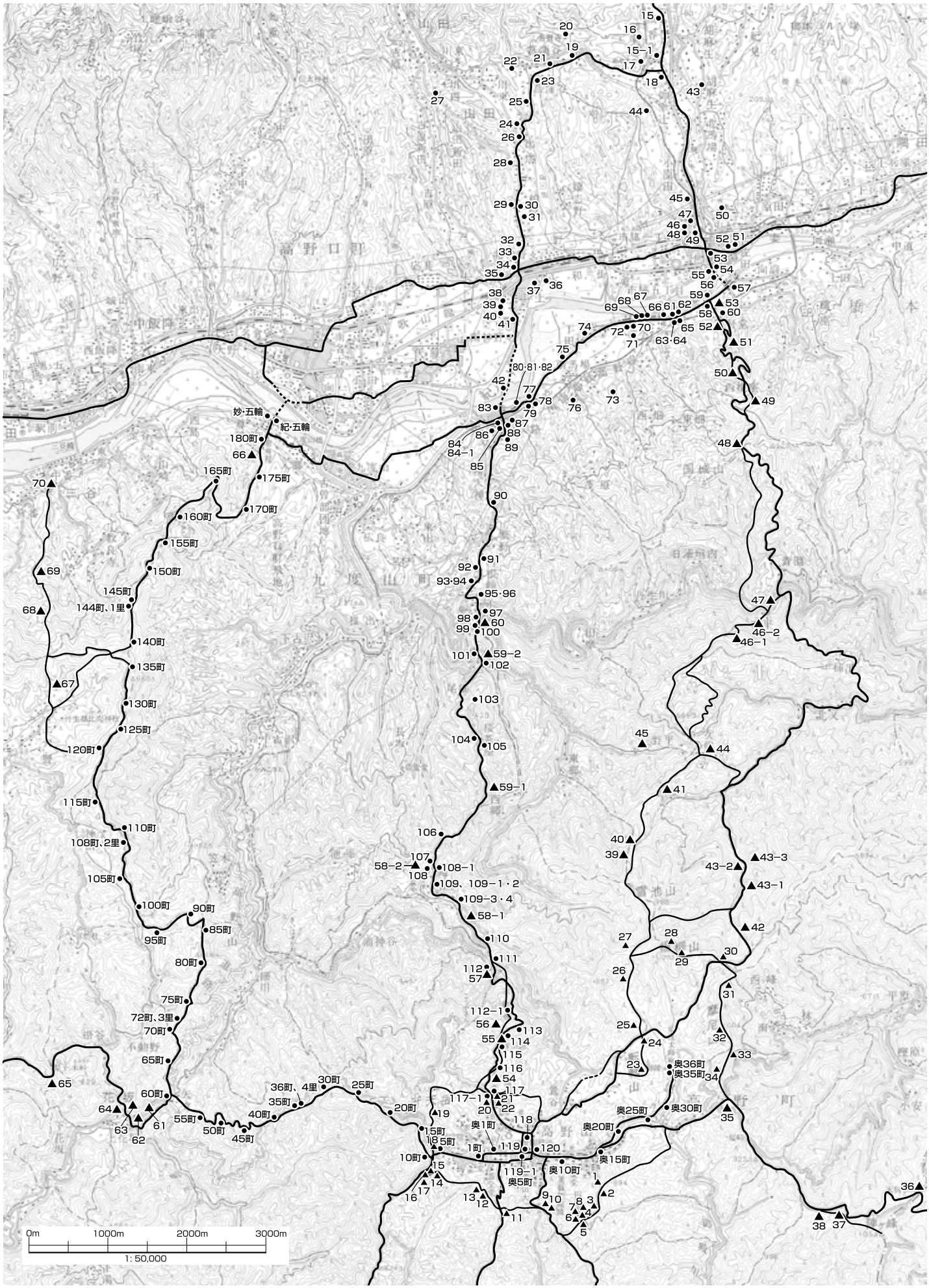
5　天正20年（1592）一石五輪塔

砂岩製で、完形の一石五輪塔である。型式はそのままでも立てて置ける、安置式である。法量は、総高55cm、地輪高さ18.8cm、地輪幅16.4cm、奥行16.2cm。正面に、五大種字の「ア」「バ」「ラ」「カ」「キャ」を刻し、地輪正面には「天正廿年、為香春妙禅定尼、逆修、十一月廿五日」と銘文がある。天正20年（1592）11月25日に、香春妙禅定尼が自身の逆修供養のために造立した一石五輪塔と知られる。

前記４と年月日が同一で、両者の一石五輪塔のタイプも同一である。被供養者の妙仙禅定尼と香春妙禅定尼は、何らかの人間関係があったものと考える。先に、妙仙禅定尼が没した後に、香春妙禅定尼がそれを受けて自分自身の逆修供養をしたのではなかろうか。

そうなると、天正20年（1592）11月25日は妙仙禅定尼の祥月命日であったことが考えられる。妙仙禅定尼の死に臨んで、香春妙禅定尼も自身の葬儀を行ったのであろう。このような事例は、夫婦間では見られるが、女性同士となると、今回はじめて知り得たケースである。

以上、限られた紙面の中で、それぞれの高野山参詣道上の石造物について概要を述べた。高野山における信仰の集積である石造物は、さすがに他に類を見ない遺物があって注目される。他では、史料の残存が少なく、石造物があってもその位置付け等苦慮するが、文献史料をはじめ、伝承など豊富な高野山においては、その石造物自身の性格についてもかなり明確になったものと考える。


高野口町
妙・五輪
紀・五輪
180町
165町
175町
170町
160町
155町
150町
145町
144町、1里
140町
135町
130町
125町
120町
115町
110町
108町、2里
105町
100町
95町
90町
85町
80町
75町
72町、3里
70町
65町
60町
55町
50町
45町
40町
35町
36町、4里
30町
25町
20町
15町
10町
5町
1町
奥1町
奥5町
奥10町
奥15町
奥20町
奥25町
奥30町
奥35町
奥36町
0m
1000m
2000m
3000m
1:50,000

石造物の所在図

石造物所在地一覧

▲平成23年度調査	
1	弥勒祠
2	地蔵祠
3	地蔵尊
4	地蔵尊
5	石灯籠
6	地蔵尊
7	結界石
8	五輪塔
9	不動尊
10	一石五輪塔
11	道標（地蔵）
12	道標
13	供養碑
14	地蔵尊
15	道標（助地蔵祠）
16	道標
17	五輪塔・一石五輪塔
18	五輪塔・一石五輪塔
19	地蔵祠
20	金仏（お竹地蔵）
21	道標（地蔵）
22	地蔵祠
23	反花座
	宝篋印塔
	弥勒・地蔵祠
	一石五輪塔
24	道標
25	道標
26	一石五輪塔（祠）
27	地蔵祠
	道標
28	道標
29	観音祠
	五輪塔水輪
30	道標
	地蔵祠
	一石五輪塔
31	道標
32	観音・地蔵祠
	一石五輪塔
33	地蔵祠
34	道標（役行者）
35	地蔵尊
	道標
36	道標（役行者）
	地蔵尊
37	道標
38	道標
39	五輪塔残欠
40	大黒岩
41	茶堂跡（弘法大師）
42	道標（観音祠）
	一石五輪塔
43－1	道標（弘法大師祠）
43－2	地蔵祠
43－3	五輪塔
44	道標（観音・弘法大師祠）
45	道標（地蔵祠）
46－1	地蔵尊
46－2	地蔵尊
	一石五輪塔
47	地蔵・弘法大師祠
	一石五輪塔
48	観音・弘法大師祠
49	弘法井戸（弘法大師祠）
	観音祠
50	観音・弘法大師祠
51	観音・地蔵祠
52	弘法大師祠
53	地蔵尊・五輪塔
	層塔・宝篋印塔笠
54	華瓶
55	一石五輪塔残欠
56	道標
57	五輪塔残欠
58－1	道標（地蔵）
58－2	地蔵祠・一石五輪塔
59－1	観音祠
59－2	地蔵祠・一石五輪塔
60	五輪塔地輪
61	一字一石塔
62	磨崖の名号碑
63	五輪塔
64	一石五輪塔（祠）
65	地蔵祠
	一石五輪塔
66	勝利寺
	一石五輪塔
	五輪塔地輪
67	一石五輪塔
68	頬切地蔵
69	笠石
70	丹生酒殿神社
	道標

●昭和55年度調査			
15	地蔵祠	72	不動堂（鎌不動）
15-1	道標	73	平谷池
16	道標	74	御影堂（成就寺）
17	八王子杜	75	道標
18	午頭天王寺	76	天満宮
19	道標	77	高野街道道標（三里石）
20	普賢寺	78	学文路大師
21	道標	79	地蔵尊
22	地蔵寺（子安地蔵）	80	境界石
23	道標	81	道標
24	道祖の森	82	舟繋ぎ石
25	道標	83	渡舟場
26	道標	84	道標
27	一言主神社	84-1	道標
28	薬師寺	85	八坂神社
29	證誠権現杜	86	新四国道標
30	西国巡礼供養塔	87	八王子神社
31	西光寺	88	西光寺
32	極楽寺	89	刈萱堂（仁徳寺）
33	道標	90	幡天神社
34	地蔵祠	91	一字一石法華塔
35	王子権現杜	92	硯水井
36	徳明寺	93	地蔵祠
37	西光寺	94	道標
38	地蔵祠	95	河根丹生神社
39	観音寺	96	日輪寺
40	神野々廃寺	97	塩竈・道標
41	文五郎石	98	中屋旅館・本陣
42	渡舟場	99	高野街道道標（二里石）
43	相賀八幡神社	100	千石橋
44	薬師寺	101	作水井（二ツ井戸）
45	太子堂	102	常夜灯
46	愛宕神社	103	延命地蔵
47	不動明王地蔵	104	桜茶屋
48	妙楽寺	105	地蔵祠
49	観音寺	106	明治4年仇討の墓
50	陵山古墳	107	高野街道道標（一里石）
51	応其寺	108	神谷宿・茶店（出水家）
52	延命地蔵	108-1	道標
53	道標	109	供養碑
54	高野街道道標（四里石）	109-1	道標
55	常夜灯	109-2	道標
56	渡舟場	109-3	道標
57	二軒茶屋	109-4	道標
58	三軒茶屋	110	四寸岩
59	常夜灯	111	極楽橋・道標
60	定福寺	112	地蔵祠・道標
61	西行堂（地蔵堂）	112-1	道標
62	道標（地蔵）	113	万丈転
63	道標	114	稚児の滝
64	道標	115	清の不動・道標
65	清水三井の一	116	供養碑
66	清水三井の二	117	女人堂・道標
67	萱野家（庄屋）	117-1	道標
68	常夜灯	118	道標
69	渡舟場	119	道標
70	神皇神社	119-1	道標
71	清水三井の三	120	道標

第８章　史跡としての価値

高野山は、弘法大師信仰、納骨信仰、浄土信仰など様々な形態の信仰が時代を追って広がりをみせ、また、総菩提所として日本有数の霊場に発展した。その霊場を囲む様に聳える峯々の尾根筋を辿る道が金剛峯寺境内地の外周と重なり、その要所に、女人堂・山之堂などが建てられた。「高野七口」と呼ばれた各々の出入口から放射状に伸びる参詣道を利用して多くの参詣者が全国から訪れ、それぞれの高野参詣道自体もまた「高野七口」と呼ばれた。その代表的な参詣道である「高野山町石道」は、平成16年７月に世界遺産（文化遺産）に登録されている。また、高野山と熊野本宮の両霊場を最短で結ぶ参詣道「小辺路」についても同様である。

本報告書の主たる目的は、高野参詣道として高野山結界道、不動坂、黒河道、大峰道、西国街道及び三谷坂並びに関連文化財として高野山町石道の起点がある慈尊院地区に位置する勝利寺、黒河道の起点がある賢堂地区に位置する定福寺及び三谷坂の起点がある三谷地区に位置する丹生酒殿神社について、各専門家による文献、史料、石造物及び文化財調査に基づきその歴史を明らかにし、学術的価値付けを行うことである。本章では、各専門家による調査の成果を踏まえたうえで、「史跡」としての価値について検討を行う。

第１節　高野参詣道及び関連文化財調査範囲

平成22年度に実施した参詣道及び関連文化財調査により、和歌山県の歴史を考える上で重要な交通関連の史跡として38の候補があげられた。高野参詣道に関しては、「高野七口」と称される参詣道あるいはそれに繋がる街道を調査対象としたが、コンクリート舗装などによる著しい改変が認められるものについては当初から調査対象としていない。また、昭和54年度及び昭和55年度に和歌山県教育委員会が高野山参詣道について実施した「歴史の道調査」に含まれ、『歴史の道調査報告書（Ⅲ）、（Ⅳ）』（和歌山県教育委員会 昭和55、56年）で詳細報告されている参詣道に関しても調査対象から外しているが、その中で「龍神街道（湯川口）」に関しては、車道に並行して古道が所々残っていることが報告されている。また、「京大坂街道（不動坂口）」に関しては、紀の川以北が詳細に報告されていることから、今回は紀の川以南の改変を受けていない部分を調査対象とした。

「歴史の道調査」で詳細報告されていない「熊野街道（相浦口）」については、「高野七口」の一つであるが、踏査の結果、笠松峠以南については通行不能の部分があること、笠松峠から高野山までの間が林道となって改変を受けていることなどから本報告書においても詳細についての調査報告を省略している。

参詣道の調査対象地域は、橋本市、かつらぎ町、九度山町、高野町の１市３町である。以下、高野参詣道及び関連文化財を、平成23年３月に県史跡指定された文化財と共に特定する。

第２節　構成要素

１　高野山結界道

高野山結界道は、金剛峯寺境内地を囲む峯々を回峯する「女人道」、奥院御廟を囲むように背後に聳える摩尼山、楊柳山、転軸山をめぐる「高野三山」の道からなり、かつての山岳霊場高野山の聖域と周辺の俗界とを区切る結界線とほぼ一致し、女性の立ち入り禁止をはじめとした様々な禁制がその内側に敷かれた。江戸時代、『紀伊続風土記』（高野山之部巻之九、總分方巻之四）によれば「三山めくりとて拝参の人多し……」などと僧侶に加え一般人も三山巡りをすることが盛んとなり、また、女性の高野参詣が増えてくると案内人をつけての「山廻り」（『現代仏教』1933.6 神亀法寿著「女人結界の廃止顛末」中の古記録引用文にある。）とも称される高野山に結縁するための女人堂巡りが行われるようになる。「高野七口」などにあった女人堂をめぐる道が「女

人堂道」または「女人道」とも称されて絵図などに描かれている。『紀伊国名所図会』（巻之四）には、「今は結縁のために結界の外郭を巡拝せしむといへども、……」と結界の道を巡礼する様子を窺わせる記述がある。

総延長約16㎞に及ぶ山道は比較的よく保存され、平成12年度には『高野山女人道』としてその大半が高野町指定史跡となっている。

「高野三山」の道については、転軸山西側の登り口から右回りに辿れば、山頂を経て奥院周回道路と交差後、黒河道とも重なる粉撞峠（粉搗、粉突、子継峠などと記される。）への道を辿り、峠で分岐する尾根筋の道は楊柳山、摩尼山を経て摩尼峠に至る。摩尼峠では旧摩尼集落から奥院への道と交差し、直進すると国道371号線の隧道手前の尾根で分岐し車道に合流する。杉、檜の植林や自然林の中を抜けていく山道であって山頂や峠に小祠、五輪塔、石の道標などがあり、遺存状況は良好である。

「女人道」についても尾根筋の山道は車道や林道と交差しながら、その遺存状況は概ね良好であり、小祠、五輪塔、石の道標、石仏などが道沿いの要所にある。まず、高野山金剛峯寺の艮（北東）の入口にあたる黒河口女人堂跡から左廻りに辿れば、現在、その女人堂跡付近は町道によって分断されているため迂回して明神社から尾根筋に登る。尾根筋からは、杉、檜の植林を抜けて現存する唯一の女人堂がある不動(坂)口へと山道は続いている。不動(坂)口女人堂からは、バス専用道に沿って狭小なコンクリート道・地道を登り、かつての京大坂道・不動坂から弁天岳、大門へと至る尾根筋の古道と接続する。山道は杉、檜の植林の中、谷上女人堂跡を経て弁天岳に登ると弁財天を祀る社殿などがある山頂に至る。山頂からの下りでは、大門口制札跡付近で高野山町石道から分岐してきた古道と合流後、さらに下って大門に至る。大門からは車道を横断して龍神口女人堂跡から杉木立の中、幅員３ｍほどの地道が「助けの地蔵」のある熊野辻まで続く。龍神・熊野への石の道標を東に熊野方面への山道を辿ると一旦舗装路に出て再び山道に入り高野山霊宝館裏の舗装路に出る。尾根筋の山道を登って行くと相浦口の林道と交差し、地蔵石仏の道標に従ってさらに登った後、急な坂を下ると大滝口女人堂のあった轆轤峠近くの林道に出る。林道は「小辺路」と重なり南東に進むと円通律寺への分岐を左に東へと山道を下る。円通律寺を過ぎると地道であるが車道として拡幅された道を行く。分岐を左に北へと山道を進むと弥勒峠、峠を過ぎて分岐を右に行けば大峰口女人堂跡などがあり、植林の中を東に進むと最後に急な坂を下り、制札のあった大峰口跡、現在の「中の橋駐車場」付近に出る。

高野山結界道を構成する「女人道」及び「高野三山」の道の遺存状況は極めて良好であり、したがって史跡としての価値は高い。

２　不動坂

「京大坂道」は、『紀伊国名所図会』（巻之四）にある「登山七路」の一つであり、不動（坂）口、学文路口、神谷口、京口又は大坂口などとも称された。不動坂は、高野山を眼前にして京大坂道の最後で最大の難所として知られていた。

木食応其の事績などが記された「興山上人橋本開基縁起」によれば、応其上人によって山麓の橋本に応其寺が開基され、天正15年（1587）、紀の川に橋が架かるなど、渡し場のあった橋本が宿場や塩市によって栄えることとなる。『紀伊続風土記』（高野山之部巻之五十七）に「大坂口の通路甚艱峻狭屈なりと思わる今はさにあらす肩輿も借に便宜ありて女人堂までは到るなり室町日記を考るに太閤登御の日此等の路を開通せしならん」との記述もあり、江戸時代には街道が整備されて京大坂道が高野参詣の主街道となっている。

橋本の対岸にある三軒茶屋の渡し場から、清水、学文路、河根、神谷などを経て不動坂を登り高野山上の不動（坂）口女人堂へ至るルートであって、町石道よりも短時間で高野山に着くことができる。南海電気鉄道の高野線極楽橋駅付近から女人堂までの急峻で険しい不動坂は、大正初期に新たな道が並行してできたことにより利用されなくなった。その後、昭和初期に極楽橋駅から高野山駅間にケーブルカーが敷設されたことで、その新たな道も利用されなくなったが、結果として、不動坂が山中に取り残され

たことにより改変などから免れ、古道として極めて良好な状態で保存されることとなった。

不動坂手前には弘法大師の足跡があるとされる「四寸岩」があり、神谷集落近くまで女人堂への距離などを示す石の道標が並ぶが、かつての桟橋が朽ち果て通行不能となっている。不動坂の登りはじめには「いろは坂」、尾根筋に出ると罪人の処刑場跡「万丈転がし」、「外の不動（堂）」跡、馬廻道との辻に今回の調査で地中から掘り起こされた石の「道標」、稚児の瀧を見下ろす「岩不動」などがある。「外の不動（堂）」は大正9年に移築されており、「清不動（堂）」とも呼ばれている。その手前で舗装路と交差して、堂の裏手から「花折坂」を登りきると今回の調査で地中から掘り起こされた2基の「華瓶」、さらに左手に供養塔、不動明王、地蔵菩薩の石像が並ぶ。再び舗装路と合流後、弁天岳から大門へ至る尾根筋の古道との分岐を経て不動（坂）口女人堂までには、『紀伊国名所図会』（巻之四）で描かれている多くの史跡が不動坂に点在する。

不動坂は平成23年度の古道整備により再び高野参詣道としてよみがえり、その遺存状況は極めて良好であることから史跡としての価値は高い。

3　黒河道

黒河道は、『紀伊国名所図会』（巻之四）に「橋本邊よりの近道」とある「登山七路」の一つであり、黒河口、久保口、大和口、千手院（谷）口そして粉撞峠を越えることから粉撞峠口などとも称された。同書には、「黒河村より来ると、野平村より来ると、粉撞峠にて二路合して、千手院谷に入る。」とある。「黒河村まで五十餘町（約5.5km）」とするのが黒河口、「野平村まで百二十餘町（約13km）」とするのが橋本・大和方面への道、大和口である。

『太平記』に「光厳院禅定法皇行脚事」として法皇の高野山御参詣と御下向について記述がある。「行末心細き針道を経て御登山有りければ、山也山、水又水、登臨何日盡さんと、身力疲れて……」との針道（高野山町石道）登山の様子に対して、「御下向は大和路に懸からせ給ひしかば、道の便も能とて……」とあるのが高野山から吉野（大和）へ向かう下山の様子についての記述である。

黒河道は橋本近辺から奥院又は高野山千手院谷への近道であり、「千手院（谷）口」とも称されたが、高野山文書を代表する『宝簡集』に編纂された「禁制　條々」（応永21年1414）に、「旅人引制札案文千手院口に立つべし」との端書があり、参詣人を誘引する事などを禁じている。

橋本から高野山への最後の難所として粉撞峠を越え、その制札が立てられた千手院（谷）口に至る。『紀伊続風土記』（總分方巻之十一）の記述によれば平清盛が「金堂の曼荼羅を此院にて図せられしとそ」とする曼荼羅院が千手院谷にあり、その院主検校重任（金剛峯寺座主）が、粉撞峠に地蔵石仏（永正9年1512）を建立していることが今回の調査で確認された。

「千手院谷」は、念仏を唱える高野聖三大集団のひとつ千手院聖（時宗聖）の本拠でもあった（『高野聖』五来重著 角川新書1965）。なお、山麓の橋本市賢堂付近では、高野山へと向かう黒河道沿いの尾根筋に「念仏尾」、「堂の尾」、「聖尾」、「傳道坊」などの地名もあり、高野山で広まった念仏の影響が山麓周辺地域にも及ぼしていたことが指摘されている。

橋本のまちを開基した応其上人は、千手院谷瀧城院に寄宿していた日々があった。また、橋本の南西、黒河道沿いに聳える国城山と寺院名で繋る千手院谷国城院では、応其上人が月並連歌興行を始めたことが『紀伊続風土記』（總分方巻之十一）に記述されている。

奥院御廟橋手前に、「木食所」と呼ばれる建物があって、応其上人はそこを拠点として勧進活動を行う高野聖を支配していたとも考えられている（『特別展没後四〇〇年木食応其－秀吉から高野山を救った僧－』和歌山県立博物館 2008）。なお、豊臣秀吉下山の折り応其上人が同行したと考えられる道も千手院谷から橋本への山道であったことが『紀伊続風土記』（巻之五十一、高野山之部巻之十一、總分方巻之五）などに記され「此を今に太閤道といふ」との記述がある。

高野山絵図のなかで黒河口女人堂付近から山外に出る道を「丹生川道」としているものがある。『紀

伊続風土記』（巻之四十五）に「村領の内三尾川領東郷村と北又郷の間に斗折蛇行して長く突入り銅ヶ嶽の地に至るあり其所を雪生といふ」とあるように旧丹生川村の土地が銅ヶ嶽（雪池山）まで細長く繋がっていたとすれば、雪池山頂上付近に丹生神社の社地があることから旧丹生川村から山頂までの道の存在と、東郷と北又の両大字界付近を通っている黒河道（太閤道）との繋がりが窺われる。

黒河道（太閤道）は、旧丹生川村の東で「わらん谷（藁谷・蕨谷）」を通過するが、その名称について『紀伊続風土記』（巻之四十五）に「藁蓋谷の義にて鎮座所のよしにいへるか」とあるように「わらん谷」と丹生川丹生神社との関わりを示唆する。

丹生神社の起源を考えると伝承では成立年代を慶雲（704 ～ 708）以前としていることから金剛峯寺創建より古く、絵図に黒河口女人堂からの道を「丹生川道」としているものがあるように、黒河道（太閤道）は、丹生神社の別当寺である円通寺と高野山との往来などに利用されるなど、旧丹生川村との繋がりが窺われる。

江戸時代の『高野山領の図』（金剛峯寺蔵）に高野山の領地を結ぶ道筋が描かれていることから黒河道（太閤道）を辿ることができる。それによると高野山から黒河・佛谷を経て久保、又は高野山から直接久保へと続き、市平・賢堂・河南大和街道に繋がる。『九度山町史』（九度山町史編纂委員会　昭和 40 年、平成 16 年、平成 21 年）によれば黒河道は高野山千手院谷から黒河・久保・美砂子・市平・青淵・明神ヶ田和・清水を経て橋本までとしている。また、九度山町公民館報に昭和 34 年 7 月から 35 年 9 月まで転載された郷土史家による『玉川四十八石附仝和歌古今集』に「橋本から明神ヶ田和を越え、市平、久保、黒河を通り奥の院の裏に出るのを裏参道としたのは……」とあり、裏参道（黒河道）のルートが挿し絵に描かれている。

現在、橋本の紀の川対岸にある二軒茶屋周辺は区画整理や南海電気鉄道高野線の軌道などにより街道は大半が原形をとどめていない。したがって鉄道の踏切を渡り一段高い賢堂地区にある定福寺近辺が実質の起点となる。そこから国城山東麓の明神ヶ田和まで市道が整備されているが、そのカーブをショートカットするように、また、並行して古道が五軒畑集落、弘法井戸のある鉢伏集落を繋ぎながら峠（明神ヶ田和）を越える。峠を斜め左に進むと林道（市道・町道）となって青淵集落付近まで続き丹生川を渡るが、集落手前の未整備区間に改変されていない山道が良好に遺存している。一方、峠から直進するとわらん谷（藁谷・蕨谷）であり、急な坂を下り周辺集落の水源地に至るまで舗装路が続いている。その区間は古道がなかば消滅してしまっているが、簡易水道の取水施設を過ぎると谷沿いの道が良好に遺存し整備も進められている。県道宿九度山線と交差してからは、丹生川を渡るために町道の市平橋を渡り市平集落へ向かうが、少し上流に現在通行止めとなっている吊り橋の上市平橋があり、その北詰に地蔵菩薩及び弘法大師の石像が祀られて「為往来安全」の文字が刻まれている。市平集落を過ぎると大師堂及び観音堂のある観音寺跡並びに桂の大木が聳える春日社から九十九折りの坂を登る。林道に合流するまでには見過ごしがちであるが地蔵石仏もあって、植林の中に道は良好に遺存している。林道と交差して戦場山東側の中腹をほぼ水平に行く道は、太閤坂と呼ばれる戦場山の迂回ルートであって、倒木処理等の整備が必要な箇所があるものの遺存状況は良好である。また、林道終点近くから戦場山を越える道は、山間の休耕田や植林された水田跡の中を縫うように登る山越えのルートとなっている。両ルートが戦場山南側の久保小学校手前で合流し、観音菩薩と弘法大師が彫られた石の道標にも「往来安全」の文字が刻まれている。そのまま直進すれば地蔵石仏を祀る粉撞峠へと向かう太閤道であって、「茶堂（茶屋）」跡及び通称「大黒岩」並びに室町期からの五輪塔残欠群がある「高野豆腐製造所」跡などが道沿いにあり、粉撞峠手前の国有林内に道幅の狭小な箇所があるものの、山道の遺存状況はほぼ良好である。

一方、小学校手前を左にとれば舗装された町道を進み、さらに黒河林道を行く。林道の終点から「ひうら坂」を登り雪池山の南にある黒川峠から粉撞峠を越える山道が古来からの黒河道と推測される。町道、林道に並行して残っている古道は、全体的に踏

み込まれた道としての形跡が薄く、なかば消滅しかかっている。また、「ひうら坂」については、道の遺存は認められるものの荒廃の著しい箇所があって整備方法など検討を要する。

粉撞峠には地蔵石仏を祀る小祠と石の道標が並び、峠を下る山道は高野町指定史跡『高野山女人道』とほぼ重なるが、転軸山には登らずに巨木が聳える一本杉から高野町役場手前の黒河口女人堂跡に至る。転軸山麓から黒河口女人堂跡までの区間は、車道と住宅地の中などにあり原形をとどめず特定が困難な部分がある。

「ひうら坂」を通らず、旧黒河村平集落跡を経て楊柳山の東側、現在黒河峠と称されている桜峠（黒子辻）を越え、奥院裏に至る道を「黒河道」としてハイキングルートなどでも紹介されている。しかし、高野山絵図や『紀伊続風土記』（高野山之部巻之六）では「佛谷道」となっていることから、「ひうら坂」が通行されなくなった後、「黒河道」と称されることとなり現在に至っている可能性が高い。いずれにしても、奥院に至る最短ルートでもあることから江戸期にはよく利用されていたことが道沿いにあり、又は別の場所に移動している弘法大師像などの石仏の道標などから推測できる。石垣の残る平集落跡の沢沿いと植林された山中に道は概ね良好に遺存している。

野平集落近くに「右　おくのゐん」と刻まれた地蔵石仏の道標があることから納骨など奥院への道でもあり、裏参道として貴顕の通行を物語る伝承がある黒河道（太閤道）は、奥院及び千手院谷に通じる高野参詣道であり、史跡としての価値は高い。

4　大峰道

大峰道は『紀伊国名所図会』（巻之四）にある「登山七路」の一つであり、大峰口、東口、野川口などとも称された。大峰・洞川から奈良県境の天狗木峠を越えて桜峠から高野山・奥院に至る道であって、「俗此道筋を七度半道といふ。一度此道より登詣すれば、功徳七度半にあたるとぞ。」と大峰山・高野山という二つの霊場を結ぶ道として、その霊験功徳について記している。

巡礼道として江戸時代の道中記が残され、道沿いには役行者を浮彫した石の道標も点在している。修験の道、空海抖擻の道と同様、高野山と山上ヶ岳を結ぶ道であって成立時期は中世に遡るとされる。『紀伊続風土記』（高野山之部巻之六）に「大峯道圮橋の東にて右路は奠供木峠に至り左路は摩尼荘へ至る」とあるが、大峰口からの右路は桜峠近くまで車道や住宅地内にあってなかば消滅して原形をとどめていない。左路については国道371号の舗装路から分岐して隧道上で摩尼峠からの道と尾根筋で繋がる。

大峰道は、大峰・洞川から山上川、天ノ川、中原川などの川筋の集落を繋いだ街道ルートが奈良県境で天狗木峠を越える道となり、また、尾根筋を通るとされる修験道ルートが天狗木峠近くで車道と合流して、その両ルートが峠で交わっている。天狗木峠には、役の行者像の石の道標があり、立里荒神社と高野山へ舗装路が分岐する。高野山への車道途中に立里荒神社への旧「こうしん道」の分岐があり、宿があったという桜峠では、車道と摩尼峠に向かう尾根筋の道が分岐する。山道は国道371号線の隧道上を過ぎ、地蔵石仏前に横たわる「こうしん道」の石の道標近くで「高野三山」への道に繋がる。植林の中、尾根筋の山道は若干の整備が必要であるが良好に遺存し史跡としての価値は高い。

5　西国街道

『紀伊国名所図会』（巻之四）に「府下より登るものは、麻生津峠より志賀郷を経て、矢立にて此道に合し、大門に入る。……」とあるように、西国街道は、「登山七路」の一つ大門口、西口、矢立口などと称された表参道「高野山町石道」とは、梨木峠を越え花坂を経由して矢立で合流する。麻生津口、若山口又は麻生津街道、わかやま街道などとも称された道である。

山麓の麻生津には茶屋・旅舎があって、絵図に麻生津峠での茶店の賑わいが描かれている。また、『紀伊続風土記』（巻之四十九）には、花坂について「麻生津よりの高野街道にて旅舎多く駅舎の体山家の趣なし」とその街道沿いの賑わいの様子が記されている。

道沿いの石の道標や地蔵石仏などは、江戸時代の

ものがほとんどであるが、麻生津峠近くのかつらぎ町御所に南北朝時代のものと推定される五輪塔などがある。また、花坂の集落に入る手前の道沿いには、通常の2倍以上の大きさがある一石五輪塔、川を隔てた山腹に室町時代のものと推定される五輪塔などがあり、仁和寺門跡の御陵、隠棲庵跡などがあったと伝えられている。

元禄期に編纂された『高野春秋』などに登場する高野山の再興や中興を成し遂げた高僧の記録や逸話に麻生津峠などが舞台となっているものがある。このことから、西国三十三所第三番札所の粉河寺と高野山を結ぶ西国街道と称された道の成立時期は古く、平安時代に遡るとされる。

山麓の麻生津から観音堂や六地蔵のうち「三の地蔵」がある麻生津峠を越える道は舗装路が続くが、清川から「四の地蔵」のある日高峠を経て石の道標が並ぶ市峠までの間、そして距離は短いが、梨木峠「五の地蔵」のある前後については、植林の中、山道が良好に遺存しその価値は高い。

6　三谷坂

三谷坂は、かつらぎ町三谷の丹生酒殿神社から笠松峠（古絵図及び地名には三谷峠とある。）を経てかつらぎ町天野の丹生都比売神社に至る急峻な峠越えの坂道である。かつては紀の川にあった船着き場「三谷津」あるいは河南大和街道からの分岐を起点とした「天野道・三谷道」の一部でもある。高野山へは笠松峠から直接六本杉峠（天野辻）又は丹生都比売神社を経由して高野山町石道に合流し高野山大門に至る。

道沿いには、「笠石」、「鉾立岩」、「涙岩」、「頬切地蔵」、「的岩」など多くの史跡が点在し鎌倉期まで遡るとされるものがある。天野丹生都比売神社の神主による紀の川での垢離や三谷での祭祀など天野との往来が金剛峯寺創建より古くから続いているとすれば、三谷坂は平安前期をさらに遡ることも考えられる。また、高野参詣について、京都仁和寺門跡が辿った記録などから三谷坂が利用されている。坂道は、麓から丘陵の中腹にかけて果樹栽培の作業道となっているが、上部では、杉の植林地内を地道が続いている。

三谷坂は大規模な改変はされておらず、古代からのルートと形状を保持しているものと考えられ、平成23年3月には丹生酒殿神社西側から県道志賀三谷線に交差する笠松峠付近までの約2.5㎞の部分について県史跡指定を受けている。笠松峠から上天野、又は六本杉峠まで、そして上天野から六本杉峠までの道についても植林の中、良好に遺存しその価値は高い。

第3節　関連文化財

1　勝利寺

勝利寺は、表参道高野山町石道の起点がある山麓の慈尊院からおよそ300ｍの町石道沿いに一段高く位置し、萬年山世尊院とも称された。本尊とする平安後期作十一面観音菩薩（町指定）は、『十一面観自在菩薩心密言念誦儀軌経』によれば、離諸疾病をはじめ10種類の現世での利益（十種勝利）と4種類の来世での果報（四種功徳）をもたらすとされ、また「勝利」とは仏教語で「勝れた利益（りやく）」を意味している。

当寺については、弘法大師以前の創建として、高野山開創時における天野を経て高野山への登山時の寄宿、慈尊院伽藍建立時の役割などについて伝承が残っている。高野山開創後も有力者の難病治癒伝説、仁王門再建時の奥院神木「明遍杉」の使用、大師及び母公の所持物並びに貴顕による寄進の仏像など多くの宝物類があったことが『紀伊続風土記』（巻之五十、高野山之部巻之二十二）などに記されている。また、本尊参拝について江戸初期一無軒道冶著の「高野山通念集」では「高野の僧侶一國の里民物詣し奉り、貴賤袖をつらねて、道もわかたぬ群集、……」と高野山からの僧侶と参拝者による賑わいの様子が記されている。

『高野春秋』には、当寺の境内地に高野山の伽藍炎上による堂塔造営に関わった紀伊守大江景理（長徳4年（998）任官）の墓所があるとの記述があり、さらに、勝利寺墓地及びその周辺には室町時代の石造物が数基、また、今回の調査で時代は下るが本堂奥の竹藪からは天正期の五輪塔群が確認された。『紀伊続風土記』（高野山之部巻之二十二）には、「後白

河院高野登御の時當院に宿御したまふ……」との記述があり、天皇家が高野山への納骨時に御幸門から使者が入るなど勝利寺が宿所としての役をはたしたことが当寺の古文書などの記録にある。なお、国史跡の庭園から紀の川平野への眺めと景観は非常に勝れている。

勝利寺境内地は昭和52年7月に指定された国史跡「高野山町石」の一部でもあり、高野山開創時から慈尊院、丹生官省符神社とともに役割を分かちながら、高野参詣道「高野山町石道」と一連の施設であって、史跡として重要である。

2　定福寺

定福寺は、橋本市賢堂地区に所在する。紀の川上流の南岸、国城山北麓の東西に細く延びる比較的未発達な低位段丘にあり、高野七口の一つ黒河道の登り口に位置する。

寺の沿革は不詳であるが、永禄年間に当地へ移築されてきたものと伝えられ、平安中期の本尊・阿弥陀如来座像（県指定）や、境内に立つ弘安8年（1285）銘のある石造九重塔（市指定）などに、歴史の一端を窺うことができる。また、本堂の南西に建つ庫裏（国登録有形文化財）は、格式が高く当地方における江戸期の建物の一例として貴重なものであるとともに、高野山の里坊であった可能性が指摘される。

高野山で広まった念仏の影響が山麓周辺地域にも及ぼし、定福寺に念仏鉦、太鼓及び古文書ほか多数の関連品が伝わる。古文書の年代などから江戸時代初期頃には六斎念仏が行われていたとする。また、『紀伊続風土記』（巻之五十、總分方巻之十五）などに河内國平野の大念佛との関連があるとする阿弥陀如来画像の由来が記されている。

なお、定福寺のある橋本近辺から高野山・奥院への近道とする黒河道は、「千手院（谷）口」と称されていたように、念仏を唱える千手院聖（時宗聖）の本拠「千手院谷」に至る道であって、千手院谷には、『紀伊続風土記』（總分方巻之十一）の記録によると河内平野融通大念佛寺と関わり深い眞福院があったとする。

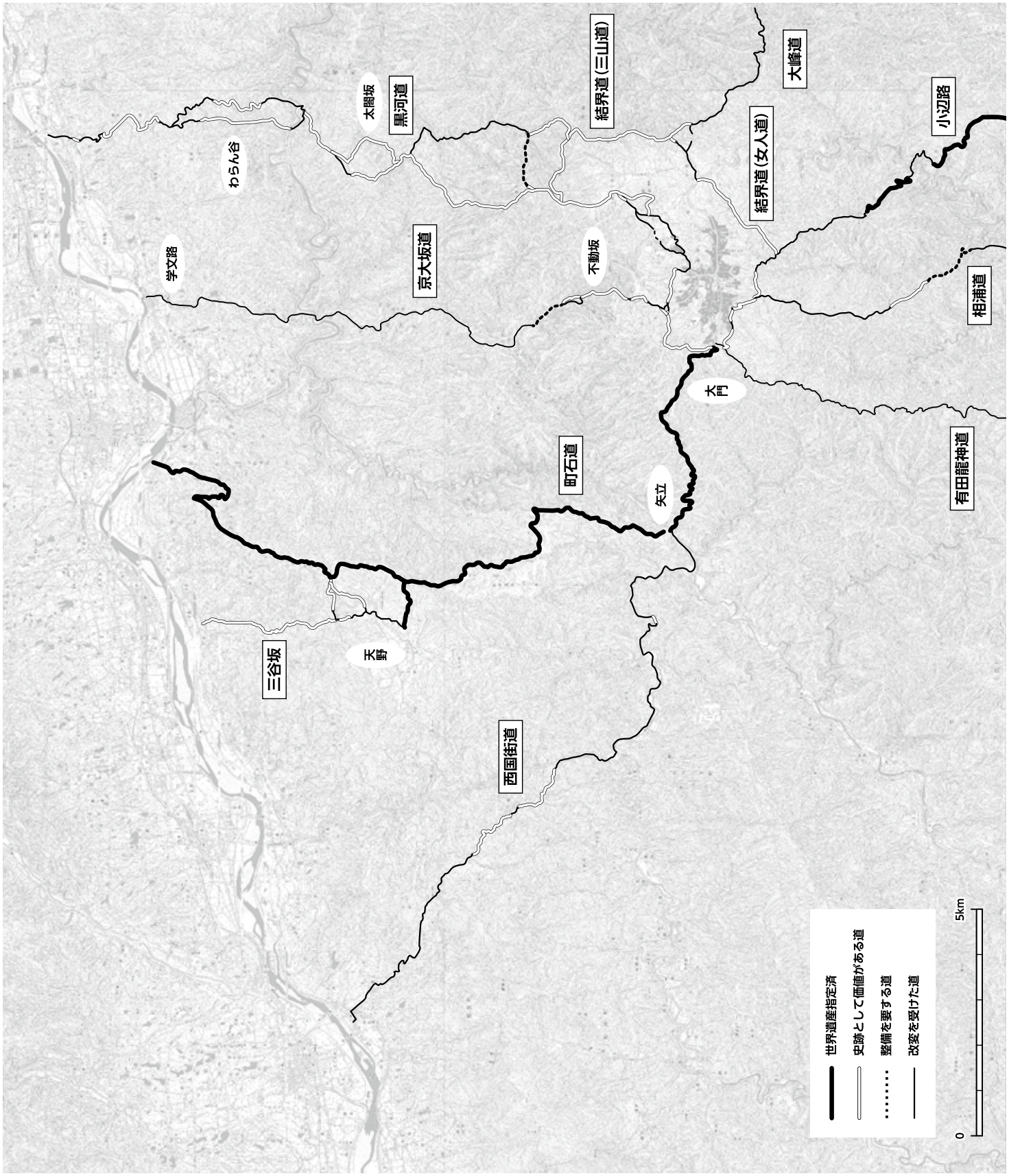
『紀伊続風土記』編纂用の「横座村提出絵図控（横座区文書）」の中で、高野山への道筋に八幡社とともに描かれている定福寺境内地は、高野参詣道「黒河道」と一連の施設であり重要である。

3　丹生酒殿神社

丹生酒殿神社は、天野丹生都比売神社への参道であるとともに高野山への参詣道としても利用された三谷坂に近く、かつらぎ町三谷地区の一段高い位置にあり、周辺には金比羅宮、大師堂などがある「三谷津」、河南大和街道の三谷坂分岐、丹生明神の降臨地とされている「七尋瀧」のほか「宮瀧」、「竈明神社」など丹生都比売神社と関わりの深い史跡が多くあり、天野・高野参詣者にとって三谷坂の実質的な登り口にあった。

『紀伊国名所図会』（巻之三）では酒殿明神社について「當社を天野摂社の随一として、……」とあり、『紀伊続風土記』（高野山之部巻之二十一）には丹生都比売神社の正月行事として「摠神主歩初と號し三谷大明神へ社参して御供物を獻し……」とあるように「随一」、「歩初」及び「大明神」といった記述から丹生都比売神社にとって丹生酒殿神社が重要な位置を占めていたとされる。また、『高野山と真言密教の研究』（五来重編 2000.11）の中で、和多昭夫著「高野山と丹生社について」によればその山上（中腹）、山下の位置関係から、丹生酒殿神社が里宮であるのに対して丹生都比売神社はその山宮（中宮）に当たると考えられ、丹生酒殿神社が現状以上に重要な地位にあったとする。

丹生総神主家伝来の天野大社周辺絵図（高野山大学所蔵）をはじめ高野山絵図などで三谷坂の登り口近くに描かれている丹生酒殿神社境内地は、天野・高野への参詣道「三谷坂」と一連の施設であり重要である。


学文路
わらん谷
太閤坂
黒河道
京大坂道
不動坂
結界道(三山道)
結界道(女人道)
大峰道
小辺路
相浦道
有田龍神道
大門
矢立
町石道
三谷坂
天野
西国街道
世界遺産指定済
史跡として価値がある道
整備を要する道
改変を受けた道
0
5km

高野参詣道調査略図

高野山結界道、不動坂、黒河道、三谷坂及び
関連文化財学術調査報告書

発　行　日　　平成24年3月31日
編集・発行　　和歌山県教育委員会
印　　刷　　株式会社ウイング